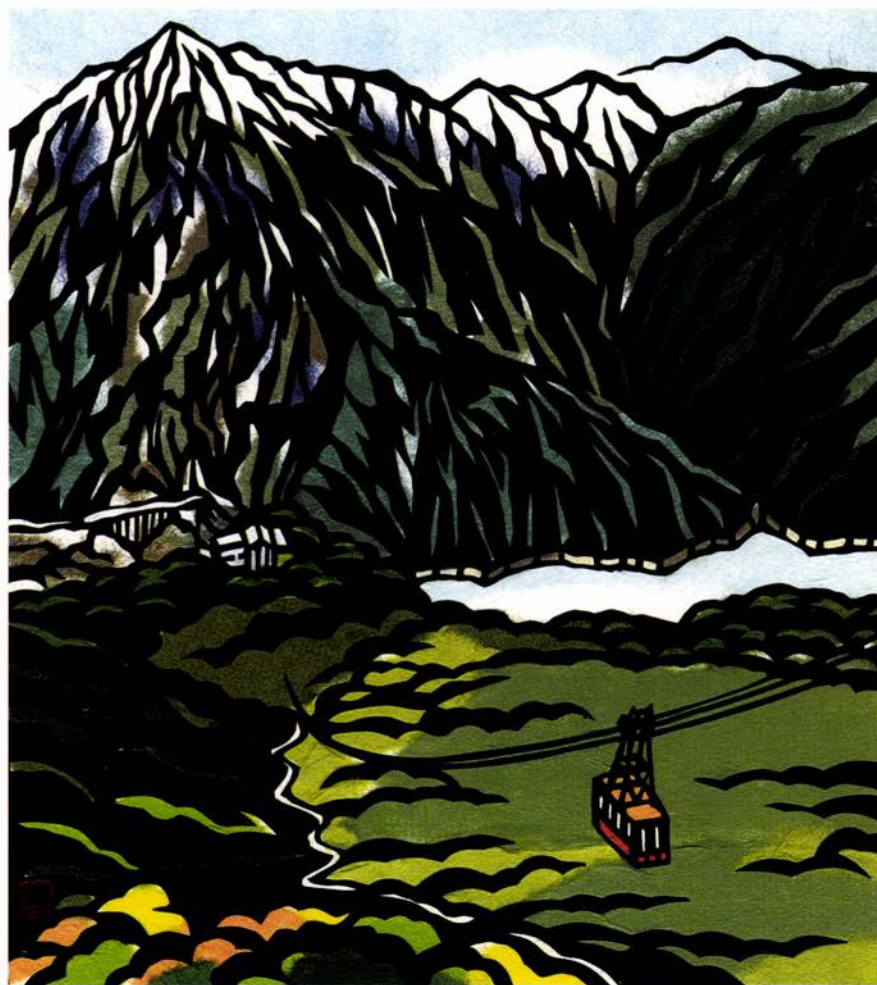


川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十四年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二四号

日川協加盟

No. 1024

九月号

第18回 川柳塔まつり

と き 平成24年10月8日(月・祝)

午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテル・アウイーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06-6772-1441
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《 同人総会・議事 》

平成23年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成24年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「川柳に表れた死生観」 川柳塔社 新家完司 副主幹

兼 題 「絆」 愛媛 黒田茂代 選

「語る」 鳥取 牧野芳光 選

「予定」 北海道 小沢 淳 選

「偉い」 兵庫 山口光久 選

「イメージ」 大阪 鶴田遠野 選

事前投句 「美」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭 幸 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 2,000円(当日いただきます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

《 懇 親 宴 》

と き 平成24年10月8日(月・祝) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウイーナ大阪 3F 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込 120名様

☆宿 泊 ホテル・アウイーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(御希望の方は事務所)にて9月1日(土)までに本社事務所宛、お送り下さい。

*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 00980-4-298479

阿部野神社から水府忌へ

小島 蘭 幸

三十年振りに訪れた阿部野神社は、美しく荘厳でした。清水白柳先生の句碑は本殿横の赤い鳥居の前に建立されています。

菊活けてひととき欲を忘れたり 白柳

三十年の歳月を経て、また一段と重厚さを増した句碑を見つめていると、白柳先生の十三回忌にあたる昭和57年9月26日に開催された、句碑除幕式と記念句会の模様が鮮やかに浮かんで来ました。

「秋酣の今日、故清水白柳君の句碑が令息健司君の念願とそれをささえる多くの柳人の方々のご協力によりまして立派に建立され、除幕式を挙行される運びとなりましたこと、誠にめでたいことと心からお祝申し上げます。これも没後12年を経た今日でも白柳君の円満、誠実な人徳のいたす所と感銘いたす次第であります。にこやかなあの温顔が今、臉の裏に浮かんでまいります」

これは中島生々庵主幹の祝辞の一節です。記念句会の選者は、岩本雀踊子、橘高薫風、八木

千代、定金冬二、山内静水、森中恵美子、中尾藻介、西尾栞の錚錚たる顔ぶれでした。そして、その入選句の格調の高さには、ただただ驚くばかりでした。

白菊も老いては髪を乱しがち

薫風

白菊を百本買うてころの忌

冬二

死ぬほどの男ありけり菊枕

藻介

私は当時三歳だった長女と一緒に出席したのですが、後に薫風先生が「蘭幸君が娘さんと出席されていた阿部野神社の句会を時々思い出すんや」と言っておられたことも懐かしい思い出です。

炎天下、本殿の百度石を何度も往復されていた若い男性に、白柳先生の句碑と一緒に記念写真を撮っていた阿部野神社を後にしました。

恋せよと薄桃色の花が咲く

水府

番傘川柳本社八月句会（第47回水府忌）に初めて出席しました。「二十四時間女です」と題してお話された森中恵美子先生は、川柳初心の頃の岸本水府選の厳しさを淡々と語られ、水府先生から言われた「二十四時間女であれ、二十四時間作家であれ」を熱く語られました。川柳塔社からの交換選者、村上直樹さんは、その任を立派に努められました。

阿部野神社から水府忌へ…。平成24年8月6日は、私にとって忘れられない一日となりました。

座右の句

暁を抱いて闇にゐる蕾

私の句

よく遊ぶ人は達者で長生きだ

鳥越 鬼一

(彬)

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「立山・大観望」

■巻頭言 阿部野神社から水府忌へ

石段と祈り

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌⁹³

自選集

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞⁷

中島生々庵句抄

英語 de Senryu⁹

俳風柳多留——篇研究⁸⁵

愛染帖

檸檬抄「継ぐ」

民族の詩⁽⁴⁾

一路集「曲線」

奥田みつ子・森山盛桜共選

三好 専平

龜岡哲子選

小島 蘭 幸

牛尾 緑 良

小島 蘭 幸 選

木津川 計

西出 楓 楽 選

麻生 路 郎

吉村 侑 久 代

新家 完 司 選

森山 盛 桜 共 選

三好 専 平

龜岡 哲 子 選

石段と祈り

牛尾 緑 良

紀三井寺 西国三十三所観音巡礼の第

二番札所で、境内に清浄水、楊柳水、吉祥水の三井があることから名付けられたとされる。石段は231段、結縁坂と呼ばれ紀伊国屋文左衛門と玉津島神社の娘が結ばれた伝説がある。

紀州東照宮 東照大権現と初代紀州藩主徳川頼宣公を神格化した南龍大神を祀る。五月の和歌祭りは神輿が108段の石段を猛烈な勢いで駆け降りることから始まる。渡御行列は百面、白母衣、赤母衣、唐船、雑賀踊、餅花踊など歴史を偲ばせる。雑賀踊は雑賀孫市が織田信長の軍勢を雑賀川の合戦で打ち破り、氏神である矢ノ宮神社の境内で戦勝を祝って踊ったのが始まりという。

紀州天満宮 学問の神様菅原道真を祭る。901年、太宰府に流される途中この地に寄り、風光明媚なこの地を気に入る再訪を願った。正面の石段は50段、

一路集〔弱点〕	石橋芳山選	86
「もやもや」	今 愁女選	87
初歩教室「雑誌」	鈴木公弘	88
秀句鑑賞「同人吟」	吉岡 修	90
「水煙抄」	峯村 勲弘	92
一周忌の酒井一壺さんを偲ぶ	山本希久子	93
■句集鑑賞「椿抄」八木千代著	乗原道夫	94
せんりゅう飛行船②	新家完司	96
津軽発おもしろ景色⑪	高瀬 霜石	97
感謝感激の川柳塔みちのく二十五周年記念句会	稲見 則彦	98
■エッセー 鮎のささやき	中居 善信	100
本所深川を歩く⑧	松 永浩一	101
八月本社句会		102
各地柳壇（佳句地十選／高田美代子）		106
九月各地句会案内		120
柳界展望		122
■編集後記（ひとこと／岩崎和子）	朱夏・勝弘	126

座右の句

可も不可も飲み込む空を持っている（公弘）

私の句

いつまでも行けぬ流れを見ては 梶谷和郎

紀州青石の自然石を組み上げてあるのと急勾配に苦勞するが、脇になだらかな石段も併設されている。

道成寺 日高郡日高川町にある天台宗の寺で701年創建、安珍・清姫の伝説の「道成寺縁起絵巻」で絵解きがされている。能の道成寺では清姫の化身である白拍子が思い入れいっぱいに駆け上がる小鼓の乱拍子はこの62段の石段がモデル。俗称鐘巻寺。

熊野那智大社 那智大社に祭られている12体の熊野権現が年に一度扇みこしに乗って本殿から那智の滝へ里帰りするのが扇祭り、約五〇キロの大松明に火を灯し、133段の石段をお迎えに上がり神輿の先導するのが火祭りである。

神倉神社 標高1200mの神倉山頂のゴトビキ（ひきがえるの方言）岩をご神体とする。2月6日の御燈まつりは白装束の上がり子が新年の聖なる神火を頂いて帰る修験の儀式で、岩の前から松明を掲げた男達が538段の自然石の坂道を駆け下りる。この岩は日本書紀にも天の盤盾として記載されている。



小島蘭幸選

藤井寺市 太田 扶美代

ジューンブライド愛の怖さをまだ知らぬ

蓬つみいつかわたしも居なくなる

山小屋のご好意満天の星座

ボケットを出たので虹とは呼びません

ケーキ買って来たレントゲンの結果

ホテルの夕亡兄がちよつかいかけてくる

和歌山市 木本 朱夏

この夏を思うと泣けてくる金魚

自転車が似合う本屋のおじいさん

我楽多と夢の区別がつかないわ

コメンテーターの鼻のあたりの脂照り

りんごから見れば檸檬は気取りすぎ

レモンから見れば林檎は喋りすぎ

和歌山市 古久保 和子

一冊の句集に咲いている椿

月光へ椿眠りについたやら

歳時記に母が隠れていません

桃ひとつ触れてはならぬのもルール

割り切れないものが占領する枕

そうめんの茹で具合にも我が家流

榎原市 居谷 真理子

太るまい握り拳がゆるくなる

石よりも卵を投げた罪深さ

ひと睨みしてキャンキャンを黙らせる

激流を上げまばたきなどするな

連獅子の炎となつて父を追う

観覧車酔生夢死でえじやないか

鳥取市 森山 盛桜

不文律あり共倒れなどしない

あちこちに行列平和だと思ふ

ケータイの一機能だけ知っている

暇だから監視カメラを見て歩く

下野という言葉で面目を保つ

記憶から消えそう使い捨てカメラ

和歌山市 牛尾 緑 良

削除キー過去は封印されました
コンビニを出ると人生闇ばかり
原発も私も籍がある日本

インプットしたのに答え出てこない

リストラへ六方を踏む時も無く

増税に手を挙げた人忘れない

泉佐野市 山本 蛙 城

自画像に長い眉毛もそのままに

押入れの奥にデカンショ置き忘れ

地球何周してきた足か褒めてやる

きままろのネタはあんたと笑わされ

鰻高代わりに泥鰌出すと言う

恋の火は燠になつて老いていず

藤井寺市 増井 ヨシ枝

白桔梗亡母の面影抱いて咲く

死ぬまでに逢つておきたいひと一人

便箋に花の季がありおんな文字

絵手紙の西瓜で夏を迎え撃つ

団扇風亡母が傍にるように

お気をつけて互いに交わす車椅子

四條畷市 吉岡 修

マンネリと思わないから生きている

怠けてた奴も年金おなじこと

税金は取られ言い分通らない

居住権を活断層が囲んでる

ご希望に添えぬと天女からメール

贅沢と思わず電気ガス水道

西宮市 片山 忠

病院の待合い室で読むマンガ

冷え切った仲でも向かい合い食べる

ローカルのCMで見る過去の人

注目をされてみたくてめし残す

賄賂だと思わんことにして貰う

身に覚えあるから使う黙秘権

堺市 柿花 和 夫

人並みに生きる必死に生きている

円満を演出してる比翼塚

肩書の取れた名刺に似合う顔

斜めから眺めた世間広かった

万難を切り抜けてきた呱呱の声

一徹の友が照れてる花楸

松江市 三島 淞 丘

土俵から下りても四股は踏んでいる

切り札を使い果たしてから捨て身

僕をかばった母の翼が懐かしい

水の無い海で溺れている河童

思い遣る母のこころを知る浴衣

おもちや屋の前で動かぬ葱坊主

高知市 小川 てるみ

太陽が色付けしてるプチトマト
現役がまぶしく見えるボーナス日
コーヒーを麻薬のように飲む食後
元氣かと亡母に電話をしてみよう
梅雨寒へ昼は煮麺でもするか
泣きに來た海が思わぬ波しぶき

鳥取県 斉 尾 くにこ

省エネの皿一枚で済むディナー
ふんわりと君を待つ間の文庫本
同情の慈悲の視線が辛くなる
キッチンが休み束の間眠り姫
脇腹をさわったらファの音が出る
誤解とけカランと心動きだす

米子市 吉 田 陽 子

スランプの間ゆつくり爪を切る
封切ったモカ最高の香を放つ
組板の裏に染みてる魚偏
非常袋のメモに毎日飲む薬
ルビー婚昔のように泣きはせぬ
また今年小さくなった姉の顔

富田林市 片 岡 智恵子

夫逝くすでに夏野になつてゐる
酸素吸入波は引いたり返したり
飄々と男の美学持っていた

啖吸引苦しいなかで札を言い
あまたの病氣抱いて米寿を生きました
夫逝くありがとうそしてさようなら

松山市 高 橋 宏 臣

十字路の風を確かめ歩き出す
星月夜扉を叩く音があり
小説のように夕立やつて来る
手紙からあなたの空が零れ落ち
ひらがなの手紙の中の釘の音
勾配へ無印の歩は揺がない

寝屋川市 籠 島 恵 子

風景が変わる大きな音たてて
予定は予定雨天決行して嵯峨野
火の彩になった一瞬だったけど
ぼんやりへ火の粉は容赦なくふった
撥ね方もいろいろファックスで届く
昔も今も徒然草にさとされる

大阪市 小 泉 ひさ乃

鍵穴の向こうで笑い声あふれ
一期一会にはしたくないお人柄
失敗を束ねて日々の糧とする
だんだんとやさしくなつて老い進む
夕食の後は私の持ち時間
酒煙草味方に就けて生きている

奈良市 大久保 眞 澄

葬儀屋のチラシこつそりしまつとく

オバチャンですオバハンなんて言わないで

アホやともスゴイ夫やとも思う

断捨離を投げ出したまま死ぬなせぬ

首肩腰どこかが痛い順不同

休肝日自分で決めたことでしょう

寝屋川市 森 田 麗

ビル谷間威厳を残す鬼瓦

正座する所作から見れる人生譜

博多うどん讃岐に負けぬ里びいき

杏の実つけた夏亡夫知らぬまま

杏ジャム完成先ずは仏前に

どくだみは母の魔法の医者いらす

島根県 伊 藤 寿 美

入れ子抱くマトリョーシカも銅鐸も

うかうかとしてたら花は彩を変え

幸せな振りする老いの飾り窓

「元氣」と聞く「元氣」と返事するこだま

墓移す話を兄に切り出され

多摩霊園に連れていかれた亡父と亡母

出雲市 竹 治 ちかし

偏差値で仕分けをされて生きてきた

黄信号気付かず神に叱られる

今になり汚点だったという歴史

先に逝く約束なのに酒二合

予報には出ない地域に住んでいる

梅雨という名で許される雨が降る

吹田市 太 田 昭

悲劇より喜劇の顔がよく似合う

世の中の格差の海で立ち泳ぐ

平凡を飛び立つ赤い靴を履く

未来地図に私の居場所見当たらず

夏最中老いの衣を脱ぎ捨てる

妻の愚痴熱燗にして流し込む

三田市 堀 正 和

トーストと今日の予定を組立てる

お遍路も観光気分バスツアー

ときどきは美人画見ようドライアイ

コンビニのオニギリ癖になりました

ヤカンなどもう見当らぬ台所

絵手紙の友が歳時記つてくる

大阪府 米 澤 俣 子

外れてもお詫びはしない予報官

念のため手摺を持つて段おける

もう十歳若かつたらと逃けている

潮時を知って女は涙する

雑音を拾い疑い深い耳

愚痴言わぬロボにお掃除委せとく

何の七十五ぞこれからこれから
堺市 澤井敏治

シミに皺白髪も神の勲章ぞ
汗流す悔し涙の出ぬように
被災地の呻きせつせつ写真展
これ以上長寿になれば国破綻
節電のテレビを消せば虫の声

鳥取市 奥谷彩子

終の日まで輝く彩に弾む毬
苗田縫い運動会のメダカ達
日々新た今を感謝の亀でいる
野風ぞ少年よ大志をいだけ
心のうち写せるカメラなら欲しい
使い古し家具も私も捨て頃か

犬山市 関本かつ子

下町の名を消すようなビルが建ち
明日に咲く花も選んでご仏前
整形はしておりませんパスポート
時差ボケか妙な時間に眠くなる
美人だといいな素敵なうしろ髪
穏やかな家を選んで来る燕

堺市 志田千代

離党劇 佐藤錦を食べながら
中心から痛みはじめているりんご
チャンスにも順番あると信じたい

私の在所小言で言うところ
福耳をお見せしたくてショートヘア
Gパンのアクセサリーに鍵の束

奈良市 阿部紀子

先生の微笑む遺影子に戻る
心にもない言葉出る悪い癖
スカイツリー匠の技に見る凄さ
引き金を引けば嬉しい紙吹雪
バリアフリー先ずトイレから修理する
例え今危険地帯と言われても

藤井寺市 鴨谷瑠美子

今日よりもつと良い事がある明日
耳元でお見かけしたとささやかれ
穴を掘り子供は夢を持っていた
寄せ植えて咲く花ほどのテリトリ
節目節目で白旗を上げている
合掌のかたちで塔は夕暮れる

奈良市 米田恭昌

臓器移植子は散り散りに生きている
達筆の薄い中身の表書き
ネクタイは黒一本で足りる歳
柳に蛙新国劇を懐かしむ
いつか独りになる日に備え皿洗う
熊野古道ちよつとかすめて子と墓参

和歌山市 田中みね

行く道と同じ話をきいてます
鈴虫も団体さまはうるさいよ
寝る前に明日も平和であるように
瘦せるはず妻の顔色みて暮らす
普通でない夫わたしに口答え
順番が違ふと思うこと数多

犬山市 金子美千代

アルプスのハイジと遊ぶ夢時間（スイスドイツの旅）
磐石の備え中立国守る
ライン川下り古城の夢の跡
ありがとうサンキューダンケで皆笑顔
腹巻にされパスポート蒸し上がり
頑張ったごほうび亡夫にも感謝

寝屋川市 富山ルイ子

簡単に死ぬのはどうもむづかしい
ポッキリ死何とやらやましいことか
長電話いつも病気のことばかり
小沢チルドレン国民そつぽ向いている
日本の10年先を見てみたい
同居なればこそ幸せ日日感謝

芦屋市 黒田能子

長生きと病氣仲良くなつてきた
ページくる風の音だけする夜更け
イメージアップ髪型少し変えてから

急いでも走つてくれぬ足になる
向き合つて話せば誤解とけてくる
遊びごころ失くさぬようにして暮す

弘前市 今愁女

まだ元氣予定書き込む月はじめ
視点替える多彩な趣味に生かされる
独身の不惑を案じ逝けぬ老い
茅の輪くぐり幸せそうな人ばかり
節電に手植えのゴーヤ人気です
商魂が冷えたあんばんカップ麺

紀の川市 北山絹子

魂を土用干しする妻がいる
無器用な父の姿に敵はない
七人の敵に素顔を見せ付ける
列島がすべてグレーになる季節
飛び入りが我が物顔で騒いでる
身から出た錆はなかなか落せない

藤井寺市 若松雅枝

禿げてきた夫の散髪引き受ける
梅漬けてゆつたり梅雨の鬱暗らす
若い世代が近所に住んで活気呉れ
始めての通知簿孫が見せに来る
未だ生きる心算で向かうグルメ旅
サンガラス外せば白い午後の街

唐津市 樋口輝夫

つくづくと見る妻の顔いい女
あなたまだ独りですかと背後霊
うろ覚えのお経唱える三回忌
晩学の辞書に親しむ虫めがね
エアコンをこまめに切つて爺達者

唐津市 坂本蜂朗

自慢する度に背丈が低くなる
まだ生きて苦しめという神仏
人伝ての高い評価に今日は晴
折りたたみ傘持てという予報官
裏のない男ボンボンものを言う

唐津市 井上勝視

爪弾きに嬉しさの増す雨が降る
熱帯夜ステコだけで酒を酌ぐ
節電にゴーヤを植えた裸酒
妻の愚痴ひとと較べる幸せ度
窓を開け登れぬ山を眺めてる

唐津市 山口高明

スキヤンダル無い宰相でおもろない
ミシン目の通りやぶらぬ天の邪鬼
兄ちゃんの二階の部屋は不閉の間
忌憚ない意見述べると若社長
他人さまの別れ話に座が弾む

札幌市 小沢淳

くすぐられすぐに反論する癖が
虎の威を借りて人間軽くなり
逃げ道を決めて強気になっている
夜汽車よしとうとすると知らぬ土地
ライバルに勝っているのは病だれ

札幌市 三浦強一

プライバシー気にしてません一行詩
日曜日句会飲み会ワンセット
泡盛のお湯割りでする基地論議
消費増税反対割り勘に響く
戦後復興やつた日本だ頑張ろう

砂川市 大橋政良

老いてゆく僕のメッキの剥げるまで
愁い一ぱいためたその目と対話する
土いじり土が私を呼んでいる
葱坊主すつかり種になりました
箸二膳酒がおいしい夕茜

平川市 小寺花峯

還暦を過ぎたか友は酒を断ち
ここからは道のない道踏み固め
爽やかな風に酔つて森の海
後期高齢引き算の近道はない
絶頂期の膝から不安忍び寄る

弘前市 稲見則彦
迷ったらお化け屋敷の前にいる

雑草が主役となつた分離帯

ラッパ飲み一度はしたい砂時計

花筏グラスの中で夢ごこち

五 六人まとめて褒めるママの腕

弘前市 福士慕情

再会の握手目頭あつくなる

御もてなし真心だけはてんこ盛り

津軽弁シャンソンもまた味を出す

記念句会予想を超えて椅子を足す

「山唄」の三味に魂うばわれる

弘前市 高瀬霜石

爪を切る出処進退考える

弱虫に逆戻りする日向ぼこ

ライバルが伸ばしてくれる生命線

説教をしている方が正座する

カナヅチのぼくは行けない龍宮城

弘前市 岡本花匠

洗脳の浄土思想へバスター

毛越寺四季を彩る花浄土

金色堂われもと願う仏国土

世界遺産決め手へ努力町の彩

旅帰りに花に癒しの日暮れ水

弘前市 高橋洋子
ありのまま生きて背筋は丸めない

転んでも起き上がるならまだやる気

内緒ないしよ念を押す度太る愚痴

合併でお役御免のお顔役

目を閉じて夢のつづきを足している

弘前市 須郷井蛙

母さんのポツケにレモン入れてある

錆止めに女化粧を欠かさない

節電の効果家計簿よく笑い

大根が語ると長い昭和録

太陽と友達でいる定年後

青森県 松山芳生

声あげて月で吠えたいうさぎたち

花菖蒲二人の恋を引き立てる

ペリカンのくちばし月を囓むかたち

震災地月に守られ一歩二歩

かくれんぼが得意なんです森の月

さいたま市 星野育子

元氣な中ホームの見学ツアー

情報に振り回される主婦の勘

不器用と言つて確かな処世術

喋る自販機よ深夜はお静かに

政治不信ずっと続く副作用

東京都 岸 野 あやめ

富山市 島 ひかる

道を聞く相手の居ない無人駅
おねだりのコツを逃がさぬ大家族
おまけなど知らぬデパ地下レジスター
去年今年墓参の疲れ並ならず
居眠りは身体の弱り気の弱り

横浜市 小 野 句多留

逃亡者自分の顔に戻される
認知症ボクに似ている点もある
自治会の長の成り手に行き詰まる
増税が未来の歴史信じてる
健診の無料別にと聞き流す

横浜市 菊 地 政 勝

疑問符をつけて知識を深くする
反論は切り返さずに一呼吸
スポーツの祭典老いの血が騒ぐ
耐震の指導へ先立つものがない
節約へ無買週間考える

川崎市 三 浦 き ぬ

名月は黙って観てるだけで良い
蹟いた数えきれない九十坂
あの世への手紙届けるポスト欲し
手のひらに亡夫の温もり今もあり
どつぷりと肩まで浸かる風呂恋し

災害へ強いチェンジの街造り
核ゼロの声で結んでゆく絆
人の字の重みに迷うことばかり
売られても買わぬ言葉でいる大人
国民の心を盾にして吠える

可見市 板 山 まみ子

好きな物作って食べて笑顔の日
世界一スカイツリーもいずれ二位
テレビっ子節電なんか気にしない
真夏日は冬が恋しいかき氷
少年の自殺大人は何してた

静岡県 蘭 田 獏 杳

五欲みな捨てた男の懐手
物指しの違いが溝を埋めきれず
団欒の輪の中に置く母の椅子
年金のプラス志向に夢を盛る
蛍火に闇やわらかく動きだす

犬山市 吉 田 幸 子

生きるため徒党を組んだ狩りに遭う
牛糞の壁の家にもある文化
聞き耳を立て身を守る群れの知恵
歓迎のリズムマサイの子等も継ぐ
旅行だと俄然元氣の出る夫婦

愛知県 早川 遯行

胃カメラを吞んで安心したグラス
体調で妻の料理を食べ残す

日本はもう駄目なのか民主党
長い目で見れば止むなき消費税

強請られる日本北から南から

京都市 高島 啓子

大原の紫蘇あざやかに梅漬かる
排水溝きれいに洗い忘れよう

緊張の無い二人にゆるむボタン穴
シルバーはことと分別されている

シルバーの座席に堂どうと坐る

京都市 榎本 宏子

かわるほど楽しい世界五七五
冷や汗ならたつぶりかいた参観日

お人柄よさそなレジの前に立つ
ポジティブな言葉を拾う老眼鏡

子が自立人生ドラマ二幕目

京都市 坪井 孝一

今にして小柄の母は強かった
ラッシュアワーみんな耐えてる走ってる

パレットにたつぷり愛の色を盛る
真心は心の芯で抱いている

親切という世話やきは外される

京都市 西村 益子

やんちゃくれ今日の相手は団子虫
グーチョコキパー足の体操風呂上がり

口だけ達者嫁に迷惑かけそうだ
ほれぼれするねあの食欲と箸使い

がっかりしただけで終ったサスペンス

京都市 三宅 満子

ドクターの追っかけをして恙なく
十年も飲んでる薬名も知らず

スマイルでたいがいのことフリーパス
ふる里へ夜行列車がまた消える

がつつりと食べ放題の後の悔い

京都市 藤井 文代

左右見てサイフ拾うが交番へ
瓦礫処理お互い様で受け入れる

一円玉必ず拾う役に立つ
虫歯なくしわもない友同い年

守旧派今も使うは重い辞書

亀岡市 井上 森生

想定内の寿命を生きて胸を張る
ここいらで生前葬のリニューアル

連れ添った相手どちらが見送るか
宇宙誕生 神の粒子の謎を解く(ヒッグス粒子大発見)

ゾウガメは一人ぼっちで天国へ(ガラバゴスの悲劇)

長岡京市 山田 葉子

無色になつて染まりたい色がある

保護色に染まり神出鬼没です

新緑に染めると鳥も歌い出す

かわかるとすぐにお金が要りそうだから

布切れがもう散らからぬ母の部屋

大阪市 古今堂 蕉子

みちのくの情けに海の匂いして

砂漠氷河自然ゆつくり壊れ行く

振り返れば深々お辞儀されあわて

お魚は骨があるから苦手です

ばあちゃんは叩けば金が出る人形

大阪市 川端 一步

歳時記を読んで心のお洒落する

そう言えば素足で土を踏んでない

二次会までついてくるなよ影法師

菜食で声テノールになつてきた

いい距離を持つて友情五十年

大阪市 原田 すみ子

体調も気分も入れて目分量

可愛氣が無いと私似の子が言う

とことんは落ち込まぬのもよし悪し

まだともう使いこなして孫五歳

なんでやねん笑つてるけど福も来ず

大阪市 谷口 義

モロツコの蛸が口に合つてくる

平均寿命それからが問題でした

夏の雲ぼろりと本音でてしまう

あまり頑張りたくはないおばあさん

二礼二拍アリバイなどはありません

大阪市 大川 桃花

産衣の準備だんだん母の顔になる

あかんと言う事をしたがるのも子供

泥あそび洗濯の苦は考えぬ

人妻とアバンチュールな会話する

職人の父ネクタイに馴染めない

大阪市 津守 なぎさ

芋のつる恩を返している八十路

ご厚意で歌舞伎初日に見る至福

ピーポーに命ゆだねた夜の記憶

点滴が命を繋ぐ音を聞く

全快を信じて明日の虹を追う

大阪市 山崎 君子

胡蝶蘭夏の陽うけて美しく

大笑い十九の春を想い出し

朝のテレビ料理番組たのしくて

ネクタイで主婦の氣持よくわかる

バレエボール元氣な時代思い出し

大阪市 山本 加お里

朝起きてまず仏壇にご挨拶
だんだんとカードが増えて無駄遣い
バリアフリー慣れると恐い旅の宿
鍵っ子を集めて守るボランティア
蓮の花泥に染まらず別世界

大阪市 熊代 菜月

本棚に貴方は今も居るようで
前後私の影に尾行され
旅ドラマ昔の私甦る
挨拶をしながら名前浮ばない
お母さんデーサービスで人気者

大阪市 岩崎 公誠

重患の再生治療はまだテーマ
振り返った先に無念が干してある
わくわくと生きるというちパワー見せ
節電のCMなんて無駄でつせ
笑っても古傷痛む暑い午後

大阪市 佐藤 忠昭

初恋はカルピスビール合せ飲む
ヤケ酒も発泡酒では気が抜ける
不用品捨てない勇氣称えたい
ボロ家でも馴染んだ町が好きやねん
同居イヤ年金だけで食い継ぐ

大阪市 江島谷 勝弘

戻りたいがむしやらだったあの頃に
もう二度と想定外は許されぬ
終つたらしいものところで待つてます
人前はガツガツせずに控えてる
酔うたなら「酒よ」を歌い悦にいる

大阪市 中村 叡子

せめてもの余生のための株無慘
ひとり居の終夜雷鳴亡夫恋う
七夕に待つて居ります短冊に
桜海老どつさり入る嫁の寿司
地車を喜々とし子等の夏祭り

大阪市 津村 志華子

卒寿まで生きて火の章水の章
廃屋で人を待つて月見草
ふる里の思い出消せる筈がない
線引きをして守つて同居の和
そうだそうだと拍手を送りたいコラム

大阪市 神夏磯 典子

オリンピック節電中に熱くなる
ゼロ一つ読み間違えてからドラマ
どう言う加減かトップになつちやつた
午後三時やさしい電話今日も来る
満腹にすれば忘れて眠れそう

大阪市 吉内タカ子

生レバー食べる思い出並んでる

親として臓器提供手を合わす

点滴の帰りに歩き鍛えてる

初盆の亡夫を偲ぶビール飲む

終戦日思い出させる亡兄恋し

大阪市 奥村五月

ワンマンの社長苦手の妻がいる

毎日が延長戦の父の酒

名演技赤ちゃんうまく母を呼ぶ

指でない心でよんだ五七五

栄転に子は転校で苛められ

大阪市 榎本舞夢

頬染めて恋の告白聞いている

百歳に恋のいたずらキューピッド

手離れた恋に未練が付きまとう

次つぎと失恋ですが元氣です

好きな子が出来てルンルン幼稚園

大阪市 近藤正

文楽がなにわ文化と知らぬ人

マスコミの維新劇場閑古鳥

原発阻止クラゲ大群加勢する

ワイルドな宇宙の渚青い星

原発は廃炉にしても金を食う

大阪市 池上清治

変わらない味の味噌汁飽かず飲み

巻頭だ祝いにビール飲みましょう

行列に並んだ揚げ品が切れ

相も変わらず濁声の電話口

外国の異変で変わる円相場

大阪市 伏見雅明

たまご酒うつかり飲んだ休肝日

ネイルアート心だけでも若返る

みどり児の仕草に鬼も頬ゆるめ

雑草もいつか名前前で呼ばれない

乾杯の音頭もつれる三次会

大阪市 松尾柳右子

旅帰り疲れた顔は見せられぬ

退屈な日を変えたくて姉に会う

久し振りに逢った娘の手を握り

握った手娘の温もりに心満つ

孫達の成長うれし我が老いし

大阪市 吉村一風

家中の靴が揃ったさあ乾杯

決めたこと肝に銘じてやると決め

欲捨ててみると大空雲もなし

呆けぬよう趣味は楽しく続けてる

スロークライフ老いはゆつくり幸拾う

大阪市 平 嶋 美智子

最後かも知手で握手クラス会
クラス会美女も美男も喜寿の顔
歳にあるリスクに被い掛けておく
サツサツサと歩けぬ足に問うてみる
歳のまま生きよう被い取り払う

大阪市 板 東 倫 子

生レバーに未練夜更けの長い列
ペンギンのように並んだ新大臣
拗ねた子へ冷めた味噌汁あたためる
コウノトリもパンダも赤ちゃんお目出とう
平身低頭並んで侘びる偉い人

大阪市 坂 裕 之

価値観の違いはあるが好きだった
ママの味一番好きなにぎり飯
小石投げ敵の出口を見る余裕
欲深い僕はあぶないターゲット
まだ七十おじいちゃんとは呼ばせない

大阪市 榎 本 日 出

私のスベア無しです葉飲む
雨ざらし日ざらし羅漢さん笑う
許すのに少しの暇がかかりそう
戦死かも知れない若い自殺者よ
犬死と思えば軽く逝きません

大阪市 井 丸 昌 紀

ばんやりを装い男爪を研ぐ
輪の中に入っていると想つてた
リセットですぐ元に戻せる怖さ
欠点なし感じられない人間味
中心が揃うと端が歪みだす

大阪市 笠 嶋 恵 美

落語会肩の凝りまでアハハハハ
はにかんでゴージャ初花ひとつ咲く
子に気持ち全部伝えたこれで良し
おじいさん孫の見舞いにいい返事
透き通るウグイスの声木々と聞く

大阪市 升 成 好

古里に昔の知恵を借りに行く
赤ちゃんの笑顔へアンコール幾度
プライドも多少はないと生きられぬ
ポリープの良か悪かのくじを引く
動じないものの例えの大地揺れ

大阪市 寺 井 弘 子

見栄張るな財布の鈴が戒める
スカーフはせめてモデルを真似て巻く
すつきりと仕上げる母の針仕事
振り出しに戻るネジ巻く定年後
御報謝の遍路の指に仏の灯

大阪市 田 浦 實

十五分の居眠り今は良いサブリ
団扇がくれる涼風孫にお裾分け
御神籤の小吉ならば持ち帰る
だんだんとお若く見える盧舎那仏
金比羅さん登り切ったぞ自信つく

堺市 村 上 玄 也

腕づくで正論捻じ曲げる政治
宅配と疎遠になった定年後
この歳になればそのうちなどは無い
留守電に入れる言葉がきこえない
予期しない人事に裏がありそうだ

堺市 栗 原 道 夫

猫家出以来門灯切れたまま
猫家出以後町内の猫も見ず
妻と二人しみじみ夕刊の薄さ
猫を探しに夫婦で夜のウォーキング
ミャーと一声鳴き堂々と猫戻る

堺市 大 隅 克 博

太陽が中心なのを忘れてる
連休になると曜日が後先に
大雑把に見えて緻密な大宇宙
何回も座り直して法事する
政治家にするには惜しい人格者

堺市 山 本 半 錢

吹っ切れて見れば輝く一つ星
瞬きは星の吐息か思慕の闇
星空と独りの庭のロマンスよ
水槽を泳ぐメダカにある季節
奥の手を使い果して夕焼ける

堺市 奥 時 雄

形見分けミンクのコートどないしよう
株主に弱音吐けない新社長
耐えること骨身にしみついた寡黙
命綱の年金揺すらないでくれ
うつとうしい上司帰った乾杯だ

堺市 矢 倉 五 月

綱登るゴーヤのロクククライミング
宮殿のようなホテルで芋焼酎
Gパンが似合ってるは女性陣
娘の薄情わたしを自立させるため
リズム良い掛け声で柵飛び越えた

堺市 齋 藤 さくら

元気かと孫の電話で元気出る
手助けをしない愛情だつてある
困ったら仏壇の前座つて
よく泣いた子供におんぶされている
もうそんな年になったか友送り

堺市 遠山唯教

生きるため厳しいおきて鳥群れる
挨拶が下手で笑顔を添えている
欠点を補いあつて手を結ぶ
緩やかな心の無駄を覚悟する
足許が崩れ男が試される

堺市 源田 八千代

再稼働は嫌だが停電も困り
五時起きで水やり土も目を覚ます
物腰に色香残っている八十路
おーいお茶なんて言わない言わせない
童謡もありコーラスに癒される

堺市 内藤 憲彦

ガレキ処理きずな緩んでいませんか
平均越えたところから欲が出る
一年余君をうばった痛憎し
地球踏み台に金環食を見た
認知症のチェックシートに誉められる

堺市 加島 由一

盛大に一人で祝う誕生日
酒が出てころりと変わる主義主張
生死一如ラジオ体操蝉しぐれ
一日に一度自分を褒めている
指でつぼう今日は逢えると言う合図

堺市 西村 りつえ

ウフフフ努力がやつと蓄つけ
暗かった一家が笑う退院日
野心抱き芽生え出したら摘まれ出す
未完の絵派手なため息聞く絵の具
期待され儚さ知ったパンダの死

堺市 荻野 像山

温泉粥すすりパウーの湧く川湯
坊さんの早わざ木魚据え直す
転がった木魚へ笑いかみ殺す
そばの腰つるつる美味い馬籠宿
名湯の下呂の贅沢独り占め

堺市 大久保 のん子

選ばれるまでのセリフは美しい
老いを消す特効薬はないもののか
離婚沙汰芸能界はキナ臭い
スクラムを組みさつそうと決めた道
チャレンジの血潮がたぎる好敵手

池田市 栗田 久子

労いに何より一杯の麦茶
咲き終えた花を摘みつつ思うこと
この齢で姉の沽券にしばられる
捨てるのは今でなくてもよいものを
仏法の教え柔和に説く尼僧

和泉市 横山捷也

交野市 森本弘風

B面は伏せておきます一人旅

私には私の歩幅老いの靴

妻は留守手酌で美味しい生豆腐

お誘いが欲しい準備は出来てます

水面下やはりライバル動いてた

茨木市 藤井正雄

準備した小銭底つく寺巡り

西陣のネクタイ渋く似合う歳

犬小屋の表札孫が書いた文字

泥んこのユニホーム子は和を学ぶ

職人が命を仕舞う道具箱

茨木市 島田誠一

下駄二足あつて入れぬ露天風呂

自販機に札を言われる午前様

堅物の上司下車してホッとする

乗り越したのはオッサンの虎談議

悔み言う顔を作つて出る杜葬

大阪狭山市 矢野梓

過不足のない一言が難しい

昼寝した事は忘れる不眠症

白髪で通すと決めてまた染める

物忘れありに大きなマルをつけ

電気器具体と同じがたが来る

芋づるが築いた日本長寿国

ジャンボくじ慰めくれる三百円

新しい靴履き潰すまで生きてやる

言い訳のドクターストップ効き過ぎる

やきもちば捨てたらしいぞ俺の妻

河内長野市 村上直樹

日に二合の注油で整備屋台骨

孫集う日の華やきと倦怠と

憎むべきは老いに芽生える怯懦心

えいやつとネクタイ捨てた日の空虚

脱原発これが普通になる日まで

河内長野市 山岡富美子

騙し絵のような政治に倦んでいる

歳月に白髪と皺が畏まる

母とかくまごころとかく好きとかく

ぶらすまいなすゼロです大胆に歩く

四コマ目落とし所がまだ見えぬ

河内長野市 水谷正子

スーパーで知り合いが居て無駄も買い

偏屈の朝顔支柱に外つぽ向き

デイケアで調子外れの歌に馴れ

デイケアで楽しく過ごすバースデー

デイケアで雑学クイズ見せ合つて

煽てても頑固一徹目で笑う

河内長野市 黒岩 靖博

塩贈り結果相手の思う壺

涅槃像無私の境地が良いい顔

甘い汁求め巢籠る永田町

ダイエットしたら下腹目立ち過ぎ

河内長野市 坂上 淳司

見守り隊兼ねて教える五七五

小一に空んじさせる古川柳

川柳の教室開く夏休み

答辞の中に飛んで出て来た五七五

川柳の国へようこそいらつしやい

河内長野市 梶原 弘光

おたがいにはやく相手の長電話

口喧嘩察しナビまで押し黙る

家に居る妻は定点観測班

白寿まで一万回の晩ご飯

果物や野菜皮まで食べる主義

河内長野市 木見谷 孝代

やり終えた後で無性に腹が減る

マグカップ割れても思ひ出は残る

見渡せばシニアばかりのバスツアー

泡立器夢を攪拌しています

不器用も慣れて可愛く見えてくる

側にいるから味方とは限らない

河内長野市 植村 喜代

たわいない話でも老いを元気にする

空が明るいと元気をもらう

笑えたら今日は幸せと思ひ

若いだけでいいとは思ひ若い日に気づかず

河内長野市 山室 光弘

腹と腹さぐり合つては先送り

短冊に書けぬ秘密の恋心

紫陽花のお喋り冴える雨模様

変化球頭の弱さ攻めてくる

満月を背なに屋台で法螺を吹く

河内長野市 谷 久美子

子が自立老いて青春花盛り

この命くれた自慢の父と母

トリックを見抜けぬ夫の一本気

一言で静まり返える父の喝

家計簿が真っ赤に染まる消費税

河内長野市 松岡 篤

フェアウエイ曲がつてるから力みまず

しつかりとケチなところは血を引いて

温室に開花の時期も握られて

女房の家事は無料と勘違い

プロ並みと褒められ高い自費出版

岸和田市 雪 本 珠子

吹田市 野 下 之 男

今宵またぼくの煩惱迷いだす
恋風が僕の食欲奪い去る
愛が去り空しい心持て余す
現実には振り回されて夢消える
此の笑顔時と場合で鬼になる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

逃げ安い端つこ辺にいつもいる
涙今流す時かと考える
直視していこう彬の生きた道

雨風を浴びて蕾もしゃんとする
ヒト科には不要やつぱり原子の火

岸和田市 堤 檀 代

縁台がほしい節電夕涼み
温厚なお方に会えてホッとする
目標は母の歳まで生きること
カップルが一つの傘でにつこりと
なつかしい昭和の味のラムネ飲み

吹田市 山 本 希久子

やさしい雨に濡れて四角も丸になる
発電機体内に持ち元氣です
背伸びするたびに足許もろくなり
発酵をさせた言葉に深い味
終章の絵の具ようやく自分色

恩などはすぐに忘れる永田町
元氣出せ通天閣に灯がともる
電話口急に優しいジジとババ
ちいちゃんの素直な笑顔忘れない
蟻さんは雨の日嬉し公休日

吹田市 瀬 戸 まさよ

節電のろうそくマッチよく似合う
米のパン小麦の後ろ追いかける
二度咲きの花弁大きく雨の情
マンションが建ち宿替えの蛇蜥蜴
その昔歴史があつた無縁墓

吹田市 須 磨 活 恵

心とは厄介なものよく迷う
決心がついてようやく書く返事
こだわりを貫き通す老眼鏡
しがらみが絡み人間臭く生き
そろそろと思うが出来ぬ身辺整理

吹田市 木 下 敏 子

薄味に慣れて人生噛み締める
あしたまた頑張りましよと靴磨く
梅雨空へ負けず嫌いの七変化
散歩道花の命に教えられ
気がつけば傘寿の中に足を入れ

吹田市 大谷 篤子

こだわりを捨てて身軽に友と会う
まだら呆け自分一人を持て余す
コーヒーの旨さリハバリ兼ねて行く
術後の命話し相手に時すこす
見て見ぬ振りできずに一歩前に行く

吹田市 藏田 光子

旅先の夜空で探す北斗星
頂上でつかめるほどの星を見る
時どきは頼りたくなる星占い
蛭狩りおたまじやくしに出会つて
暗闇にせせらぎの音舞う蛭

高石市 浅野 房子

九十歳十一本の歯を守る
網戸なら猫も開けますこんなにちは
少子化であとつぐ者のない老舗
ポスト見る新聞がないああ休刊日
わたくしに義理立てをする人は無い

高槻市 峯村 勲弘

光あれ風も起きよと祈る夏
古簾ゴーヤ這わせて凌ぐ夏
レアメタル日本の地下で応援歌
生老死線香花火に教えられ
休眠も出来ず働く我が預金

高槻市 安田 忠子

不安等どこ吹く風と眠る猫
何時まで遊べるのんと聞く小二
草むしり青空眺め一呼吸
深緑の狩勝峠ひた走る
雲海を車で越える羅臼岳

高槻市 井上 照子

制限の主食副食量の日々
格好よくシニアの友の文化会
ハイヒール容姿端麗みとれてた
時候見舞頂く友も八十路坂
病院の予約も私晴れ女

高槻市 佐甲 昭二

ばたばたと過ぎて日めくりよく溜る
習うよりこつそり盗む隠し味
朝刊の見出しにやる気壊される
それからの話に鍋が煮えつまり
アクセルとブレーキうまく踏み分ける

高槻市 初代 正彦

ピンチでも直球投げる心意気
若作り歩く姿勢でばれてます
心音に尊い命教えられ
地藏さんたまに眠そな顔見せて
ゆつくりと風呂も入れぬ虎ファン

高槻市 片山 かずお

気がつけば塩味薄くされている

雨音をBGMに午後のお茶

あやうさが魅力でもある二十前

強すぎる個性で指定席は隅

寝る起きる妻のペースになっている

高槻市 島田 千鶴子

恋人はいますか夫ならいます

ごめんねと素直に言える歳となる

手加減をすれば緩んでくる気概

道祖神ダムの中止で生き伸びる

目覚しの中から朝がやってくる

高槻市 杉本 義昭

真つ白な手拭い似合う男衆

あじさいが内緒話を聞いている

縞柄を着たら道草したくなり

ふしくれた指だ指紋が温い

出直しの音だ町工場の夜明け

高槻市 富田 保子

すぎずきの皿を楽しむ回り寿司

神の庭さらさら鳴らす竹箒

老い二人セコムに託した旅行

四六時中誰か起きてる三世代

至福なり節電逃れ涼み台

高槻市 富田 美義

悠久の流れに俺も霞みゆく

夫婦とて隙間が欲しい時もある

保身だと言うがその舌よく回る

病む人の肩には重き子の未来

まだ脈が有るよと風がそそのかす

高槻市 左右田 泰雄

人だかり背のびでのぞく好奇心

あきらめの心をいやす流れ星

わだかまり溶かしてくれた思いやり

ほとばしる蛇口の水の爽やかさ

止まろうか止まらまいかと蝶のはね

豊中市 藤井 則彦

日の丸の丸に溢れる大らかさ

思い出から時に湧き出る馬鹿力

孤独な夜作り笑いをするゆとり

ここだけの話も壁は聞いている

似つかわぬ人が着たがるクールビズ

豊中市 水野 黒兔

雨の日はページのすすむ文庫本

手に届く距離と思つて道半ば

頂上はすぐと下山の人は言う

紫陽花に隠れてしまう孫の顔

裏方に日を当てている名幹事

豊中市 江見見清

派手な服着たいが見るだけで止める
だんだんとそんなもんやが増えてくる
口下手ですぐに同調してしまう
ヨッコラショの次にしばらく暇がいり
本物か造花か触れてなお思案

豊中市 松村里江

すぐれもの通販便利離せない
気くばりの良さにポイント加算する
行きずりに男の匂う修行僧
私鉄沿線青春切符梅田発
ドアチェーン外しておこう彼が来る

豊中市 松尾美智代

中心を出たら肩の凝りが消え
みちのくの旅で潤滑油をもらう
一期一会築く友垣あたたかい
となり合わせそれからずっと無二の友
誕生日自分に褒美辞書を買う

寝屋川市 山本三郎

妻が買い私が運ぶ市場かご
重い荷は俺が持つよと言うてくれ
ゆつくりと妻の歩みに合わせとく
天国も地獄も見て来た戦中派
子や孫に老後を託し投資する

寝屋川市 森 茜

ゆつくりと歩けば遠くへ行けそうだ
ぱびゅべぱ入れ歯わたしの顔になる
修業が足りぬ私の胡麻豆腐
郷を出る人と歩いた日の渚
家じゅうで回し読みする舟を編む

寝屋川市 平松かすみ

軟骨の蓋を見付けた洗濯機
居留守にも住民税がたんと来る
毎日が同じ会話で暮れている
ダイレクトメールは無駄な紙ばかり
品評に出したいほどの薯が着く

羽曳野市 徳山みつこ

リンリーンはやく聞かせて飼育箱
戸も窓も開けてラジオを聞いている
セールばやり私なんにも欲しくない
ハナエモリの蝶をバッグに入れてある
政治停滞さてどこへ避難する

羽曳野市 安芸田泰子

軽い嘘やがて私を攻めにくる
愛してるそんな台詞は知らぬ耳
噂には負けぬ女のサングラス
セールの電話へ呆けたふりをする
ゴミ出しの朝を起しにくるカラス

羽曳野市 吉村久仁雄

警戒のゆるみ狙っている地震
青い目も法被が似合う夏祭り
憎まれてなんぼ人の子叱りつけ
仏罰と言われてぐうの音も出ない
時効ない罪を背負って生きている

羽曳野市 三好専平

朝酒に昼酒そしてネオン酒
酒のない国はないかと駄々をこね
酒飲むと同期の桜歌う奴
嫁はんもいらん一升持つてこい
とことんと言えば禪僧酒が好き

羽曳野市 宇都宮ちづる

六十にしがみついているストレッチ
一人旅淋しく思う夕食時
雲隠れしたい日がある主婦専業
使い道ないけど欲しい五億円
膝上で甘えてた娘が子を叱る

羽曳野市 永田章司

先手打ちあやまったのが火に油
なでしこが敵の猛攻耐えに耐え
棚卸し僕が裸にされていく
想定外責任所在五里霧中
父の日は誰も騒がず普通の日

羽曳野市 福田悦子

私にもいつかあの世の門が開く
あんなにはなりたくないね枯すすぎ
精一パイ生きて百歳までの夢
無事着地神が授けた金メダル
オリンピック差別はしない平和愛

東大阪市 北村賢子

いじめ自殺無かった昭和の頃偲ぶ
脳細胞萎縮せぬよう五七五
貧しくも穏やかだった幼い日
節電へ自慢顔をする団扇
愛称で今でも呼んでくれる友

東大阪市 佐々木満作

これ以上失うものがない強み
手加減をすればまた凶に乗ってくる
火中の栗拾って運が向いてきた
七十の手習い妻の撥捌き
わびさびがほど良く利いた万葉歌

枚方市 寺川弘一

留守電になると相手は電話切る
広い場所でも縦一列の蟻の列
青空の日は安全な青い鳥
もう少し続きが欲しい数え唄
十五年未だ川柳を掴めない

枚方市 伊達郁夫

ヘルパーに昔の自慢繰返す
髪一本ころの一部だと思ふ
ブランドの傘の雨音確める
故郷に戻る覚悟の花を買う
私にもきつとある筈残り福

枚方市 海老池 洋

菖蒲園しつとり濡れる一つ傘
夏物を八月に買う暮らし向き
くもの巢に待つということ教えられ
可能性信じて生きる外になし
直入に急所へ効かす父の釘

枚方市 小林わこ

私の気持わかるの 雲動く
金縛り誰か私を引っぱって
じつとできないなぜか心の現在地
言いすぎた花屋の前で立ち止まる
叱るとき涙こらえていましたね

枚方市 二宮紫鳳

ひと呼吸おいて断る電話口
朝顔のグリーンカーテン夏近し
おかわりが飛び交う孫の初カレー
マイガーデンフレッシュ野菜の朝の膳
花明かり紫陽花色に染まる午後

枚方市 二宮山久

柔らかい心にさせる露天風呂
曲り田を上手に田植機流れてる
寝付かれぬ午前三時の名句かな
日記帳とぎれとぎれの日が進む
節電へ団扇片手に作句する

枚方市 丹後屋 肇

群青の海を入日が焼き払う
ムード曲プラトニックが揺れている
原爆原発人科の罪の根深さよ
省エネ化スイッチ切るしか能がない
リーマンショック元の木阿弥に戻る

藤井寺市 高田美代子

紫陽花もヒト科もころろ変りして
三十年昔にもどる宙返り
音のする方には鬼が棲むという
オクターブ下げてこつそり来る知らせ
もろもろのお祓いをする大花火

藤井寺市 俣野登志子

替わりたい文句だけ言う役まわり
家庭的な妻を飽きるほど演じ
長電話キャッチが入りやつと切れ
朝つばみ昼に満開せつちかね
花活けるわたくしが無になれるとき

藤井寺市 鈴木 いさお

本当に俺でよかったのか妻よ

7月7日路郎読本読んでいる

B面は誰にも見せぬ素の私

強がついていてもお酒が覚めるまで

正論を吐くたび友が去ってゆく

藤井寺市 津田 シルク

人畜無害七十歳を謳歌する

元氣そうねと老人会に誘われる

味褒められデパ地下の物とも言えず

年金削るようにはいかぬ腹回り

いい子ちゃんでしたせんせにははった

藤井寺市 伊藤 アヤ子

あじさいもみんなの顔も咲いている

川柳と歌で老化は防げない

ポーナスを気持だけとくれた孫

路地裏にしつかり根付き咲いた花

肩の荷は私達にも分けあつて

藤井寺市 吉田 喜代子

九十二歳恩師を囲み児に戻る

雨風に義理も果さず帰路に就く

古里は昔も今も雨ばかり

サラダ菜を夫婦スズメか食事中

ふと目覚め朝でなかつた昼である

阪南市 森村 美花

リュック背に緑を浴びた日のロマン

冷やかな風が広げている噂

踏まれても開き直っている根っ子

心の窓全開にする日記帳

早寝早起き自然のままに生きてます

松原市 森松 まつお

七輪がいいなサンマも焼肉も

私も大好きでした生レバー

UFOのニュースワクワクして録画

負け続く虎が何だかいとおしい

ブラントーのキュウリ期待に応えない

箕面市 広島 巴子

涙雨希望の虹がスタンバイ

人様の感心ばかりして怠け

恙無くだだたんたんと日経過す

久しぶり海に心を解き放つ

海面のキラキラ明日へ気をもらおう

箕面市 出口 セツ子

子を頼りにする年齢としになる情けなさ

好奇心何でもトライして生きる

一日も無駄にできない年齢としになる

夫婦だけになると時間が長くなる

騙し騙し長く使っていく五体

八尾市 宮崎 シマ子

悲しい時も涙浮かべてでも歌う
巡礼に道連れが出来足輕し
嘘言わぬ人だから好きティールーム
ちびた靴捨てるありがと言いながら
柩の姉あの世で待つと花の中

八尾市 高杉 千歩

アルバムに生きているのが二人とは
大阪弁になって二次会面白い
ほどほどの日焼けも良いさ老いの杖
病歴を語る薬を全部捨て
ペンペン草老人力の見せ所

八尾市 寺川 はじむ

縄のれん老いの若さを煽て合う
熟すほど甘さが乗ってくる話術
青空だいつも味方と信じてる
捨てるものその線引きで綱をひく
甘辛をどつさり吸って古希の坂

八尾市 村上 ミツ子

突然の悲報へ何も手につかず (恩人逝去)
日だけ超スピードで過ぎていく
ケアレスミスなんだろうが皮肉だな
ぼちぼち生きるがんばらずあきらめず
海底の丘に希望の光見え (メタンハイドレート)

大阪府 初山 隆盛

海は一つ震災の傷たどりつく
消費税ノーとはためくむしろ旗
遠雷は父の怒声と心得る
面影が志野の茶碗に浮かんでる
切株に時代を駆けたしわの数

大阪府 野田 栄呼

三十年前の服着る心地よさ
上下見てこの年金で納得し
本当の私写して免許写真
過去捨ててさっぱりしたく模様替え
あれこれとんどりうって梅雨晴れ間

大阪府 桑田 ゆきの

菅さんが弱み隠した遍路笠
離党した顔に野心が見え隠れ
拗ねる子にふぐ提灯を見上げさせ
ハイヒール今も大事に手入れする
節電に燈火管制思い出す

神戸市 山口 光久

失敗も怪我もしたけど利那主義
加齢かな右脳がメルトダウンする
幸せが舞い込む隙間こしらえる
波風を立てぬ采配白を切る
ご隣保と意思の疎通は盆踊り

神戸市 山田 婦美子

鳥籠の鳥にも譲れぬ自負がある

一日の仮面を外す日記帳

健康が水の旨さを左右する

生命線の糸をしつかり手繰りよせ

一杯のコーヒに鞭打ち喝を入れ

神戸市 山崎 武彦

詫びながらまた子に還る母叱る

携帯で遠隔操作されてます

遠花火いつの間にやら手が肩に

愛と憎天秤棒の先で揺れ

節電に味方のような丸い月

神戸市 木村 貴代子

消費税孫のためにはよしとする

バスに乗るうれしき事が一つ増え

被爆地は放置原発再稼働

ベランダのパセリを添えて生きる皿

好奇心枯れかかつてるテレビ漬け

神戸市 山口 美穂

言い訳をみんな黙って聞いている

天の怒りが異常気象か難づく

宝くじ当りが出たと書いてある

梅雨晴れ間さあ出かけよう万歩計

孫の画にピカソを重ねほくそ笑む

神戸市 伊勢田 毅

大阪の風竜巻になる予感

ものまねの域でハードル跳び越せぬ

ライバルの笑顔の裏にある驕り

ネジ山を合わせて夫婦五十年

晩学へ婦唱夫随のネジを巻く

神戸市 白川 淑子

花籠に詰める言葉はありがとう

カラス二羽夜明けの道でダンスする

試着室着たい服より着れる服

ぼつねんと宇宙に一人雨の音

恋も夢も十七文字に遊ばせる

相生市 中塚 礎石

深呼吸吸今日も零から歩数計

一言の夫婦の波紋ふとりだす

税務署へ一人前が顔を出し

春の陽を浴びて花咲く無人駅

立石を撫でて予感を思い切り

明石市 糀谷 和郎

ネジ締めて心の緩み問い直す

のらくろが未だに棲んでいる背骨

笑顔なら負けぬ私の代名詞

遠距離の電話に愛は弧を描く

遠い日を手繰り寄せ合うクラス会

芦屋市 竹山 千賀子

宅急便ふる里の記事連れてくる

商人のボチボチでんな快い

エステ通いぼちぼち結果出る頃だ

満月が心のゆがみ丸くする

ゆつたりと星座を巡る露天風呂

尼崎市 軸丸 勝已

しとしとの情緒忘れて荒れる梅雨

青い空入道雲は生きている

申し訳ないとエアコンボタン押す

停電は想定外と電化器具

改革に街の文化の灯も消える

尼崎市 市坪 武臣

失言を謝ることの潔さ

ビタミンの名ではなかったAKB

生ビールに理屈はいらぬ喉仏

強気に出て優しく攻めるプロボーズ

ライバルと切磋琢磨の趣味の会

尼崎市 林 昭三

里訪えば町も鄙びて我も古い

梅雨に入る瑞穂の国は田植どき

近頃は雷公様も容赦ない

小さくて綺麗な孫の京土産

爺さんもお歳犬にも遊ばれる

尼崎市 山田 耕治

日曜の街静かなり午後の雨

席譲る機を失って駅三つ

人生の切符乗越し買いましよう

鷺を聞いて吟行らしくなり

努力賞を孫が祝ってくれました

尼崎市 長浜 美籠

一抜けて軟らかくなる瞳の光

角張って生きても同じ風の中

辛口のコメント小気味よく響く

紅拭いておく飲みかけの紙コップ

後悔を悟られぬよう箸を置く

尼崎市 春城 年代

句想練る幸せがあり鶴を折る

あすの夢曖昧模糊と消されゆく

ことばの海にこの身放てば果てもなし

本音が吐けず十指が疼くこともある

生きるとは死ぬることなり九十嬬

尼崎市 藤岡 りこ

ミシュランの一つ星なら手が届く

停電日皆で星空見上げる日

コンペイ糖口に広がる懐かしさ

泳いでも泳いでもなお金魚鉢

泳いでるのか歩いてるのかあめんぼう

加西市 金川宣子

ストレスの鍵盤叩く梅雨最中
相性も良くないけれど半世紀
暑いから簡単レシピーばかり出す
新党にメディアが流す裏表
風の道作り客寄せ風鈴屋

川西市 米原雪子

同世代生きた苦勞を語り合う
すみません大きなお尻割り込ます
発車ベル止んだ瞬間やつと乗る
自転車風を纏ってすれ違う
歩道の段差がわたしを踊らせる

川西市 西内朋月

善人の嘘はばれたら爪弾き
冗談が嫌な空気を持つてくる
うたた寝の顔に呪文をかけられる
節電のエアコン止めて熱中症
認知症テスト受かった免許証

三田市 北野哲男

不揃いのベランダトマト無農薬
添寝して童話聞かせた子も五十
大手術ゆつくり霧が晴れて来る
ゴールまで現役目指し三枚目
隠し撮りATMは許される

三田市 久保田千代

消化不良の想いばかりが胃に溜まる
生きている証と思う眼科歯科
命ある限り遥かなもの求め
装いにそれぞれ似合う舞台あり
夕焼けが淋しがり屋を染めていく

三田市 尾崎一子

外は雨少し早い二人酒
よい便り記念に服を買いました
気もめた二人の結婚おめでとう
穏やかなところが欲しい墓参り
嫁の名を忘れぬように生きていく

三田市 福田好文

角取れて男の影が薄くなる
孫だけが絵手紙くれた七十二
長男ほど出来を気にせぬ次男坊
妻だつて軽がる抱けた頃もある
原点に戻れば視界晴れてくる

三田市 田中章子

美しく老いるわたしのテーマです
日食用めがね捨てるに捨てらず
コンピニにうちのビールが冷えてます
中国はパンダ外交上手だね
紫陽花の時には登る山がある

三田市 石原 歳子

わたくしも土手の並木も年をとり

喜びも束の間夫の癌転移

運命と諦めました夫の死

気儘ですひとり暮らしのいいところ

散らかった部屋へ往診してもらい

三田市 上垣 キヨミ

古希過ぎて書く人生の設計図

筆跡の見事に返事書き渋る

夫偲ぶ悲喜こもごもの読経きく

スタイルも年の差も無い赤い糸

オープンな味へ主婦らの調査隊

篠山市 酒井 真由

音がする夢んだ夢がひらくとき

まつとうに生きる男の汗のシャツ

シャツを着た狎がお澄ましして通る

面倒だから弟ですというておく

叱られたあの子は何をしてるだろう

西宮市 藤本 直

言葉より大切な事目で伝え

合言葉いらぬ夫婦のテレパシー

感動の言葉が喉に詰まつて

いい女涼しい言葉知っている

バラエティー言葉に花を咲かせすぎ

西宮市 牧 渕 富喜子

いつまでも母の心配尽きぬなり

人の名も花もすぐには出てこない

相当な負けずらいという鏡

捨てがたきものを急かせて蟬がなく

パンダの子死すただならぬ記者会見

西宮市 西口 いわゑ

紙人形に顔は書かないことにする

雨しとど試行錯誤の一行詩

金魚ひらひら乙姫様もかくあらん

招かれて上座の酒のほろ苦し

灯明をあげて自身が癒やされる

西宮市 亀岡 哲子

露出度はギリギリ美女のクールビズ

樹一本助けて虫の皆殺し

ぐちよぐちよの男一匹部屋干しに

老老介護の予行演習ほどのこと

私のすごいところは内緒です

西宮市 足立 茂

提案が上司のメンツ打ち砕く

窓際族過去の栄光降ろせない

成績順いつも下から名を探す

あいさつを小声にさせる棒グラフ

○×の試験だひよつとしてチャンス

西宮市 山本義子

祝傘寿つぎは米寿と役所言ひ

八月の雲動くまだ目の内に

古傷も逆らわれないと淡いいろ

動く歩道ただ立つてはあかんらし

かくれんぼの好きな眼鏡がよく動く

西宮市 緒方美津子

順番を弁えている渡り鳥

病氣して夫黒子にしてしまひ

追ひ風にする折り鶴と募金箱

高さという見かけに嵌りやすい鼻

姑に感謝ピンピンコロリと九十九

西宮市 秋元てる

さくらんぼ含めば沁みる故郷の味

好きな事とやるべき事に挟まれて

そうなんだ亡母の言うてた事はこれ

上手くない仲間ばかりで盛上る

卒寿過ぎもう暗い句はおさらばだ

西脇市 七反田順子

雨続きその気にならぬクールビズ

ゆつくりと寝た児を移す母の膝

地震予知人の住むところありますか

出不精も仲間の風に左右され

たどりついた島で瓦礫はうとまれる

姫路市 古川奮水

ズームレンズ引きよせ撮った金環食

激辛のそば焼で飲む友誘う

洗面器朝ご機嫌の顔うつす

眠れない夜はFMラジオ聴く

激励の言葉を送る選手団

奈良市 天正千梢

一句抜け友も応援してくれる

突然に柳友友の中に入り

洗顔後忘れず点眼来てくれる

平熱ですよ36度よかったね

同病の人の気持ちも分かつて来

奈良市 岩本浩二

心臓に毛が生えてるが要りますか

四面楚歌ダイナミックに吠えてみる

ガソリンで走る凶器の地獄絵図

産むごとに奥はだんだんでかくなる

鈍感なだけ図太いではありません

奈良市 加門萌子

海の碧は青空からの贈り物

夭折の天才賢治みずゞさん

悲哀は愛に言つた南吉ごん狐

謙譲の美德見た日のいい気分

毎日が連休今日は何曜日

奈良市 辻内 げんえい

退職後もネクタイ締めりやしんとする

「遅れる」のメールに遅刻ホツとする

ビジネス街自転車あふれエコ時代

孫とした指切り思い出せぬまま

朝は主夫昼はカルチャー夜テレビ

生駒市 飛 永 ふりこ

ねぶた館地から轟く大太鼓

津軽三味風雪越えた無の極み

おもて裏ところで聴けば真が見え

わたし流自分くずさぬくずされず

低カロリーシェフの工夫で食は虹

橿原市 安 土 理 恵

恵まれていると暗示をかけている

悪知恵は右脳元気な時に出る

いぶし銀加齢も捨てたものじゃない

黙っていたのに青痣のおしやべり

向き合っているのに語尾が聞きとれぬ

香芝市 大 内 朝 子

生き甲斐へやさしい種を蒔いている

青春のあの日へ迷い込むレモン

節電へ昭和生まれの底力

プライドがへたれぬうちは大丈夫

柳友の増えてたつぷり笑い皺

大和郡山市 坊 農 柳 弘

懺悔する写経の筆は無口なり

正論を打ち消す民主主義の穴

くちびるの渴きに絡む義理不義理

誘われて仕掛け花火に口説かれる

拘りが過ぎるとプライドが剥ける

奈良県 渡 辺 富 子

梅雨晴れ間かびた男を陽に当てる

妻の愚痴BGMになつてゐる

バリトンの囁きに酔うイヤリング

肩書きを外すと皆の目が優し

幸せの芝居してきたクラス会

和歌山市 福 本 英 子

だらしない死に方をする黄金虫

悪友をいっぱい持つていい余生

好物を出されて仮面そつととる

パンダの子生まれた死んだ平和な世

クールビズ昨日も今日もゴーヤ漬

和歌山市 松 原 寿 子

忍の字を崩さず鞭を打ち続け

疑問ひとつ解けないままの昼下り

ナビゲーションなくても君がいてくれる

過去からの雨が降り出す日記帳

沈黙の底から話題変えていく

和歌山市 武本 碧

無駄話続く熟女の骨休め

ジレンマもあるだろ蟹の横歩き

これ以上隠し切れない火種抱く

どきどきが増えて大人になつていく

わたくしを許すがごとく霧が晴れ

和歌山市 福井 菜摘

温もりが伝わる老母の誤字脱字

倅せをひとつ見つけた回り道

無期限な愛を小皿に盛り分ける

フィナーレは妻の拍手があればよい

無人駅人影がありホツとする

和歌山市 喜田 准一

あれこれと念を押されて疎ましい

諍いを伏せる互いの知恵がある

同じならちまちませずに生きて古稀

シャツの袖涙滲みてる宮仕え

危機管理誰に任せばよい日本

和歌山市 上田 紀子

丸呑みの愛にハートを補正中

タックルをされて魔法が掛からない

ひと滴ずつ愛の力を満杯に

風のダンス蝶時めいて花笑う

裏表傷つくハート天日干し

和歌山市 土屋 起世子

私の過去をパソコン知っている

0歳児もうケータイの真似をする

正直に生きるか迷う白髪染め

独り居でようやく羽が伸びてきた

高齢者と平均寿命まで言わぬ

和歌山市 松尾 和香

残り時間全快させて勇み立つ

笑い取る舞台も笑いこらげてる

道なかば八起きを見る亡夫の影

部屋飾る亡夫の遺影に励まされ

長旅の心に宿る作句の芽

和歌山市 玉置 当代

五臓六腑に酒しみ込ませ生きている

臓器移植未来へ強く打つ鼓動

子ら巣立ち小さい鍋でおまごこ

この夏も暑いんだろうなあ ゴーヤ

観劇へ日頃の憂さを捨ててに行く

和歌山市 柏原 夕胡

悪さしてから焦点が定まらぬ

大失恋ぐらいじゃ私死ねません

抱き枕に癒されている夜の底

プランターで埋めるマンションのベランダ

暇があるから余計なことを考える

和歌山市 坂部 紀久子

折角のやる気削がれた俄雨
自問自答いつも年齢邪魔をする
手前味噌ばかり賑わうクラス会
重大さ増す低音の響く声
命と言う文字はまだまだ太い字で

和歌山市 堀 富美子

若さ自負傘寿を遠く押し流す
諍いを避けるポジションそつと置く
病んでから友の痛みがじんと来る
車椅子の友と出会ったなつかしさ
枯れ花になつても墓は切り花で

岩出市 藤原 ほのか

自分史にそしての夢をたしておく
染められてみたくて白い花になる
誕生を赤まるつけて待ちわびる
仕分けして拾い集めた夢がある
順番を間違え足を踏み外す

海南市 堂上 泰女

一蓮托生友の本音が嬉しくて
真摯に生きているかと雷鳴が止まぬ
叔母見舞い幼の記憶呼び戻す
燕でも情けの家に巣を宿す
休日は孫のピアノで生き返る

海南市 小谷 小雪

窓際の机ぶつぶつ言っている
淋しさの薄れる頃か百ヶ日
一枚を剥ぐと噂が風邪をひく
あぶないと言われ食べたい生レバー
弾みつけ放物線をかけ登る

紀の川市 宇野 幹子

等身大の箱はだれかが用意する
ちっぽけな愛を分け合うちりれんげ
流されていつかは澄んだ嫁姑
気まぐれな風がかき消す砂の紋
ブランコを大きくこいで過去を絶つ

田辺市 岡本 昇

ありがとうと言つて死ねたらなと思う
譲られた席に手刀切っている
歳のせい言い訳にしてなお老いる
思い出を捨てかねゴミの中で住む
今朝もまた脛と相談して歩く

鳥取市 倉益 一瑠

わたくしの赤がだんだん褪せてゆく
弱虫の啖呵は腰が引けている
ヨヨイノヨイ遊び上手な男という
捨てる前鑑定団に出してみる
簡単でないぞ大きな円を描く

鳥取市 夏目一粹

へび・カエル絶滅危惧種お前もか
死んだ真似している蜘蛛のいじらしさ
自転車で傘が指せないので困る
ときどきは家の回りで下駄を履く
年金を貯めて怪しい人になる

鳥取市 吉田孔美子

セピア色ちんちくりんのおかつばだ
一人旅したいと父を喜ばす
発ってから五日目そーらね電話なし
さわやかな顔になる体操をする
助手席のわたしを忘れかけていた

鳥取市 春木圭一郎

運のある人に当たれば運が向く
イヤだなと思ったこともやってみる
誰かのためだと途中で投げ出せぬ
ボランティアこれも縁だと割り切つて
ダメな自分を知つて少しは変えてみる

鳥取市 永原昌鼓

母さんの口調でインコ返事する
ノーマイク誰の前でも怖くない
鳥取砂丘うつぶん晴らす大舞台
赤ちゃんの笑顔涙に嘘はない
老眼を変えてすつきり広辞苑

鳥取市 加藤茶人

損な役親父寡黙で留守が良い
体臭が嫌々離婚もう間近
舌出して頭を垂れている謝罪
マニフェスト桃源郷よいざさらば
八日目の蟬ひよつとして認知症

鳥取市 有沢せつ子

にぎりめし行楽好きな亡母思う
子や孫へけじめを守るありがとう
きゅうり茄子いただく近所ありがたい
師への恩川柳修行して返す
毎日を古賀メロディーに癒される

鳥取市 池原天馬

姉の遺産わけてもらうも趣味違う
寝棺顔生の執着ありありと
原発の国会調査数の中
鹿被害猪よりも深刻に
朝どれのキュウリどつさり悩みます

鳥取市 高浜勇

がちちりと子を取り込んで父孤立
生活を深夜電気が支配する
燃えている心老体もて余す
大きめの財布を買つて見栄をはる
立ちあがる時声がでる歳になり

善悪の基準は腹の虫次第

鳥取市 福西茶子

手探りで辿る真夜中のトイレ

溜めすぎた毒は一気に吐ききれぬ

半分こしやすいうように丸いパン

好奇心盛ん余生も暇がない

鳥取市 前田楓花

ゴメンネと合わす両手は胸の中

弟とじゃれあつた頃もどりたい

三人に一人の癌は当たつて

痛いと同じで夫婦泣き笑い

さりげなくほどける糸は結ばない

鳥取市 土橋はるお

普段着のままの見合いが良かったな

ころぶからうしろ見ないで歩くのよ

呆け防止作句に励むことにする

スカイツリー行つて見ようと思わない

梅雨晴間万年床のふとん干す

鳥取市 中村金祥

星空がくじける僕をそつと抱く

号令に合わせていたら罷免され

上げ底の幸さえくれぬ党が割れ

原発に一切つかぬスポンサー

政権のネジはくるくるよく廻る

山越しに花火が上り恋いくさ

昼花火音が人らを煽りたて

湖に逆さ花火を見る二階

場所を売り花火大会遠望す

花火果て行き処なし縄のれん

鳥取市 両川無限

母の真似しながら辿る女偏

水遊びスッポンポンのいい笑顔

人生がやつと解つた頃に死ぬ

セールのノルマへ沈めない夕陽

アリバイが崩れるまでの黙秘権

鳥取市 中宇地秀四

真心を少し控えておもてなし

淋しさを吹き消す孫の弾む声

あの人も灰になったら褒められる

何事も適当という処世訓

親友に心を込めたストレート

鳥取市 西川和子

節ぶしをなだめて今朝も畑を打つ

自家菜園背骨に無理をさせている

姿見の背骨の曲がり伸せない

お手本の背骨はいつも伸びている

深呼吸背骨と膝を意識して

鳥取市 深澤 千恵子

休むこつ知つて楽しくなる走り

暖かさ見える隣の笑い声

お荷物に既になつて長寿国

国民を向かずに歩く永田町

読むたびに残りのページ気にかかる

鳥取市 鈴木 一弘

座右名にそつた暮らしが浄土かも

七変化紫陽花ほどの芸達者

夕涼み衣替えした夏すがた

九十年歩いた道が懐かしい

残酷なほどに正義をくりひろげ

鳥取市 吉田 弘子

祈祷から始まる喜寿の同窓会

直立とアップのカメラ遠慮する

頼るまい思うだけ娘は支えなり

意のままに手足が動くありがたい

妻祖母役目があつて老いられぬ

鳥取市 岸 本宏章

口下手を妻がしつかりカバーする

迷い子札のようにケイタイ持つて出る

原発の電気で凌ぐ熱帯夜

はらいせの造反劇が見苦しい

責任を取るとは言わぬ評論家

鳥取市 岸 本孝子

しめつぽい花火のような喧嘩する

親切の押売しては悔い残す

手作りは面倒だけど味がある

長生きを心配せねばならぬ国

節電は言われなくてもしています

鳥取市 平尾 菜美

ネジのない自浄装置がすぐゆるむ

耐え忍びやつと並んだ粘り勝ち

やる気でお酒の足が洗えない

忘れまい母の笑顔は子の宝

持ち歩くポッケのやる気やつと出る

鳥取市 竹口 清信

組織でも大きくなると割れてくる

奥の手は見せぬところに価値がある

赤裸々に語れる友が一人逝く

やりくりのつかぬ財布に腹が立つ

言い分を溜めて女も強くなる

倉吉市 牧野 芳光

この世から金がなくなること願う

会議とは名ばかりハツパかけられる

一直線何と味気のないものか

温度差を確かめるよう握手する

棒倒し影も悲しくついてゆく

倉吉市 猪川 由美子

消費増税見据え節約励みます

防犯カメラの威力うっかり出歩けぬ

総理殿ストレスですかメタボだよ

乗るも地獄下りるも地獄新党だ

オウムの恐さ平成生まれよく知らぬ

倉吉市 山中 康子

後輩のスピード感にしゅんとする

お叱りを頂き刺が抜けました

箔つけた粹なあなたがうらやましい

すかつとする身になりたくてフラダンス

部分入歯はずして夜は水入らず

倉吉市 山本 玲子

二礼二拍手賽銭の音運の音

一對の蝶の乱舞を見て飽きぬ

もみじの手パバの大きな指にぎる

服を着てうなだれたまま歩く犬

ダメージは三日忘れの水ギョーザ

倉吉市 野口 節子

本心を明かすに少し遠まわり

ざわめきを読み取っているコンパクト

砂粒を倚せて御伽のフェスティバル

楽々と越える山から制覇する

エコ袋の中で心地よい暮し

米子市 竹村 紀の治

真剣に飲むと忘れる血糖値

年金が許してくれた発泡酒

節電をしろと電光掲示板

生レバーの最期しつかり見届ける

どうしても知りたい僕のロスタイム

米子市 高田 振作

バイキング高いものから皿に盛る

君が代を歌う先生僕は好き

酒さけさけ喜怒哀楽の酒を飲む

否定語も英語使えば丸くなる

本まぐろも蟹も見られる街に住む

米子市 中原 章子

二人して手を染め露の皮を剥ぐ

まず野菜から食べているダイエット

ぼつちやりの体形夏の服選ぶ

人さまから呼ばれ高齢自覚する

通過点落ち込んでいる暇はない

米子市 成田 雨奇

父の日があつたみたいと娘言う

排気ガスいっぱい浴びて田を植える

退院の用意のベッドよく軋む

塀のない家に育つて塀がない

酒は好きだが極めたというほどでない

米子市 後藤 美恵子

連作に居心地悪い野菜苗
感受性喜は敏感に怒は鈍く
夫送り焼き餅用の網ほかす
日日孤食好物ひとり占めできる
螢火が残照あおる初夏の宵

鳥取県 石谷 美恵子

一匹の命名我が子ほど悩み
ジंकスを口実にしてヒゲ剃らぬ
米まいて雀待つてる老いふたり
フリマからやつと見つけたミニサイズ
平凡に生きて苦手の人がない

鳥取県 松川 行男

冥土まで歩く道草医者通い
水槽の電源切つて虫を飼う
お祓いに宮司伏したり案じてる
輪くぐりに浴衣姿と擦れ違う
軍歌なく技術の腕が海渡る

鳥取県 竹信 照彦

真夏日に耐えて晩酌補給する
手の届く所に海と山の幸
海の幸迫いかけ午前四時の釣り
節電はしないエアコン付けてない
オール電化しなくて良かった僕の勘

鳥取県 西谷 悦子

ばんやりもいいね命を洗おうか
にんげんの怒り色する雷雲よ
ポケットの色は誰にも晒さない
深入りのひらいた傘がたたためない
三面鏡三叉路迷うわたし居る

鳥取県 深田 俱久

弱音など吐くのはやめな秋空へ
大目玉くらう覚悟のこの勝負
頑張れよ言われりやよけい弱腰に
演歌などうたう弱気が命とり
子ども等に数を合わせて蛍舞う

鳥取県 細田 裕花

ハッピーな話題と食べるフルコース
サプリメント痩せる予感を買ってくる
食べ過ぎて第六感が働かぬ
下り坂やつと涼風吹いてくる
謎解けてスイカすつきり真つ二つ

鳥取県 岩崎 和子

讃美歌を教えてくれた姉も老い
百歳も間近童女になった姉
讃美歌を弾いて歌つて姉偲ぶ
コーヒーの香り立ちこめ朝が来る
のどかですコーヒー豆の回転音

鳥取県 佐伯やえ

薄命の悲しさはない蟬しぐれ
さわやかな別れ涙は花に埋め
糸でんわふたつの星にかけて見る
爪で灯をとすは知らぬ表札よ
草笛を吹いて還らぬ畑に立つ

鳥取県 山下節子

とりあえずヒゲでも剃つて客を待つ
一杯のコーヒで済むミニデート
一匹の猿が都心を騒がせる
ノーマイク肌が生いき呼吸する
脇役で生きるしあわせ母ゆずり

鳥取県 山本正光

馬鹿騒ぎするほど金は持つてない
銀行は年金受けるだけの場所
人災も天災核もごっちゃ混ぜ
魚買う産地はいつも多国籍
老体で○×あるもネジは巻く

松江市 錦織禮子

家族葬面影のある顔もいて
喪主の挨拶日替りで次男立ち
誠実と質素最後まで座右に
梅雨空に熱々オムライスセツト
通い合う空気新たなめぐり合い

松江市 石橋芳山

暗闇の中へ奥へと逃げている
隠れるとするなら月の裏が良い
いつばいの泣を含んで悔いている
どのドアも開かないみんな怒ってる
罵りを止めずに腐れだしている

松江市 川本 畔

恋人未満プラスマイナス現時点
笠智衆の横顔があり先回り
大切なところが略されて刺客
悲しみを重ねだんだん細る芯
人間に揺れて冷奴をつつく

松江市 松本文子

入口が大きい用心しなければ
シルバーコース48に負けないぞ
堪忍袋が平成に見当らぬ
負けるが勝と思ひ明日を待つている
古民家のカフェ結構混んでいる

松江市 松本知恵子

あくびして待とういつか来るチャンス
夏帽子深くかぶつたもの想い
手の平のおもちやそろそろグッドバイ
坊やねんねアンパンマンもほつとする
還暦なお勢い余ってポカしてる

松江市 小川 注湖

ランドセル玄関を出る黒と赤

富士山にスカイツリーの自慢増え

地球には喜悅と嗚咽今日もある

信頼は氷壁登る綱ひとつ

少子化に生れあんだと縁結ぶ

出雲市 伊藤 玲子

隣りからチビの外交官見舞う

金魚浮かべスキンスリップのお風呂好き

ギザギザな心静める茶を淹れる

あの女が来ると無口が喋りだす

髭剃ったあなたと踊るバースデー

出雲市 多久和 敬子

チャンス今明日に向かって走り出す

あの日からチャンス遠くへ去ったまま

孫乗せてじーじの馬が梅雨空に

敵は無い心の窓は開けたまま

花の会心優しい大きな輪

出雲市 小白金 房子

青い空亡父母うかぶ野田の風

ぐつぐつと安眠もらうそば枕

知らぬふり嫁の仕草に丸く住む

胸にもつ苦労話もきいて上げ

爺ばばを囲んでくれる娘の料理

出雲市 富田 蘭水

うその無い野菜に努力教えてる

夢と希望菜園まわり刻忘れ

神話博全国先がけ出雲生き

賞品が出る句会というにぎわい

大自然曇り人間日々造り

出雲市 岸 桂子

一冊の句集に恋をしてしまう

諦めて買えば出て来るさがし物

夕焼けの一本道が混んでいる

メール氾濫ことばは薄くうすくなる

ルス電に向かうと声が正座する

美作市 福原 悦子

点滴のしづく命の音を聞く

経験を積んで崩して生きている

出無精もあやめ咲いたと誘われる

これからの生きざま描く八十路坂

床柱内側支えてきた家訓

美作市 大石 あすなろ

これ以上のシンプルはない冷や奴

もう少し粘って家の灯を守る

これからを担う世代の嫉糸

直言がびしりと効いた痛かった

ふる里を歌ってつなぎ合う絆

府中市 藤岡 ヒデコ

何事も無かった顔にさせぬ過去

本音には飾りすぎない方がいい

もやもやに風を入れたい梅雨晴れ間

高くても土用鰻に賭けてみる

ぼちぼちと瞬発力より持久力

竹原市 石原 淑子

腕ずもう見せる五歳の力瘤

姉の忌 南無阿弥陀仏に癒される

満中陰ほほえみかける白い百合

宙を翔ぶナビゲーターの迷い癖

新しい記憶にばかり削除キー

竹原市 岩本 笑子

年金に両手合わせてアメリカへ

初めてのアメリカ娘が待っている

あれこれと準備夫婦の旅である

木もれ陽の中で六十路を浄化する

体重計買わない事にして久し

宇部市 平田 実男

ソロバンを弾くと逃げる青い鳥

心まで素つびんにするクラス会

溺愛が親子の絆細くする

行き届く介護へ呆けが急ピッチ

惜しまれる内に死ねたらなと思う

東かがわ市 川崎 ひかり

ずばらする蟻もいるだろこの猛暑

午後三時どこへも逃げ場ない暑さ

夏帯を解いて着替えるアツパツパ

外見は穏やか色の灯が点る

ネットより役立つ祖母の知恵袋

東かがわ市 清川 玲子

ビタミン錠一つ多目にのむ猛暑

節電の掟守った暑い部屋

同じ血の流れいとしさ一しおに

流木の旅の話を聞いてやる

暑さなど気にしなかった水鉄砲

松山市 古手川 光

逆らうのお止しなさいと糸柳

蟻よ蟻熱中症に気を付けろ

聖職の辞書からブライドが消えた

恥ずかしいんじゃないんですよと土竜

律義者も彼岸花にはかなわな

松山市 宮尾 みのり

代役で香辛料が使えない

ふっ切れて自分に戻る刺を抜く

断捨離へ料理の本も一くくり

ぶれないでおう私であるために

考える葦ブライドは捨てていず

大洲市 中居善信

早植えの稲が律義に伸びている
杉檜誰も見向きをしなくなる
合併後ますます村は痩せている
百姓を潰した自民ではあるが
放置田よブタ草だけが威張つてる

西予市 黒田茂代

紫陽花のお色直しを雨がする
老鷲が呼んでる山の深みどり
鎮守の森へ清涼剤に会いに行く
かげろうの羽根の薄さを誇る和紙
おめでとうの電話誕生日だったな

高知県 小澤幸泉

神様が与えてくれた休肝日
神の声聞かず地球はやせてゆく
パフォーマンスやめようととも疲れます
パソコンに老後のプラン書き並べ
人生の整理できたか亡友が呼ぶ

熊本県 岩切康子

一週後に植えよと畑許可が出る
懐かしい駄菓子を受ける旨いお茶
感謝に感謝で応える手提げ品
戸締りの後を臆病夫チェック
旅保険付合い程度加入する

熊本県 高野宵草

庭樹刈り済ませ今年も季が巡る
禁煙して目立つ吸殻また拾い
くじは皆外れがっかりした安堵
降らなんだ鞆の傘が重くなる
良い世です交番で逢う落し物

（前月分）松江市 錦織禮子

閑静な高台にある能舞台
真空のガラスの中でバラは咲く
クールビズ堅い上司に軽口も
水平線とトンガリ屋根の道の駅
神話の里出雲美人がエスコート

（前月分）神戸市 伊勢田毅

百歳の医師診察に列ができ
原発を楯に節電迫る国
自分史がいつか喜劇の本になる
妻入院しつかり家事の腕をあげ
流れ星亡母と呼んでる都市砂漠

（前月分）堺市 奥時雄

紅をさす鏡の中で返事する
妻の留守一日だけが丁度良い
一晚の禁酒を妻が褒めすぎる
朝寝坊なので一日すぐ終る
胃袋のサイズ料理で伸び縮み

（笠井欣子さんの句は72頁にあります）

川柳塔の

川柳讃歌

③

木津川 計

新幹線に食い荒らされてゆく夜汽車

高瀬 霜 石

高校を出てすぐ綾小路きみまろは、故郷の鹿兒島から上京した。「親父がくれた一万円を持って、夜行列車で行きました」と。

懐かしの「寅さん」もこう言う。「駅前の商人宿かなんかの薄いせんべい蒲団にくるまって寝るとしてさあ、なかなか寝つかれねえ、耳に夜汽車の汽笛がポーッと聴こえて来ましてね」と。霜石さん、哀愁の夜汽車は貧乏人の味方でした。が、貧乏は置き去りに、夜汽車が消えていったのです。

海山が勤けと妻を愛してる

澤井 敏治

「鳩は忠実な一夫一婦制である」と確かなンゲルスが『家族の起源』で述べていたのに、ほおっーと驚嘆した学生時代を思い出します。が、「人間は決して鳥類から出たものではない」に、ほっとして、さて僕の将来は

人間か鳩か、と自問していたとき吉井勇の歌に出合ったのだ。「君にちかふ阿蘇の煙の絶ゆるとも万葉集の歌ほろぶとも」

しかし、勇は言うだけの男だったのに、この句の人物の奥さんへの星児実は貴い。

責任は果して愛は限り無し

原田 すみ子

放蕩な一人暮らしにケリをつけ、終生の愛を誓って結婚した。かくて通俗文学は終り、人並な人生の純文学が始まるとは、皮肉な話ではないか。「文学の向こうに長い飢餓がある」(今川乱魚)は正解だが、文学のこちらには長い修羅がある、というもう一つの真実とは正反對の、恐らく子育ての責任を果してなお、「愛情は降る星の如く」(尾崎秀実)な、すみ子さんの愛と献身です。

卒寿まで元気でいよう酒のため

森本 弘風

「たった一人しかない自分を、たった一度しかない一生を、本当にかがやかし出さなかつたら、人間生れて来たかひがないぢやないか」と『路傍の石』の先生は主人公の少年にさとするのだ。何事もなさねば人生は長く、何事かをなさそうとすると、人生は短い「邯鄲午炊の夢」であることを知る。

人はどう生きるか、弘風さんは卒寿まで

「酒のため」元気でありたい。と。願わくは、飲み尽せぬ酒壺をくれた「猩々」との出会いのあらんことを。

老々の介護の奥の吹き溜まり

富田 美義

僕の義兄は、寝たきりの妻の面倒を実によく見た人だった。食べ物を口に運び、下(しも)の世話をし、感心する僕に「折々のうた」の一首を見せたある日があった。「十年余の看とり辛からむと友は言ふ独りになるはもつと恐ろし」(久恒啓子)

「生きていくくれる、それが俺の支えだ」と言い続けた義兄は、元無頼の新聞記者だった。美義さん、老々介護の奥を日溜り、に。

全没になった句帖を撫でている

松本文子

文子さん、よく全没になりました。だから僕は選んだのです。成功や富貴や出世が人の胸を打ちましようか。再び杉山平一です。「貧乏には詩がある。金持にはない。敗北には詩がある。勝利にはない」。この伝でいくなら、全没には詩がある。入選にはないのです。あなたが全没の句帖を撫でた、そこに川柳があり、文学があるのです。

文子さん、一陽来復の日、乾杯しましょう。

〔上方芸能〕誌発行人

自選集

小島蘭幸

路郎忌や尾道人と句碑を訪う
比翼の句碑は虹色雨の中に立つ
なにもすることがない髪は剃っておく
ワンカップ塔のかたちに積んでみた
使い捨てカメラ一番性に合う

遠山可住

家中に母が生きてる盆が来る
散髪屋を残して過疎の店じまい
大切な友へは万年筆で書く
若者の口には合わぬ味がある
生かされて今宵米寿の月を詠む

都倉求芽

完璧を目指して瑕を深くする
消しゴムで消した鉛筆書きの罪
奥の手が時代おくれと知らぬドン
アラスカに似た雲冷んやりさせて暮れ
海の日の休日海のない京も

土橋 螢

報恩講終りの鐘を三つ打つ
盆踊り復活させる染め浴衣
夕顔が咲くまで待つてくれますか
宇宙から一緒に飯を食う女
卓袱台を真ん中にして仲直り

中原 諷人

耳遠く老顔の度は跳ねあがる
新聞に辞書に天眼鏡みがく
貧弱の身など斬り捨て法かいな
お役所の裏に零れてくる私腹
あたたかい像に仕上げている彫り師

西出 楓楽

晩学の辞書は重いと思わない
思い直してプチ家出から帰る
好奇心煽つて老いを遠去ける
歳だとは思いたくない思わねば
バツカスがたしなめている二日酔

仁部 四郎

順序よくバスが来たので起きてた子
瞑想の順序を乱す腹時計
不況だが歳の順です定年日
くじを引く順から運は動いてる
順番は明日かもしれぬいろは経

波多野 五楽庵

最果ての駅に旅情を置いてくる
まほろばのわが自叙伝は風の中
忘却の糸をたぐれば波の音
鈴蘭や君の瞳のつぶらなる
笑つたら急に寂しくなつてきた

林 瑞枝

天主閣の稜線ロマン天へ飛ぶ
峰打ちの愛マンネリの眼を覚ます
絵本から抜け出て朝のバスに乗り
愛の指で素敵な明日の絵を画こう
道尽きたひとりを囲む小宇宙

前 たもつ

三枚もTシャツ着替え僕の夏
古い二人朝のあいさつよく寝たか
二人三脚結び目少しゆるくする
踏み出せば風も味方をしてくれる
一頭たりとも見捨てたりせぬ羊飼

政岡 未延子

破られることに意義ある包み紙
毎日をこまかく流す水飲み場
立ち位置に陽が当らなくなってきた
歩きまわつていろんな嘘を聞いてくる
火種を蒔いて歩く人とも友達に

三宅 保州

雨乞いに駆り出されてる雨男
おじいさんと他人に言われたくはない
ご多忙のところとご勝手に決める
足腰を鍛えてくれた向かい風
早起きに手持ち無沙汰の休刊日

宮西 弥生

鴨一家通る高速みな止まる
手づくりの肉じゃがうまく三日目で
熱い血が眠りをさます法善寺
一善の一つ仏に手を合わす
生きている証しとびきり夏の彩

八木 千代

みんな集めて冷えた西瓜の試し斬り
歯形だけ残し持ち場にちりぢりに
片付けに続いて急かす家仕事
折をみてそぞろに誘う木の机
あやとりの続きはたぶん後の世に

八十田 洞庵

写真からほほ笑みかける黒リボン
野辺に咲く名も無き花にあるいのち
床ずれもさせぬ介護に母こまめ
一太刀は斬らせてもよい力持つ
ライバルを蹴倒す勇気ありますか

両川 洋々

浮気性のあんたに地雷抱かせとく
不撓不屈さすが昭和のひと桁だ
もがく地球を誰か救いに来ておくれ
開けゴマ僕も心を開こうか
妻すごい借金取りを追返す

河井 庸佑

失敗に挫けず明日に活かす知恵
限界を心得守るマイペース
順調に進む話に持つ不安
妙案と自信の一手読まれてる
穏やかな上司が手厳しい訓示

川上 大輪

ひと休みしようアンテナ低くして
預金ゼロわかつているがまた開く
句読点ここは息継ぎしたところ
すべて人災 人間がいる限り
爺さんをいっぱい乗せた宝船

木村 あきら

幾山河越えた夫婦の秋日和
民宿のママさんにある国訛り
バアさんの巾着数珠が入れてあり
紅引かぬ老母の素顔美しい
やすらぎの心を呉れる石地藏

小西 雄々

清純派女優へ一つ董咲く
まだ無理はできると思う力瘤
麦飯の味を知らないまま育ち
回る水車に恩は忘れると言われ
弟の笑顔は消えて月も欠け(弟急逝)

斉藤 劔

水鉄砲少しずるさもいいだろう
道草の話を好きなかたつむり
花時計そこで止まっていてごらん
雨上りむくむく発芽しています
喜寿の庭小さな夢を接木する

板尾 岳人

母上殿愛しています永遠に
キリン死す象もコアラも喪に服す
ごめんねと言えば済むのに雌の性
新党を創る勇気のない鳥
悲しきや象に踏まれたリングの死

奥田 みつ子

泳ぎ下手流されるまま生きてきた
淋しさは子等が帰京の布とん干し
月天心 願いはみんな叶いそう
あの笑顔みなを虜にしてしまう
コツコツがこつ 人生は積み重ね

塩満敏

戦争が人の蓄を散らします
赤バスを廃止しますと鬼市長
日本から原発なくせと十七万人
日本の空オスプレイいりません
老妻の手当てで長生きしています

新家完司

訃報欄今朝は知らない人ばかり
一万歩目指しようやく四千歩
にんげんは敵だと知っているトンボ
わらべうたどなたもないときうたう
記憶力夜ごとに獺が食べに来る

恒松町紅

痛いところだけですと老いの愚痴
あれもしようこれもと欲が離れない
思考力まだ少しある杖の先
好奇心だけは達者な老眼鏡
ほどほどという手加減が決まらない

津守柳伸

相づちを打つ友がいてうまい飯
嘘ほんと見抜く力は母の勘
初志貫徹梅ちゃん先生七光り
好事魔が増える喜寿の思いやり
筋トレでノースリーブは着られない

温故知新

『清水白柳遺句集』より

髪をむしって言訳を考える
フラッシュに握手したまま待たされる
青筋を立てて無口で居る弱み
ステッキは我を通すのに持った老い
そのあとの微笑やよし君の瞳も
靴下を脱いで不信に触れずおく
早う見に来んと散りますうちの桜
控え目にして逆境を見舞うてやり
無職だが家賃で食える程は持ち
古寺の闇いつまで釈迦は天を指す
母の名言無理しなや無理しなや
コンピュータ逃げ場を教えてはくれず
蝶ネクタイ切口上のマイク持つ
更年期線の崩れたのが目立ち
肖像へああそうだった髭を書き
皇族を会長として金が寄り
ゆで卵清め塩ほどつけて置く
売声の早口なのは生きがよし



西 出 楓 楽 選

雲南市 菅 田 かつ子

縁切れぬギックリ腰と半世紀

手を取ってホップステップどっこいしょ

菜園で待つてくれてる青蛙

ちぐはぐな話笑って場が和み

この先は道草もよしぼちぼちと

キッチンも孫の来る日はいそいそと

立話籠のアイスが溶けてくる

瀬戸内市 東 楨 ますみ

草食系の男子ばかりでつまらない

ブルトップまだ萌えそうな音で聞く

黄昏の恋はラムネの味がする

ラーメンをすすめる女の顔捨てて

カン蹴りのカンは昭和の音がする

冷や奴に飽いてきた頃秋がくる

広島市 岸 本 清

酒の量手前勝手な物差しで

不意の雨百均傘に背を丸め

弱点の一つに上げるお人好し

もやもやは消えたか妻の長電話
もやもやを晴らすつもり独り言

岡山市 工 藤 千代子

突然の雨に貰った返事です

てにをはに迷い見上げる北斗星

アリバイも曖昧にする柚子ポン酢

黄昏に漂っている罪の数

流れにも勝てずぬるめの湯も出れず

夕暮れのなかで仲間を確かめる

岐阜市 平 野 あずま

柱時計昔噺を繰り返す

生きる日々円周率を追い続け

ペン牝豚の指がスマホにそっぽ向く

欠点を見付け親しみ湧いてくる

通帳の判子私を支配する

年金に細く長くと導かれ

泉大津市 助川 和美

見上げれば愚痴飲みこんだ空の青

子の世話にならぬ口癖散歩する

国民のためと逃げ切る再稼動

大切にすぎ新茶が古茶になり

騙される方でよかつたお人好し

子供手当なかつた頃の子沢山

神戸市 木村 忠義

採算を考え止めたバイキング

容姿より心が先に惹かれます

口先だけの親切は泡のよう

ため息でストレスの除去しています

図書室のような感じの僕の部屋

大雨で洗車されよいこともあり

岸和田市 増田 隆昭

一番若い今日を無駄には過ごされぬ

シンブルイズベストで日々を生きていく

治療より予防へ日々の万歩計

フルムーン妻はいそいそ服買いに

日の丸と君が代欠かせない五輪

勝ち負けで変るファンの酒の味

川西市 山口 不動

にぎやかな頭上注意のつばめの巣

みんなから名指しをされた雨男

嫁はんにたまには言おう愛してる

柳誌にて我が名発見ワイン抜く

父親のいただきますで食べ始め

デザートがお薬となる味気なさ

松江市 武島 ちよえ

熱帯夜星の雫を浴びている

散歩道水子地藏か手を合わす

とうもろこし未だ畧れる自前の歯

七夕の笹に願いが重すぎる

猿に熊出ても古里やはり好き

目印がなくてもきつと行ける道

大阪府 神野 千恵子

満天の星にもやもや吹つ切れる

梅雨空の晴間洗濯機が踊る

笑い声纏れた糸の先が見え

裸一貫奥の手なんぞありません

犬掻きで渡れる距離にいる安堵

ツアー客まるで買い出し部隊なり

阿波市 三浦 千津子

屁理屈が出る日は調子よい身体

忙しい世に段々と背を向ける

ハプニングあつて人生泣き笑い

ありがとう沢山言える幸せ度

やる気満々横一線のスタート台

反論へやんわり制すおちよば口

大阪市 安藤 なつこ

贈られてみたい百万本のバラ
待つてるとなかなか来ないこのとり
休刊日手持ち無沙汰のおとうさん
楽をしてやせれるはずがありません
節電で我慢した分ビール飲む

大阪市 太田 としお

気がつけば短くなった二十四時
絶好調晴れもいけど梅雨もいい
お客さまはありがたいけど神じやない
洗濯の好きな女房に惚れなおし
年老いた妻の寝顔に目を瞑る

大阪市 柴本 ばつは

元氣だなあ妻は年中急いでる
強情な太い手首は祖父ゆずり
胸ゆたか女系家族で丑歳で
やりくりで細くて長いくらし向き
母の知恵みんなまとめて鍋の中

大阪市 高杉 力

娘の赴任先の天気も気にかかり
木プラで水土は生と暗記する
お出かけの予定はないが見る予報
米を研ぐ明日もいい日であるように
買い替えを決めた日洗車心込め

大阪市 栃尾 奏子

最果ての村にも人の温かみ
ストレスは平たくのべて丸めよう
正直な臉だ嘘とよくわかる
究極の円を目指している悟り
辛いことあればもたれていいんだよ

大阪市 梅里 南天

コンピュータ街は俯く人ばかり
電線を急降下する雀二羽
曇天の底を車が這いまわる
講演会夢から醒めてまだ途中
原発の文字を見る度一度上げ

大阪市 平井 露芳

総選挙AKBに先越され
七十になつても恐い放射能
ノーベルさんごめん賞金減らします
節電を余所に夜更かしするテレビ
シンクタンクもう空っぽで何も出ず

大阪市 前川 善之

大阪のおばちゃん飴で絆もつ
一票も重さの違うAKB
権利は求め義務軽んじる日本人
かるがもの川の引越し警備付
年金の元を取れたと祝う歳

大阪市 松田 聰

ため息が増えて仕事ははかどらず

まだ半年もう半年とふりかえる

仕事だけそんな人生つまらない

アフターファイブ自己研鑽も忘れない

ごめんねの言葉ひとつで救われる

池田市 上山 堅坊

無駄骨を折って広がるお付き合

いそいそと遠い句会へ行く不思議

こだわりを溶かしさばさばするお酒

飲むことならいつでも都合つきますよ

無になつてアニメの空へ溶けてゆく

泉佐野市 稲葉 洋

完璧より少し不安がある興味

老い先は未踏の日々で好奇心

夕焼けの景色に僕は芥子の粒

言い訳に節電ネタの小商人

みな下を向いて歩いているスマホ

貝塚市 石田 ひろ子

パート終え夕日背負ってスーパーへ

楽しみで植えた庭木が今重荷

録画した刑事ドラマで今日を閉じ

退屈を蜘蛛一匹に助けられ

採血の朝空腹を持て余す

河内長野市 辻村 ヒロ

老いの虫微笑みながら忍び寄る

少しだけ流行追ってルージュ買う

シャッター街看板だけが知る昭和

厳しくて煙たい父が子に戻る

子供より先に寝ていた子守歌

河内長野市 渡邊 修

国連は呉越同舟集う場所

顔見ずに貴方と分る筆の跡

政界をちゃらちゃら泳ぐ風見鶏

待合は数値比べの自慢会

普天間に傍迷惑なオスブレイ

高槻市 田中 由美子

窓際にいても野心をまだ捨てず

妻のペースに徐々にはまってい

く平和遠回りしてもやっぱり好きな

ワイパーを最強にして逢いに行く

要領を覚えて鬼は弱くなる

高槻市 鳥居 宏

もじずりの赤い隊列とてちてた

赤んぼが未来を向いて笑ってる

飲もうかと言うのはいつも妻の方

小粒でも肝つ玉ならでかい妻

お互いにトイレの電気消し忘れ

豊中市 池田純子

紫陽花に梅雨のうつ消す色もらう
傘になるあなたは確か言った筈
関西の蛸に受難日半夏生
噂には内緒だからね付いて来る
赤いバラ抱いて夫の引退日

豊中市 貝塚正子

して見せて言つて聞かせて辞められた
たくさん嘘査定するえんま様
白髪になつてマニキュア赤にする
孫が来たお願ひしよう糸通し
あの世でもきつと逢おうな俺お前

富田林市 山野寿之

外野から笛や太鼓が騒がしい
突然の雨が仮面を剥ぎに来る
右も左もぎりぎりの現在地
淡淡と語る男の背が温い
こつそりと耳打ちされてからドラマ

羽曳野市 磯本洋一

海開き今夏もブラン丸でなし
梅雨合間地酒担いで知己と旅
カーテンはゴーヤへちまとひょうたんで
夕立で空が磨かれ眩しくて
雑草と思つて抜いて大目玉

羽曳野市 安本美喜

名付親決まらぬ内にパンダ遊び
ニンニクニラみんな好きだよ元氣だよ
節電にかにも太郎も動かない
塩砂糖ボトルに混せて会社まで
汚泥の中の咲く蓮に教わりし

東大阪市 西田いくひろ

サマージャンボ大きな夢を抱いて買う
生真面目が過ぎて融通効かぬ友
出る杭は打たれしがらみから抜ける
老いたなアと思うが負けず嫌いです
病は氣からプラス志向で生きてます

藤井寺市 肥山一文

ナマハゲが舞台の上で打つ太鼓
波高し仏が浦に手を合わす
突風に恐れおののく恐山
東北に少しだけ支援する
東北は花と笑顔で出迎える

箕面市 寺井柳童

クニマスの姿湖底に生き続け
悠悠と泳ぐマンタに一目惚れ
ライバルの急死北島さびしそう
スーチャーさん軟禁とけて青い空
節電に髭をばつさり夏向きに

八尾市 山根 妙子

隣り合う扇子がゆらぎもらい風
山なみがパッチワークの雨あがり
満天のプラネタリウムいびき音
今朝の雨狐嫁入りしたのかな
節電に痛し痒しの再稼働

大阪府 畑中 節子

茄子の紺雨あざやかに濡れ光る
戦時中時代の話同窓会
故郷の古井戸今もつるべ操る
夏の空雲の絵筆が走り出す
雨上がり沢蟹歩く農の道

神戸市 能勢 利子

友達に会えば手を振り解く孫
厚化粧とればかわいい女の子
朝鏡笑顔完璧家を出る
昼鏡時々笑顔チェックする
夜鏡自分に笑顔また明日

神戸市 山根 弘子

赤ペンで囲む我が家の嬉しい日
ライバルとここの一番を競いあい
赤いバラ忘れた恋を目覚めさす
赤が好き今も青春夢を追う
気まま旅ペンとノートを友として

尼崎市 小池 幸子

夕暮の散歩で出会う顔なじみ
娘の電話声で元気をさぐつて
台風一過むぎんな傘のそこかしこ
見栄えより着て楽をとる歳となる
道しるべ母の想いの深さ知る

尼崎市 松本 秋子

心身の虫干ししよう梅雨あけに
声響くムンクの叫び超高値
新社員おいおい解る壁と風
煮こぼれる程にはしゃいだクラス会
気心を知つてはるのに壁つくる

加東市 黒崎 美紗子

草引きに負けてはならぬ根くらべ
今日も無事暮れ行く山よ米をとぐ
ひとり居はひとりと会えばそれでよい
草のびる元氣へ今日も勝負する
久し振り知人笑顔の長話

篠山市 北澤 稠民

音沙汰の絶えて久しい友が逝く
野良仕事汗は他人の倍はかく
梅雨さ中妻の小言に逆ギレし
旅先でやはり目につく稲のでき
野良仕事日焼の顔をゴルフかと

三田市 雑賀 一 泉

穏やかな顔と心は別のもの
反省を繰り返しつつ八十路越え
ひとめぼれその気にさせる飯の味
白ワイン飲んでるうちに赤い顔
宝くじ抽選までの貴重品

三田市 辻 開 子

今日もまた愚痴ることなく無事過す
後五年亡母の年まで頑張ろう
食べられぬ霜降り肉が夢に出る
孫が来てベース狂わす老い生活
寺参り元気な足で行けるうち

宝塚市 丸 山 孔 一

無礼講信じた俺が馬鹿だった
ゴールドの免許三年更新す
年賀状昨日書いたと思つたに
オール電化肩身の狭い家になり
晩酌を業眺めて思案する

西宮市 泉 水 冴 子

エルメスもルビーも縁のない暮らし
歌謡曲涙と恋のエッセンス
温泉の効能そない効きますか
こわし屋の意地通したね小沢さん
靴ひもが駄々こねそうな歳になる

西宮市 株 元 玲 子

原発のない国夢語りとなり
不退転の思いかすんで揺れ動く
節電節電と火花撒き散らす
親父の雷は座布団で受ける
お金の要らない笑顔の化粧する

奈良市 尾 畑 なを江

真つ直ぐに歩いた道で悔いがある
子の夢に共に思いをつなげてた
そもそもが我家に金庫いるのかな
ぎりぎりにならぬとあげぬ手も腰も
朝風呂が今一番のお気に入り

奈良県 谷 川 憲

相性の悪い上司にじつと耐え
決める人遠く離れて再稼動
伸びてきたゴーヤ雨戸をそつと開け
変人をユニークという上手口
ミシユランに載らないB級こそ美味い

和歌山市 坂 田 喜久子

藻の影で暑さしのぎをするメダカ
風車気ままな風を待っている
たつぷりの衣を脱ぐとやせたエビ
梅干も皺は自慢でなくなつた
知らぬ間に同居していた花粉症

紀の川市 楠原富子

厳しくも愛があふれた父の屋根
運までも味方につけて選ばれる
黙々と積んだ努力が実を結ぶ
ふるさとをハモると川が流れ出す
ふるさとへ便り出せないフリーター

紀の川市 辻内次根

三食がチンの合図で出来上がる
毎日のように諭吉が出て寒い
ガラパゴスそれを扱い兼ねている
ドリンクが効いた気になる冷えた味
窓全開晴れた七月風入れる

田辺市 小川イセ

たっぶりの愛で育つたいい笑顔
不器用な十指だけれど良く動く
まだ傘寿白寿目指して鋤を振る
おーい雲よ私も乗せて行つとくれ
朝顔が咲く頃私ひばあです

和歌山県 森下よりこ

六月のバラ園手入れ遅れがち
梅雨明けて茗荷畑が賑やかに
花が咲いただけで心が晴れやかに
染まらずにこの地で生きる標準語
サマーセールへ一度は行こうリフレッシュ

鳥取市 大前安子

弱い足叩いてみたり摩ったり
弱い脳どのサプリ買う一思案
出酒らしのお茶注ぎ足して聞き上手
我が儘を通す背中に荷が増える
猛練習やつとふんわりオムライス

鳥取市 坂本とも湖

自立して飛び立つトキが遅しい
平凡な汗だが今日に悔いはない
荒れた手の夫が優しく肩をもみ
愛犬がパーマをかけてミニをはき
外見を飾る人なら信じない

倉吉市 岡崎美知江

にがい水幾度も飲んで強くなる
満タンのハート今にも破れそう
るんるんとポエムの風に乗っている
風向きが変わると見える明日の色
余白には生きたあかしを残しとく

倉吉市 中村毅

ご苦労さんよう働いた足さする
二の足を踏ませる今朝の黒い雲
停電に値上げに稼働全部ダメ
長生きをする為少し腹を立て
旬過ぎた紫陽花誰も見向きせず

倉吉市 前田 喜美子

嫌だなど猫背うつしている鏡
待合室何度も同じ掲示読む

時どきは背骨にやさしうラジオ体操
足比べ外反拇趾は父譲り

ママの顔ダイナミックに描く園児

米子市 生田 寒之

目減りにも耐えて余生を食いつなぐ

街角をコンピニばかり買い占める

冷暖房しのぐスーパー通いづめ

生レバーにとても敵わぬ焼レバー

還暦後覚えた言葉すぐ忘れ

米子市 見山 温子

旅のプラン練つて楽しむ年金者

嫁が来て父の日届くプレゼント

きのうより今日はいいい日の青い空

梅干しとお茶おいてある旅の宿

介護保険いつかはきつと世話になる

鳥取県 大塚 美代子

早苗田がぬるむと恋をする蛙

雑草も花に負けじと背を伸ばす

休日には父子で遊ぶ草野球

登校の道をふさいだ青大将

好きな曲聴いてはかどる野良仕事

鳥取県 岡村 孝明

蛭飼い人呼びムラを活性化

レアアースよくぞ見つけた東大は

庭木から落ちてギブスに泣いている

杖すがり笑い合つてゐる老い二人

水飲んで熱中症は寄せつけぬ

鳥取県 下田 茂登子

拾い集めた噂に色を付けて撒く

年金のお陰夫婦の命綱

暑いと言えば寒いと言つて老い二人

行き先が読めて来たので墓地をかう

年金の差でビールにも差がついている

鳥取県 橋谷 静江

また一人増えて楽しく曾孫抱く

一日の終りに今日の夢叶う

頑固さを病気が少し弱くする

本当に困つた時は無口です

すばらしい一日終えて肩軽い

松江市 相見 柳歩

七割のアウト全く気にしない

ただ感謝七十億を包む空

魂の歌は人生さえ変える

達人の域に届かぬ恋の数

仏との縁来世もその次も

松江市 藤井寿代

企みを隠してくれる片エクボ
つまずけば飛び込む深い胸がある
負けて勝ついつも私に言い聞かす
保護色を纏い可もなく不可もなく
疑問符をつけたまま大飯原発

出雲市 黒目英男

妙案は運動の後よく浮かぶ
僕の夢いずれ叶うと信じてる
プラス思考生きる勇気が湧いてくる
肩書きをなくして世間広くなる
庭先でハサミの音が心地いい

岡山市 藤成操江

少しずつ端折る私のテリトリ
細長く続いた絆手で囲う
今日もまた悔いる安易な妥協癖
無料だと言われてちよつと身構える
合掌で今日一日を締め括る

岡山市 前田恵美子

アジサイは雨とほんとお友だち
梅雨晴れに洗濯物も笑ってる
娘たち思ってるほど思わない
大男小さなトゲに顔しかめ
風知草話し込んでる足を撫で

竹原市 若年幸子

風笑う早苗も笑う古里よ
みどりみどり五感の泳ぐ梅雨の晴れ
不況など知らぬホームの建ち並び
予定無い今日は戸棚の整理など
真夏日の滝の踊りを見て飽かず

竹原市 土井輝恵

延命治療医者もどうやら勧めない
寝太郎はニートだったのその昔
鑑定団縁の無いのが我が家風
線香の煙に誘われ掌を合わす
老いの身に増税と言う鞭を打つ

山口市 中前幸子

天動説を信じたくなるちぎれ雲
虹の岬で天女の舞いを見てしまう
古疵に触れると鳩尾が痛い
手招きをすると返ってくる筈
みんな許して夕焼けが美しい

今治市 渡邊伊津志

夢に出る人の笑顔は自然体
詩心の欠片染みてる古語辞典
太陽に抱かれて器量よい野菜
褒められた数だけ自信ついて来る
飾る程自然の姿逃げて行く

大洲市 花岡 順子

梅雨晴れ間倍の暑さを連れてくる
炎天のぶどうへ袋かけてやる
大騒ぎもされずに鹿の子が産まれ
判つてゐるくせに譲らぬ石頭
ゆつくりと競うナメクジ蝸牛

松山市 神野 きつこ

喪が明けて凝つた身体をジムで解く
しやうがないので遺影に話しかけている
印籠のようにへその緒子に見せる
もやもやとする日は雨が丁度よい
唄わねば損だと梅雨の雨蛙

香南市 桑名 孝雄

生きてるな五臓六腑へ沁みる酒
転ぶなよ歳と酒とが声を掛け
四十年前なら俺も演歌通
留学はしてもメールで追つかける
解放が怖くて群れているメダカ

高知県 増田 純子

水の上ゆくかに心揺れに揺れ
愛憎の寄せては返す胸の波
憎しみを丸めてポイと過去にする
だいじようぶ雨は上がるし日は昇る
大切な一日挫けてはおれぬ

唐津市 吉富 節子

化粧する皺に勝てぬが身嗜み
紫陽花と戯れているカタツムリ
梅雨晴れ間窓全開で高軒
酒呑みの気持ちちがわかる時もある
テレビ医学老いはメモして子に注意

シドニー 坂上 のり子

何気ない美の原点にある比率
救急へ送られた娘を待った椅子
一瞬先に何が起こるか分からない
戻つた笑顔どんな宝もかなわない
退院の夜のネオンが眩し過ぎ

弘前市 高森 一吞

噛み締める奥歯も膝もガタガタで
冷や奴サンマあぶつてワンカップ
鎮魂の祈り七夕天の川
復興へガレキ丸ごと洗いたい
人に汗かけと母から教えられ

塩竈市 木田 比呂朗

茄子漬けの美味に初秋を囁かれ
下腹に力のはいる健診日
ボランティアしてたつもりが邪魔だった
大空を眺めファイトの空回り
終章も未だ直球でする勝負

東京都 井上 つよし

誕生日つくづく見入る顔の皺
お若いといわれ化粧に念が入り
冷房の程良い電車乗り過ごし
ふところは寒いが秘策温めてる
夏風邪に汗をかきかきくしゃみする

東京都 高岡 弥生

梅干しの効き目がわかる季節来た
子育ては終わればすべて宝物
体幹を鍛えて姿勢美しく
ナビがない原チャリ乗ってどこへ行く
仕事して熟睡の日々ありがたい

横浜市 川島 良子

いい家だ逃げも隠れもできる部屋
号外も一緒に届くパンダの死
六十四歳わたしの第二反抗期
平行線 辿る無口になるふたり
資格とる次の生き甲斐決めました

富山市 有澤 嘉晃

写経の筆が風の縁をたぐりよせ
フルムーン過去はのんびり湯に流す
縦横に眺めピカソの解き難い
研ぎ澄ます五感に命泉湧く
水よりも濃い血に絆織り上げる

熱海市 三谷 圭角

嬉しいなゲート仲間の温かさ
久しぶり鳥鷺のライバルみな制す
きみまろを観る人達のいい笑顔
白内障術後は鏡見たくなし
恒産が無くて恒心曲げ通し

豊橋市 藤田 千休

長梅雨に苦いデビューのピアホール
目の保養させて目つきを悪くする
付合いにこころ悩ます車間距離
正札を袋叩きにするキャッシュ
それなのに嗚呼それなのに再稼動

京都市 清水 英旺

人生は光と影のパッチワーク
がれき処理が踏み絵になつている絆
黙って咲き散る鎮魂の沙羅双樹
梅雨寒にシャワーの温度二度上げる
大変化望まぬ年になりました

津川市 新井 弘子

一晚を語り明かして寿命延び
満員電車匂作りをして耐えている
こだわりの小骨残ったままに朝
なぜだろうテレビの演歌しみる夜
病みあがり今日は五百歩クリアする

八幡市 今井 万紗子

ほどほどの大風呂敷で笑い合う
座蒲団にうつぶんひとつ詰めておく

ズケズケと本音が憎い友の弁
世間体俺が要て妻飾り
冷や飯も母の温もり噛み締める
顔洗いい出直す覚悟その日だけ

河内長野市 藤塚 克三

広っぱでひたすら夢を追いかけた
完璧なおひとのそばは疲れます

大阪市 浅井 公平

公園でヨチヨチ歩きみて楽し
かみさんに昔の感謝照れくさい
惜しいけどこれが自分の限界だ
神秘的日の出に染まる空の色

ちか頃は映りの悪い鏡ふえ
そうじゃないだろうと鏡睨み付け
毎日老けてゆく鏡の顔と手
あほらしい立てた夫の亭主面

河内長野市 穂口 正子

大阪市 吉田 知之

裾捌きちらちら色気見せている

人の道歩くあなたの手に縋る
朝露と石畳踏む神頼み

河内長野市 山本 エミ

年重ね旅の思い出飾り棚

ガイドさん日本語だけじゃ務まらぬ

我が本音煽てられるとつい吐いて
一目惚れくすぶり出した恋病

池田市 多田 契子

効用に疑い持つて初夏のウツ

余韻まだタップダンスで帰る道
岸和田市 中岡 香代

偶然か目鼻耳齒に同時テロ

半分を信じた世辞も嘘でした

さばさばと阪神捨てて夕餉にす

過ぎし日のロマンのかから不発弾
ボロ裂かれ草履になったボロの運

河内長野市 大島 友子

褒めおだて子育て術の極みです

輪の中に眩しいほどの君がいる

体幹を鍛え一皮むけました

相好も財布もゆるむ孫の声

銅鏡に陽を受け卑弥呼闇照らす
岸和田市 宮野 みつ江

にじり込み墳墓の主に逢いに行く

出雲路で現世と神代行き戻り
心底を見透す様にはにわの目

堺市 羽田野 洋介

プランだけあちこち巡る時刻表
万歩計の期待へ弾むスニーカー
履きなれた靴で余生を闊歩する
青天井そんな景気よう一度

堺市 増田 和幸

英語圏生れた子供ラッキーか
正義漢ぶつても本音助成金
アメリカにノーがいえない民自公
百億の戦闘機持ちどこ攻める

富田林市 関 よしみ

鶴を折るこの指先にある折り
きっかけは花一輪のころざし
ローカル線お国訛りとさくらんぼ
色と灰汁晒して似合う作業服

富田林市 古田 千華

脱いでよし着てよしこれは若さかな
一張羅脱げばたちまち母の貌
電話中背なで煩い腹話術
凭れ合う二人はいつも口喧嘩

豊中市 荒巻 夢

階段がこんなにきつくなろうとは
ウインドウのマネキンみんな年とらず
広告のうまきに引かれ手が伸びる
本好きの友舐めるごと読むと言う

豊中市 石橋 優明

混沌に混沌重ねトコロテン
群青が逆立ちをして梅雨明ける
格子戸をくぐった先にある不安
ジュリアナを忘れぬ刀自の白扇子

豊中市 源田 啓生

律さんも子規の介護に疲れたか
千里丘陵老い行く窓の灯が赤い
騒いだ子何処へ行行ったかプラタナス
新緑に背いて足が枯れて行く

寝屋川市 岡本 勲

無念坂いくたびか越えてきて傘寿
空堀に昭和の匂い買いに行く
あやしげなところあるのが又魅力
齒ごたえのないものばかり箸を出す

寝屋川市 小谷 滋彦

現代つ子すごいすがすがいが誉め言葉
ひろしまがヒロシマになる原爆忌
盆ダンス太鼓の音にも移民の血
かりゆしの心伝える島の風

阪南市 坂口 公子

天国へ住まい移した妹よ
坪庭も蝶舞い花々天国模様
娘らに捨てられそうな物ばかり
妹のくせして天国片道切符

枚方市 河田 洋子

旨い話勇気を出してお断り
歳などを気にせずまっ赤着る勇氣
他人の子勇氣を出して注意する
ベルが鳴り今してた事すぐ忘れ

枚方市 坂本 ミヨノ

八十路坂歩きつかれて千羽鶴
湯気香る味噌汁朝げ妻の腕
白寿まで夢の花道邪魔がなし
雑草も葉草も摘む干し菜

枚方市 松原 保

この国の一兵卒がおお暴れ
これ以上新党不要民意です
この不況吉本だけが笑ってる
もうやめて揚げ足取りの政争は

藤井寺市 田付 絹枝

弱点を握って円満五十年
出合ったが会話途切れて遠い道
ああ名曲自動ピアノが足を止め
連日の旅のパンフで旅疲れ

松原市 市川 雄太

ファックスを便利と知ったババ
コンビニが夜中の時に役立って
パンダの子期待の矢先命終え
人生をここで終えたら悔い残る

箕面市 酒井 紀子

恋多き女振ったり振られたり
一日を祭と思い生きてます
絵手紙があなたの心つれてくる
太陽の恵み新芽がわらいだす

八尾市 田邊 浩三

ケータイに席奪われる腕時計
散歩道昨日無かった家が建つ
終電車無罪勝ち取るケーキ抱く
ぬか漬はジイに限るとおだてられ

八尾市 前田 紀雄

心意気遺産は無いが継いでいる
断捨離をすると頭が軽くなり
美しい地球残そう脱原発
真夏日になるとゴーヤが良く育つ

大阪府 小栢 こずえ

とり柄など何も無いけど生きて来た
家毎にそれぞれ違う花が咲き
曲ってる胡瓜も味は同じ味
日は陰り労をねぎらう夕日映え

大阪府 高木 道子

雨三日エコに徹してロスタイム
独り居を慰めて泣く牛蛙
お日様に皆ぶちまける梅雨晴れ間
訪えばその家の匂い梅雨籠り

大阪府 中井 記久乃

久しぶり活魚三味海の幸

向う岸鏡で合図愛送る

メガネ置き牛乳パック利用する

風呂好きの亭主借り出し温泉へ

大阪府 西川 冷子

古暖簾老舗を誇る庭の苔

老いの坂うまく越すのは努力のみ

無意識で出ている癖は親ゆずり

老いた今論吉も要らん平和のみ

神戸市 玄番 美恵子

太陽と風を掴んで生きる知恵

くるくると回せばドラマ出る日傘

無気力な地球を焦がし夏がゆく

コッ掴み筆に勢い出る句箋

神戸市 興水 弘

赤ちゃんをあやす子ら皆美しい

初夏の風君に差し出す赤いバラ

競うこと止めて気付いたアホらしさ

役目終え海にのまれてゆく夕日

加東市 岩本 美緒子

風邪の臥所息子の手の平あてがわれ

筆使い重ね余生のありがたさ

テレビ早口吾が脳弱く呑み込めず

叱責も時おり呆け笑うておく

川西市 日野岡 和之

負けて克つ我が人生の旗印

不器用が取り柄の男世の重石

咲き遅れ紫陽花みごと梅雨飾り

泡沫の恋の行く末天の川

篠山市 石田 久子

ど忘れが進んで辞書と仲良しに

青い空今日は心の虫干しに

雨上り顔に映えてる若葉風

友と逢い元気を貰う趣味の会

篠山市 酒井 健二

戒めの欲得からみ無我夢中

相性が良くて受けてるマッサージ

気合入れ化粧終れば寝る電車

お笑いかグルメしかない時間帯

篠山市 佐々木 勇

平凡な暮しの中にある不安

寝めごとに徹する母の知恵袋

旅立ちの心はすでにスカイツリー

胡瓜まで器量よしから売れていき

篠山市 谷田 多美子

ハイ握手温もりのこして曾孫去ぬ

虎シャツが梅雨にしおれる負け勝負

子の背中ママの叱言が追っている

幸せを大盛りにしてハンバーグ

篠山市 永井 かほる

ケイトウ苗お盆用にと植えました
つるつるの少女の腕にしつとする
少女等のしゃべる早さに輪に入れず
柏餅作りくばって行事すみ

篠山市 藤井 美智子

もう一人私がほしい超多忙
反対に笑われている叱り下手
お叱りを受けたとうれしそうに言う
汗たっぷり木綿のシャツが離せない

三田市 上田 ひとみ

七夕はやつぱり胸がキュンとなる
美しい箱の中味は内緒です
乱暴にキャベツ切つてはいけません
二番目に好きでちつとも構わない

三木市 山口 久子

虎の我今はずきでおとなしく
孫達は目で口ほどに物を言う
手に余る仕事におわれ子にあたる
夏休み宿題多いとひ孫泣き

奈良市 前田 弘恵

八十路越え恋心だけ衰えず
嫁ぎ先家訓異なる姉妹寄り
又一つ晶屑の巨星墜ちて行き
物作り素人目線がヒットする

和歌山市 磯部 義雄

孫達の名前男と子が消えた
皇室に畏れ多くも週刊誌
農家継ぐ勇氣独身者の悩みに
完食に調理の人の安堵の目

和歌山市 坂部 かずみ

朝顔が咲いて数える古希の夫
雨よ降れ行方知れずの蛙たち
大人しく聞いてみようよ子の理論
懸命に生きた証に紫蘇をもむ

和歌山市 平田 元三

映画村偶に昔が顔を出す
見知らぬ地見た顔どうし語り合う
尻尾見ろ君は仲間と犬が振る
得になる話だけ聞く勝手耳

岩出市 村中 悦男

今日もまた医者へ行くだけ元気です
忘れても言いわけ出来る歳になり
脳回路つまつたらしい名が出ない
施錠した瞬間気付く忘れ物

田辺市 大峠 可動

炎天下一文無しも汗をかき
物忘れ一日一日が万華鏡
風が吹く神が下さる向かい風
煩惱と斜めに落ちて流れ星

鳥取市 近藤 秋星

天の川下界は梅雨の真つ盛り

大空へ翔ばたけ若き夫婦鳥 (祝矢田希望さん結婚)

鮎漁解禁大公望の竿ずらり

長生きもほどほど息子先に逝く

鳥取市 津村 律子

長兄を癌で亡くして三回忌

早期発見亡兄のお陰で手術無事

洗い剥げ案山子も着ないもんべはく

おとなりへ自家菜園の旬野菜

倉吉市 田中 紀美恵

流れ星ありがとまでで消えちやつた

子は親を選べないでもありがとう

早食のコンテスト入歯ではビリ

地図の上ひとつ飛びだよ宇宙へも

倉吉市 堀 かずこ

ケシゴムで失恋の傷消えません

悔しさを心に秘めてバネにする

病みあがり足のふらつきかくせない

マンガ博コナン鬼太郎待っている

境港市 中井 虎尾

マイペースそれでいいよカタツムリ

考えりや人は電波の中に住む

不採用入れたら会社取られそう

うちの犬狸と言われダイエツト

米子市 池田 たけし

年を経るごとに不足は消えてゆき

この頃の星はどこかに雲がくれ

国会のイメージこわす議員達

よき友と明るい笑みをかわしあい

米子市 野川 宣子

ぬる爛に骨まで丸め込まれてる

四苦八苦覚えた腕は忘れない

蟠り解けたか腕を預けられ

腕組めば百人力の嫁姑

米子市 加藤 正二

美しい故郷を歌う被災の地

病い虫老いをねらつてしのび寄る

予定だけ上手に立てる年になる

がれき山絆絆の風が吹く

米子市 田村 周子

ジープの破れ気になるおばあちゃん

丸い顔やさしい笑みに癒される

スムーズに指が曲らぬ油切れ

今生きるこの幸せを噛みしめる

米子市 湯浅 久司

根を残しやがて芽を出し笑う草

たつぷりとネジを緩めて昼寝する

被災地の子どもの言葉前を向く

雨の日に庭の掃除がしたくなる

鳥取県 飯野 菖子

葉桜に思いを寄せる花の頃
育つ日を信じて蒔いた種でした
号令をかけると動く足腰だ
ああ原発これでもいいのか日本よ

鳥取県 田口 清帆

金よりも人の絆がよく光る
プラス思考ここに温い風を待つ
愛は未だ言葉に成らぬ遠花火
夢一つあれば明日への生きる糧

松江市 河西 草庵

鮮やかな群青色に腕を見る
胸を張れアウトの後にチャンス来る
節電の夏は深山で昼寝する
頑張ってみるか空振り多くなる

松江市 山根 邦代

欲張りが離れないから明日が来る
絵手紙が語りかけてる薫りまで
時々耳が喜ぶ話しぶり
力士より力が入るテレビ前

安来市 原 煩悩児

時時は孫の電話に励まされ
五風十雨田畑山林活気満ち
散骨で後の心配させまいぞ
薫風に施設の妻もベランダに

岡山市 永見 心咲

左肩昨日の憂さが離れない
かも知れぬ疑心暗鬼の雲が湧く
顔立ちが派手だといつも損な役
やっぱりネこういう事か独り言

備前市 森 ふみか

引き替える作り笑顔とパン一個
踊り場で足踏みをする癌告知
巣を捨てて礼も言わずにツバメまで
さらばえた身に合う服のない余世

竹原市 六田 半徳

乾杯はビールで一口後はお茶
梅雨晴れ間ゴミ不用物山が出来
自画像の額のしわを短めに
オスプレイ事故情報は日米で

宇部市 高山 清子

炎天下出るぞと足に言い聞かせ
それだけの付き合いだつた紙コップ
子等の世話にならぬと言えぬもしや明日
満月へ悩みをこぼす老い独り

四国中央市 篠原 久

朝晩が逆さになつて眼が覚める
舌切りの刑を覚悟でみな喋る
女には甘くていつも墓穴掘る
向日葵は朝の挨拶かかさない

高知市 三 谷 待太郎

彼岸会にそつと寄りたい墓一つ
若アユにわが余力では追いつけず
懐旧談切れ目がなくて出番来ず
報道の公器と凶器紙一重

北九州市 小 松 紀 子

しなればとは思ふけどまあいいか
あら嬉し雀が六羽庭遊び
そよ風にゴーヤカーテン目の保養
日帰りであの世とやらへ旅したい

福岡県 本 田 さくら

タマ病氣財布空つぽでも家族
小包が届くふるさと近くなる
断捨離と思ういつしか古希を過ぎ
姿見に映る猫背に亡母を見る

佐賀市 清 水 園 實

ストレスはためないためにかき氷
50キロ兄の体重うらやまし
バス乗れば席ゆずられる年になり
遊歩道ただで歩ける健康法

唐津市 岩 崎 實

このところ異変シャッキリ大欠伸
自転車も乗れなくなつたさびしいね
仕事着にやめといてとの老婆の声
梅雨半ば殆んど田植え済み安堵

唐津市 北 村 松 風

二歳の児母に学んで先ず仏間
友達の義理を信じた保証印
忘れても惜しくない傘もたされた
おはようがはじけて路地が動きだす

山鹿市 三 谷 たん吉

教室で立たされた気分一句ぬけ
世渡りは下手でも仲間うんと居る
世も変り昨日罪人今日党主
干ばつか豪雨か天も無器用もん

山鹿市 米 加 田 恭 代

傷心を繕うためのお裁縫
行き迷う夢の中まで不透明
半歩前差し出される手欲しいだけ
生き抜けと歴史が背中押してくる

札幌市 佐 藤 登美子

主のない空き家へ花が寂しげに
フラダンス昔の乙女華やいで
節電へアンペア下げて扇風機
グルメ旅夜は潮騒子守り歌

福島県 七ツ森 客 山

老猫は石の余熱に身をまかす
羊羹を厚く渋茶で世相切る
さて今日はどんな私か五七五
琴線に触れると意地がピンと張る

東京都 大竹 一 良

人の良さにじみ出ている軽い尻
親切も人と場所ではおせっかい
紫陽花と向日葵を見る面白さ
悶々の心開いた遍路旅

横浜市 巖 田 かず枝

レンタルとパンダは知っているかしら
シャンソンを聴いて紅茶を飲む至福
多すぎる髪とお金も悩みとは
孫ほめて嫁の喜ぶ顔が好き

相模原市 赤 木 妙 子

そのけそのけと自転車走り抜け
これでまあ民の為とは恐ろしや
茄子の艶思ひ出の中色褪せず
センセイの目が泳ぐよ泳ぐコメント中

佐渡市 高 野 不 二

省エネで結局高い球を買う
貰えない補助金の記事ばかり
海の向うのオリンピックに気がさわぐ
断捨離は空箱一つ捨てただけ

静岡市 渡 辺 芳 子

世の進み想定外の事ばかり
その昔言えない思い胸に住む
老いの幸一人遊びが上手です
鯉のぼりビックリで見るスカイツリー

江南市 脇 田 雅 美

以下同文同じ賞状三人目
スッピンが映る鏡に苦笑い

半熟の卵のように陽が沈む
川幅を甘く見すぎて飛び越えぬ

愛知県 樺 嶺 志

だらしな禁句にさせたクールビズ
マニフェスト今頃誰が信じてる

政局になれば急増勉強会
元氣かに応ずる側の曖昧さ

昭和ひと柄しないさせない食べ残し
匿名の投書で癒やす腹の虫

眠れぬ夜虫の知らせか胸さわぎ
苗は枯れ抜いた雑草花が咲き

散歩中カラスちよっかい犬にかけ
私なら泣くまで待つタイプかな

泣くことでちよっと心が救われる
しゃべらして貰い少しは気が晴れる

.....



(つづき)

(前月分) 東大阪市 笠 井 欣 子

夫逝つて孫が生まれるのもこの世
ゆつくりとテンポ崩さず土をふむ

コイさんと言われた友も孫五人
久し振りに歩けば八百屋消えていた

エレベーター一人の時は乗りません

新川柳鑑賞 (7)

麻生 路郎

柿のなる家へそろそろ寄附のこと

(万葉)

秋祭の寄附と見ていいだろう。「そろそろ」で祭の世話役の五、六人が廻つて来たのである。「柿のなる家へ」は秋の情景も出てゐるし、たわなに柿が生つてゐる家だというと、村でも多少余裕のあることが思われる。ステテコの貧相な足を見せる秋

(ひか平)

太った男の、あんどんのようなステテコ姿は似つかわしいような感じがするが、痩せ細った男の貧相な足がニューツと裾短かなステテコから出ているのを見ると「ああ、秋だなア」と云う切実なものを感ぜさせられると云うのである。いつのほどにか夏の過ぎたことを巧みに表している。

頂いた菊の手入れにまで来られ

(保美)

大輪の菊をほめたばかりに「持つてお帰

りなさい。差し上げます」

と云われ、もらつて来たのはよいが、どう手入れしていいか判らない。

それと祭した菊のあるじは、我が子を余所へやつたように思い、菊の手入れに出かけたのである。

やつた方と貰つた方の生活ぶりや人物までが想像される。

月光に人みな同じ感歎詞

(太郎丸)

月下に立つて月光の美にうたれた人が、思わず心の底から発する感歎詞はみな同じだといふのである。作者の自然に対する済みきつた感受性を想わされる。

読みもせぬくせに読書の秋ですな

(晃)

「二科展を御覧になりましたか」

ロクに画の判らぬくせに、こんなことをいう人がある。こどもの漫画本を横取りして読む位がせいぜいなのに、

「読書の秋ですなあ」という人がある。なかなか皮肉な句である。

接吻を奪われそつな霧流れ

(芳仙)

なんだか、ひとりて夢みているような、

官能の陶醉に誘致されているような芸術味の豊かな句である。こんな句は解釈すると詩を殺して仕舞う。ただ繰り返えして味読すれば、そのよさがおのずから判つて来るであらう。

秋だなど金を持たない者同志

(七面山)

「秋だなあ」

「旅がおもわれてならない」

「青い空を眺めて」

「ちびりちびりと盃をなめるのも悪くないからなア」

「ジツとしていられないじゃアないか」

「どつかへ出かけるか」

「それもいいが」

「お互いにななしじゃア、どうにもならない」と云つたところか。

「秋だなあ」がよく利いている。

井戸水の底の底にも秋澄めり

(灯竿)

井戸水の清澄さはまた格別である。水晶の透明さと冷たさは身のしまる思いがする。その冷たい水をたたえた底の底に秋が澄んでいるのに心をうごかされたのである。何というすがすがしい句であらう。

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から昭和五十一年発刊)

昭和三十三年～三十五年

大悟一番すれば我の非力なる

血圧があがらぬ薬 猪口でのみ

みをつくしとつくに聞いた酔い心地

三味線が好きで姑のお氣に入り

妙薬はない 安静になさりませ

昭和三十四年

そんな手はお古い 急所はずされる

年賀状今年も無沙汰予約する

冷奴で待つ新妻のしよたいじみ

元旦だこの幸せを妻と酌み

昭和三十五年

蛸壺の蛸は用心したつもり

お互いに気づかぬふりのすれ違い

あく友の手真似マージャン誘うてる

浮き草は浮き草なりに花が咲き

宿命を素直に背負う雑魚の群

極楽へ来てあの人が見当らず

故障した呼鈴に似た男です

頑固さがわざと転んだ様に言い

全山冷房ですと高野から便り

英語 de Senryu ⑨

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

少女で通す ちちははの前

*she pretends
to be a pure girl
to her parents*

椅子の背に もう青春が消えていた

*on the back of chair
my youth
already disappears*

～リバーウィローのため息～ (R・H・ブライスの仕事1)

明治以来、バジル・ホール・チェンバレンやラフカディオ・ハーンをはじめ日本の短詩型文学に興味を持った外国人は多く見られます。しかし吉田機司と共著で『世界の諷刺詩川柳』(日本出版協同株式会社 1950)を執筆した R.H. ブライス (Reginald Horace Blyth 1893-1964) ほど、俳句・川柳にのめり込んだ外国人はいません。そしてブライスは川柳を英訳した初めての外国人ですし、川柳を「世界の諷刺詩」として位置づけました。彼は日本の俳句、川柳を英訳するだけでなく鈴木大拙を師として禅仏教に通じ、彼独特の俳句観・川柳観を背景に俳句や川柳を海外に紹介しました。ブライスは英国エセックス州レイトンで生れ、ロンドン大学(英文学専攻)を優等で卒業しました。当時、日本の統治下にあった朝鮮、京城帝国大学予科および大学で英語・英文学を教える教員を探していた藤井秋夫(帰国後京城帝国大学予科就任教授)から京城赴任を勧められました。そのためロンドン大学教育科教員免許を取得し、1924年に京城帝国大学予科教師備入契約をして、9月より教職に就きました。ブライスは朝鮮に16年、日本に24年の通算40年の長きにわたって日本に暮らしましたが、在日年数14年のラフカディオ・ハーンほど知られていないのは残念なことです。ブライスの業績として、文学・宗教関連では、①海外に禅を広めた鈴木大拙の信奉者 ②第二次世界大戦後の俳句・川柳海外普及の立役者 ③膨大な数の日本古典俳句と川柳の英訳・解説 ④1950～60年代のアメリカ詩壇への影響、また、終戦時のGHQと皇室関連では、⑤昭和天皇の「人間宣言」(1946)の草案の作成 ⑥戦後の学習院の私学としての継続に貢献 ⑦皇太子(現天皇)の家庭教師 ⑧宮内省とGHQのメッセンジャーとして、戦後の皇室の維持に重要な役割を担ったことが知られています。

誹風柳多留——一篇研究 85

清 賛

664 能い月夜がぐらをふいて二度通り

山田 月夜の美しい夜、神楽笛を吹いて、あ
たかも「神子」のお出ましを願うかのように、
恋しい女の家の前を二度も通って行った。
下女が色おなまめぶして二度通り

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清吾
伊吹 和男
清 博美

安七満2

増田 礎解では、柳句としてはきれいな過ぎる
気もするのですが、別解なし。

山口 家に居る者への何かの合図、例えば遊
びの誘いのようなものではないか。

小栗 私もし山口説のように感じたが、「神楽
を吹いて」がわからない。

清 小生も吉原行きと考えているが、神楽笛
という特定の言葉に引つ掛かる。

665 不男のふられたはなし実の事

山田 色男なら「振られたよ」といっても、
誰も信用しないが、醜男の場合は誰もが「実
のこと」と思う。

不男のいらざる年のかくし事

山口 賛。これは吉原だろうか。地女に振ら
れたのだろうか。どちらでもいいか。

662 もみちかり車ハわきへおしやられ

山田 吉原京町の三浦屋のお職・十代目高
尾（川柳では二代目）は、寛保元年、姫路
十五万石城主・榊原式部大輔政岑に身請けさ
れた。身請け金は一八〇〇両といわれた。こ
れが幕閣の知るところとなり、越後高田へ国
替えとなり、隠居を申し付けられた。

三浦屋では歴代の高尾の調度や衣裳には紅
葉の紋を付け、また榊原家の家紋は源氏車。
紅葉の名所高尾で「紅葉狩り」して、その結
果、榊原の源氏「車は脇へ押しやられ」すな
わち越後高田へ転封となり、政岑は隠居の身
となったのである。

紅葉狩したので跡ハ車留
紅葉かり済んで車の所替
清 賛

四〇18
明礼4

663 花嫁ハかこうの中で茶づけ也

山田 「川柳風俗志」では、嫁入り間なしの
婚家での食事風景に取られているが、「佳肴
の中で」とあるから、この句は婚礼の祝宴の
場とすべきであろう。花嫁は、飲み食いもま
まならず、宴会が終わるまで、ひたすら堪え
ている。だから、祝宴の前か後に、せいぜい
茶漬けくらいしか口に出来ないというのであ
ろう。

気のもめる日ハ朝めしのまんま也 三〇

清 賛。

666 どこへ／＼とおして出る松洞寺

山田 松洞寺は、正式には東陽山正燈寺。浅草竜泉寺町の臨濟宗妙心寺派の寺。紅葉の名所として知られるが、吉原が近いので、紅葉見物を口実に、吉原行きを決め込む輩も多かった。

押しては「積極的に出て、おしやるように」の意（日国）。主題句は、正灯寺に来ていた連中が、一体何処へ行くのかという勢いで、出て行ったというのだが、勿論吉原に決まっている。

なお、「押して」という語は、「動詞『押す』の連用形に『て』が付いたもの。『押す』には「⑦大勢で遊里へ繰り込む」（日国）」という義があるが、付会に過ぎるか。

角田川どこへ／＼と引きづられ

安礼3

増田 賛。「どこへどこへ」は、はやしことばも兼ねようか。

山口 賛。誰かが「さてこれから」と言ったのに対して「どこへどこへ」とせき立てたのだろう。行き先は決っているのに。

小栗 賛。増田兄の言われる如く、芝居風の

言葉遣いのようである。

清 同。

667 わる口がいやさにむす子たいて出す

山田 この息子は、赤ん坊の息子なのか、その父親なのかはつきりしない。子供のことなら、わざわざ「息子」と云う意図が分らないし、その場合でも、抱いて出ぬのは父親なのか母親なのか分からない。

ところがこれを父親だとすると、ついこの間までドラを張っていた息子が、一転して、子供を抱いて出るなんてことになったら、何を言われるか分からないという解が成り立ちそうだが、如何であろうか。ご教示賜りたい。なお本句、「川柳風俗志」の頭注には「早いね、もう捨てたのかなどといはる、がいやさに」とあり、多分初産の母親あたりであろう。

いつの間に、と二ツ三ツあやし 一〇一七

増田 賛。子持ちの息子は川柳には少ないが、やはり男親か。

小栗 賛。男親。

清 賛。男親。照れるものである。

668 せんべいをあたまへ上てめつけさせ

山田 子供に煎餅をやるうとして、わざと頭に煎餅を乗せて、見つけやすいようにしている、多分に子煩悩な男親。「頭」は子供、親ともに成り立つが、子供の頭の方が面白い。「煎餅は何処に行つたかな」。

まんぢうをときんにあてる子ばんのふ

二二五

清 賛。

669 あたごからあそこだなあと本能寺

山田 天正十年五月、明智光秀は織田信長に、備中高松城を攻略中の豊臣秀吉の援軍を命ぜられ、丹波・亀山の居城への帰途、戦勝祈願のために京都・愛宕山に参詣し、里村紹巴らと百韻連歌を興行して奉納した。その時の光秀の発句が有名な「とは今あめが下しる五月哉」である。六月一日夜半高松へ向け出発したが、急速変更、京都本能寺に泊まっている信長を急襲し、これを亡ぼした。

主題句は、愛宕山から本能寺を眺めた光秀は、三日後に襲撃する本能寺は「あそこだなあ」と心でつぶやいたであろうとの穿ち。

おそろしい十七文字ハあたご也 二五二八

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

西宮市

牧瀨富喜子

深いところで繋がっている無口

(評) 愛想や世辞など、口先だけで繋がっているのは脆い。こころの奥深くで理解し合っており、氣遣いの饒舌などは不要。

大阪市

柴本ばつは

日の丸の扇のような夫です

(評) 「日の丸の扇って、どんな夫や」と突っ込みたくなるが、読者各位それぞれご自由にご推定ください、いうところであらうか。

姫路市

古川 奮水

子が無くて利口な犬と散歩する

(評) 出来の悪い子は平穩な暮らしを乱すが、利口な犬は我儘を言わず極めて素直。尻尾を振ったりペロペロ舐めて慰めてくれる。

米子市

成田 雨奇

掃除機を止めて空耳だとわかる

(評) 歳を重ねることにそのようなことが増えてくる。そのうちに、掃除機を止めてもまだ誰かの声がするようになる、かもしれない。

瀬戸内市

東横ますみ

ラの音で鳴るあの人からの電話

(評) 他人の人が聞けば同じ音だが、私だけはその違いが分かる。情熱が滾っている間は感知できる、期間限定の鋭いテレパシー。

大阪市

田浦 實

法の上に御天道様が御座します

(評) 法律の網の破れ目で人を泣かせている者どもが絶えない。しかし、お天道様はすべてお見通し。いずれ必ず天罰が下る。

羽曳野市

徳山みつこ

強風の夜は風鈴休ませる

(評) 強風の夜の風鈴はうるさくて寝ておれない。自分の都合なのに「休ませる」という恩着せがましい言い方には風鈴も苦笑。

河内長野市

坂上 淳司

さて何を楽しみますか妻は留守

(評) 顔には出さないが「やつたぜ」。誰の視線も気にせず自由を満喫できるひととき。しかし、二日もすればウンザリであろう。

弘前市

今 愁女

抜け目ない商魂 冷やしカップ麺

(評) 節電の夏に向かって開発された様々な新商品。中でも冷たいカップ麺にはビックリ。さて、思惑通り売れるのかどうか？

米子市

中原 章子

先送りしてもいい句は生まれもない

(評) 投句締切りはまだ先だから「もう少し

粘って」とウダウダしても突然の閃きなどは稀。やはり一気呵成の集中力であらうか。

大阪市

笠嶋 惠美

しんどいときやまぐさがりになりさがる友よりも長生きしたら運が向き

台風に命惜しいと引き籠る

宇都市

平田 実男

お袋の味忘れさす妻の味

割り勘のときはいつでも二日酔良く回る舌で味方も敵も増え

三田市

上田ひとみ

ますビールそれからお酒らしいです

二人きりしんどい時間増えて行く

大阪市

高杉 力

時間ならあります夜行バスの旅

半歩ずつ譲り譲られ立ち飲み屋

松山市

神野きつこ

五十三まだまだ私お嬢さん

ボーナスがカーブを描き落ちてゆく

豊中市

水野 黒兎

長々とビザの名前のカタカナ語

至福とは汗のほろびに飲むビール

大阪市

大川 桃花

明石の蛸食べに高速一時間

失敗にただでは起きぬ句を拾う

大阪市

太田としお

自然体これが出来たらあの世行き

高槻市 片山かずお
ベストではないが夫婦という仲間

青森市 守田 啓子
親不孝深く食い込むブラの紐

三田市 北野 哲男
最後には少し悶えて独楽止まる

鳥取市 有沢せつ子
廃品に出す服ボタン取っておく

弘前市 高瀬 霜石
傾いた家にも固定資産税

岡山市 永見 心咲
投句した日から活字を待っている

海都市 三宅 保州
スポンジが渴いたままの化粧台

堺市 矢倉 五月
所により事故が起こるでしょう今日も

鳥取市 岸本 宏章
よく涙出ます鼻腔も老化気味

鳥取市 岸本 宏章
念入りに膝手入れしてミニ試す

鳥取市 岸本 宏章
無職です今は土日が忙しい

寝屋川市 籠島 恵子
答え方一つで変人になった

松江市 石橋 芳山
あの山に登れた事は忘れよう

松江市 石橋 芳山
染みついた体臭である敷布団

松江市 石橋 芳山
変人と括られ悪い気がしない

美作市 福原 悦子
ポケットが浅くて財布覗かれる

篠山市 遠山 可住
井戸水の番茶がお気に召す

岡山市 工藤千代子
ゴキブリに動じぬ妻になりました

枚方市 丹後屋 肇
古代史を麦藁帽が掘っている

奈良県 渡辺 富子
新調のドレスを褒めるのも礼儀

三田市 福田 好文
病気でも入れる保険売りに来る

大阪府 津村志華子
前立腺肥大で蛇口緩みだす

大阪府 津村志華子
残像が消えずに君のことばかり

鳥取市 高浜 勇
夾竹桃の白弟は雲の峰

海都市 小谷 小雪
誰でもが好きとかぎらぬ毒味

海都市 小谷 小雪
シーサーをたたき起こしたオスブレイ

海都市 小谷 小雪
塩漬の梅正座して夏を待つ

岡山市 藤成 操江
初盆へ鶏頭の首伸び急ぐ

大阪府 井丸 昌紀
大勢で飲めばおいしい缶ビール

大阪府 井丸 昌紀
誕生日息子にルーベ所望する

大阪府 井丸 昌紀
いい歳をしてケータイに怒鳴ってる

大阪府 井丸 昌紀
中心に座るとお尻痒くなる

池田市 上山 堅坊
趣味の会へちよつと無理した予定組む

備前市 森 ふみか
買物の途中で財布確かめる

米子市 生田 寒之
飲兵衛を囲む家族が下戸ばかり

京都市 榎本 宏子
母と娘が仲良くするとすねる猫

吹田市 太田 昭
スイカの種を飛ばし肺活量を知る

篠山市 酒井 真由
好きな人が住んでた好きな街にいる

堺市 大隅 克博
好きだとはとうと言えず淋しいよ

堺市 大隅 克博
片言の言葉に混じるオノマトペ

和歌山市 古久保和子
妻からは消えたおかえりなさいませ

堺市 加島 由一
めだか孵化今日はめでたい日と記す

堺市 加島 由一
ばあちゃんのカスチネットがずれている

堺市 加島 由一
節電はケチで前からやっている

大阪府 米澤 俣子
酷暑よしスイカふりりん蝉しぐれ

大阪府 米澤 俣子
命名の時代が分かる子の名前

大阪府 米澤 俣子
台風に乗をさしても無駄なのに

大阪府 米澤 俣子
ボランテアする人金を貰う人

大阪府 米澤 俣子
掌を合わすのはわたくしの為である

高知市 小川てるみ

年金でレディーメードの服ばかり

人生の秋を肌から知らされる

榎原市 居谷真理子

産卵も偉い孵化するのも偉い

平成の空気食べてるようなパン

大阪府 初山 隆盛

大阪にお出で梅田の変わり様

かけあしで後期高齢通過中

藤井寺市 俣野登志子

馬鹿にされ馬鹿になるほどかしこない

書きかけた手紙横目に電話する

大和郡山市 坊農 柳弘

表彰状以下同文の浅い椅子

焙られてスルメは息を吹き返す

奈良市 大久保真澄

ドッコイショ五十過ぎたら共通語

一つまみほどの自惚れならいいか

藤井寺市 鈴木いさお

お湯割りの濃さにこだわり持っている

句会後は飲もう食べよう歌おうぜ

豊中市 松尾美智代

ねぶた見てシャンソン聴いて友に会う

人恋しくなります夜のこぬか雨

川西市 山口 不動

読みかけの本を落として今日終わる

十七夜少し熟した月と居る

箕面市 出口セツ子

迷ったら明日しか見ないことにする

人の温み感じる位置で居る独り

八尾市 田邊 浩三

句が出来ず遠回りする散歩道

死ぬまでに使いこなしてやるスマホ

東大阪市 北村 賢子

人間のこころ微塵も無いじめ

練習までさせられ逝った子の無念

大阪市 谷口 義

私だけが横を向いている写真

顔洗うまでは覚えていたのだが

堺市 遠山 唯教

ひめゆりの眠りを醒ますオスブレイ

丸坊主意外に似合うアロハシャツ

河内長野市 藤塚 克三

カナリアが歌を忘れず胸にいる

鳥取県 西谷 悦子

妻の留守妙な不安と落ち着きと

和歌山市 喜田 准一

友達も三年日記つけている

河内長野市 水谷 正子

タネ仕掛けなく家計簿はいつも赤

八尾市 村上 直樹

真つすぐな線が引けない老い加速

堺市 奥 時雄

ウォシシュレット文机欲しい時がある

京都市 都倉 求芽

坐禅などしたらわたしは即眠る

倉吉市 山中 康子

喝入れる大きな声の選者さん

亀岡市 井上 森生

ゾウガメがひとりぼっちのサヨウナラ

藤井寺市 太田扶美代

わたしにしか見えないささやかな幸

弘前市 福士 慕情

おおっぱりに宣伝してる店仕舞い

鳥取市 永原 昌鼓

走るほど詰まっていけないスケジュール

枚方市 寺川 弘一

モナリザが着ていたものは見ていない

大阪市 神夏磯典子

真夜中の遠雷 夫思い出す

八尾市 吉村 一風

憎まれ口たたいて妻は絶好調

和歌山市 田中 みね

冴え渡る口が私の宝かも

枚方市 松原 保

このゲーム負けるものかと孫相手

三田市 堀 正和

会長の肩書貰い世話係

尼崎市 春城 年代

大正から歩き続けた足さする

鳥取市 土橋はるお

河内長野市 梶原 弘光
愛犬に渡世の義理を諄諄と

大阪市 栃尾 奏子
痴話喧嘩迪ればイヴとアダムなり

奈良市 辻内げんえい
健診のたびに異常値増えていく

鳥取県 石谷美恵子
自分ではほんの少しと思うボケ

寝屋川市 岡本 勲
涼しさを大盛りにしてカキ氷

東かがわ市 川崎ひかり
他人様に極秘にしてる裏の顔

池田市 栗田 久子
人並といわれることのありがたさ

鳥取県 吉野いさお
いい人はやっぱり先に死んで行く

和歌山県 森下よりこ
初採りの茗荷で先ずは茗荷めし

高槻市 島田千鶴子
この膝に天使を抱いた日の記憶

唐津市 井上 勝視
私が値踏みされそな駟斗袋

西宮市 緒方美津子
非常袋の点検で済むありがたさ

和泉市 横山 捷也
人間ドックまた一病が増えました

鳥取市 倉益 一瑤
宝石箱ちゃんと友達入れてある

大阪市 坂 裕之
中締めで幹事づくりりビール注ぐ

シドニー 坂上のり子
病む主の側を動かす憂う猫

鳥取市 夏目 一粹
青大将ガキ大将も見かけない

紀の川市 北山 絹子
悪友の別れ話へ同意する

札幌市 三浦 強一
八十路いま爺の最後の反抗期

三田市 田中 章子
幸せな眠りくださいハルシオン

福島県 七ツ森客山
朝ばらけまだ影のまま深呼吸

鳥取県 岩崎 和子
日やけ止めつけてさてさて何処行こう

和歌山県 磯部 義雄
節電をチラチラさせている値上げ

三田市 石原 歳子
紫陽花園孫の興味は蝸牛

奈良市 岩本 浩二
老いらくの恋に備えてコラーゲン

和歌山市 松尾 和香
素晴らしい夕陽わたしはノーマイク

豊中市 藤井 則彦
年毎にだんだん好きになる夕陽

鳥取市 福西 茶子
梅干しかシヤケかで夫婦揉めている

枚方市 二宮 山久
節電はわかってはいるがこの暑さ

奈良市 加門 萌子
エグザイル飽きないうちは未だ若い

田辺市 岡本 昇
的を射て呼び名を変える四季の雨

鳥取市 中宇地秀四
何処までも月が私を見張ってる

大阪府 桑田ゆきの
厨窓守宮の指が漫画めく

大阪市 津守 柳伸
糸切れた風入院の落し穴

和歌山市 福本 英子
ひたすらに生きてきましたシングルで

奈良市 尾畑なを江
いきなりのいらっしやいとは九官鳥

唐津市 北村 松風
勝つまではもう一番とヘボ将棋

岸和田市 雪本 珠子
現役の間は顔が利いたのに

弘前市 高森 一吞
歛握る背中が丸い野良の母

枚方市 小林 わこ
自慢の鼻よピアスなんかはつけないで

倉吉市 山本 玲子
味も香もない大根も煮てうまい

熊本県 岩切 康子
人もいろいろ花もいろいろ紫陽花寺

共選欄

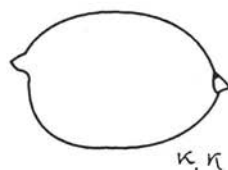
檸

檬

抄

(薰風書、カッタとも)

(投句 738句)



「継ぐ」奥田みつ子選

後継ぎのいい案山子のひとりごと
命のバトン握つて眠る新生児
継いでみて知る親の恩 汗 涙
後継ぎの居ない棚田に落ちる月
家業継ぐ覚悟を窯に試される
匠技継いで親父を喜ばす
継ぎ接ぎの穴あきズボン闊歩する
引き継いだ暖簾に風の櫓が飛ぶ
伝統を守る匠は手を抜かぬ
継ぎ接ぎの人生もまた一興だ
後継ぎが出来たと爺のはしゃぎよう
家業継ぐ甥の若さが頼もしい
千枚田の月が帰ってこいという
継ぐ人のない廃屋に枇杷まつ黄
鼻ピアス外して寺を継ぐという

弘前市	高瀬	霜石
大阪市	大川	桃花
八尾市	高杉	千歩
岡山市	工藤千代子	
西予市	黒田	茂代
奈良市	岩本	浩二
尼崎市	藤岡	りこ
富山市	有澤	嘉晃
高知市	小川	てるみ
和歌山市	武本	碧
西宮市	秋元	てる
三田市	石原	歳子
和歌山市	古久保	和子
寝屋川市	森	茜
岸和田市	宮野	みつ江

「継ぐ」森山盛桜選

継ぎ足してみたい命の浅はかき
乗り継ぎの出来ない愛を抱いている
語り継ぐ武勇伝にはこと欠かず
一年を絵手紙で継ぐ母元氣
乗り継いで青春切符お茶二つ
一家族一世代です千の風
譲り葉のように受け継ぐ母の味
父から子子から孫への河内弁
オタマジャクシと仲良くなつて農を継ぐ
後継ぎを思う淋しい頑固者
とりあえず継いで着替えた菜っ葉服
中継ぎがびりつとしない負けいくさ
語り継ぐことの多さよもう米芽
木洩れ日を浴びて輪廻を継ぐ若芽
背を見せてじわじわ父は継がせる気

紀の川市	北山	絹子
富田林市	山野	寿之
米子市	生田	寒之
富田林市	関	よしみ
加西市	金川	宣子
鳥取市	吉田	弘子
今治市	渡邊	伊津志
羽曳野市	吉村	久仁雄
松江市	松本	文子
阿波市	三浦	千津子
和泉市	横山	捷也
河内長野市	梶原	弘光
東京都	岸野	あやめ
弘前市	福士	慕情
大阪市	古今堂	蕉子

親の夢受け継ぐ孫の筆さばき
農業を継ぐ若者の輝く瞳

後継ぎヤーイ段段畑荒れてゆく

受け継いだ遺伝子しかと頑固者

次世代に継がせてならぬ病む地球

アリバイの無い闇の深さを継いでゆく

原発禍も語り継ぐべし八月忌

戦争の語り部なんだボケられぬ

語り継がなければならぬ大ツナミ

「原爆の子」尚反核を語り継ぐ

語り継ぐ戦平和の祈り込め

人として恥じない心継ぐ勇氣

人おもう心を持つて後を継ぐ

神さまから引き継ぎました我が子です

継ぎはぎの野良着は亡母の晴着です

ハーモニカ吹いて昭和の心継ぐ

継ぐはぎで生きた昭和が温かい

継ぐ妻の背な昔の母を見る

語り継ぐ歴史が抱いている正義

三代へ暖簾に染みる汗を継ぐ

名跡をすんなり継げる梨園の子

枚方市	二宮	山久
藤井寺市	鈴木いさお	
長岡京市	山田	葉子
鳥取市	倉益	一瑤
枚方市	伊達	郁夫
吹田市	太田	昭
堺市	柿花	和夫
豊中市	江見	見清
愛知県	早川	遡行
島根県	伊藤	寿美
大阪市	高杉	力
三田市	尾崎	一子
大和高田市	鍛原	千里
高槻市	島田千鶴子	
大阪市	平嶋美智子	
和歌山市	上田	紀子
相模原市	赤木	妙子
岩出市	村中	悦男
出雲市	竹治	かし
明石市	梶谷	和郎
堺市	奥	時雄
吹田市	須磨	活恵
枚方市	小林	わこ

継ぎ接ぎの理屈並べて自己弁護
隠しごと誰に継いだらいいのやら

縄梯子継いで天国なお遠し

男やめめ辛い遺伝子引き継いだ

母さんのいらちちよつぱり継いでいる

古希の坂ちゃんと息継ぎしてクリア

代代を絶やさぬように炭を継ぐ

名前だけ継いで亡父に追いつけず

顔が似て性格が似て頼りない

嫌いでも好きでもないが店を継ぐ

伝統を継いだ男のあばら骨

乗り継いだ夢特急はエンドレス

鈍行へさつと乗り継ぐ定年日

継ぐ技のノウハウは皆阿吽なり

跡継ぎを論す家訓の旧漢字

DNAだろ損する正義感

息継ぎがうまくできないうたえない

父の血を継いであなたは人の世話

後継者だけはこの目で確かめる

気が付けばサラリーマンを継いでいた

伝承の血脈という檻の中

堺市	村上	玄也
鳥取市	夏目	一粋
西宮市	亀岡	哲子
泉佐野市	稲葉	洋
西宮市	泉水	冴子
京都市	三宅	満子
米子市	政岡未延子	
松江市	三島	淞丘
篠山市	酒井	健二
堺市	大隅	克博
茨木市	島田	誠一
河内長野市	村上	直樹
堺市	内藤	憲彦
鳥取市	池澤	大鯨
大阪市	升成	好
箕面市	出口セツ子	
八尾市	村上ミツ子	
和歌山市	土屋起世子	
西宮市	片山	忠
大阪市	井丸	昌紀
唐津市	坂本	蜂朗
松江市	藤井	寿代
大阪市	伏見	雅明

乗り継いで優しい風に逢いに行く
 五大陸聖火を継いでいく平和
 受け継いだガンバリズムという絆
 母の味姉が継いでた茶わんむし
 悪習を臆面もなく継ぐ役所
 父子孫同じ校歌に育てられ
 古希の坂ちゃんと息継ぎしてクリア
 農を継ぐ覚悟で戻るブーメラ
 健康を明日へ継ぐは万歩計
 父を継ぐ名前一字と丸い鼻
 引き継ぎに部下の酒量も聞いて置く
 背を見せてじわじわ父は継がせる気
 継ぎはぎの人生幸せもあった
 祖父父と暖簾引継ぎ子から孫
 名跡を継いで器もでかくなり
 血統をいやでも継がされる名馬
 息子に家業継ぐ気にさせた丸い背
 縄文杉宇宙の恵みうけ継いで
 親子でも三つ指ついて芸の道

秀句

富田林市	山野	寿之	河内長野市	紀の川市	辻内	次根	大阪府	村上	直樹	堺市	木村	青生	三田市	村上	玄也	京都府	三宅	満子	和歌山市	福井	菜摘	寝屋川市	小谷	滋彦	豊中市	水野	黒兎	茨木市	藤井	正雄	大阪市	古今堂	蕉子	松江市	松本	文子	箕面市	寺井	柳童	羽曳野市	永田	章司	尼崎市	藤井	宏造	高槻市	片山かずお	西宮市	山本	義子	大阪市	柴本ばつは	弘前市	福士	慕情	鳥取市	池澤	大鯨	藤井寺市	高田美代子
------	----	----	-------	------	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	-----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	------	-------

君が代のリズム正しく継いでいく
 アリバイの無い闇の深さを継いでゆく
 袋綴じ程でもないな引継書
 後継ぎがないから派手になる余生
 DNA大器晩成型の筈
 語り継ぐ歴史が抱えている正義
 後継ぎのいない案山子のひとりごと
 息継ぎが下手で崩れて行く積木
 信頼の継ぎ目を揺らす嘘ひとつ
 ハーモニカ吹いて昭和の心継ぐ
 ぼろぼろのマニフェストだが継ぐつもり
 伸縮をレールの継ぎ目忘れない
 空蟬や脱ぎっぱなしで次に継ぐ
 受け継いだ気性が邪魔な青りんご
 人間はいとしきものよ継木する
 継ぎ目には母の指紋がついている
 乗り継ぎのたびに戸惑う曲り角
 仏壇の奥へ奥へと続く顔
 生き方も継いでしまったカタツムリ

秀句

青森県	松山	芳生	吹田市	太田	昭	香南市	桑名	孝雄	和歌山市	福本	英子	三田市	堀	正和	出雲市	竹治	かし	弘前市	高瀬	霜石	堺市	矢倉	五月	高槻市	佐甲	昭二	和歌山市	上田	紀子	交野市	森本	弘風	枚方市	寺川	弘一	高槻市	富田	美義	西予市	黒田	茂代	西宮市	牧洲	富喜子	藤井寺市	太田	扶美代	高槻市	島田	千鶴子	松江市	石橋	芳山	鳥取県	細田	裕花	和歌山市	喜田	准一	堺市	加島	由一	神戸市	山崎	武彦
-----	----	----	-----	----	---	-----	----	----	------	----	----	-----	---	----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	-----	------	----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	----	----	----	-----	----	----

民族の詩 (4)

—日本語の起源と川柳

三好 專平

日本語の起源は、曖昧模糊としている。加藤周一は「雑種文化」と言った。文法はモンゴル系、音韻はオーストロネシア系。日本語の底辺には、アイヌ民族の言葉がある。インドのタミール語の影響を説く学者、大野晋もいる。——というわけで、日本語は「多方言混交言語」と言った方がいいかもしれない。大阪の人が、沖縄や奄美また東北地方の言葉を聞いてもすぐに理解できないように、大阪の言葉もほかの地方人にはすぐ理解されないように思われる。「おおきに」「あはやん」「しんどい」「まいど」と枚挙にいとまがない。このように集落ごとにすこしずつちがって、大きく「日本語」がある。

時代を超えて共通の言葉もあるが「日」

「あたま」など——大和・奈良・京都・江戸と政治・文化の中心地が変わることに、日本語は変貌を遂げて来た。また、沖縄に鎌倉時代のことばが残るのは、柳田国男の「方言周圍論」の「古い言葉は、文化の中心から遠いところに残る」で説明がつく。

明治になって、日本語（標準語）は「東京方言にする」と決められたことから今の日本語が始まった。この決定は、徹底され、沖縄の人がその方言を使うことすら禁止された。朝鮮・台湾にも及んだ。

さて、そういう日本語に共通の特色はあるのだろうか。不思議なことにあるのである。さて、それらをアト・ランダムに観察してみることにする。

まず、語の頭に「ラ行音」が来ないという珍しい特徴がある。広辞苑には「和語」は一語もない。すべて外来語である。「ランプ」も「リング」も「ルンペン」もとは日本語ではない。日本語らしい「ルンペン」はドイツ語で「ボロ」の意味である。それに反して、語中の「ラ行音」はたくさんある。「あれ」「うれしい」と挙げればきりが無い。

次に、「連母音」を嫌う。ハワイ語ではそんなことはない。「オアフ島」は「OA」と連母音である。日本語だったら「O—」となるはずである。漢字はおおむね連母音からなるので、日本人はそれらをすべて「単母音（長音）」化した。王様（わうさま）は（おーさま）というふうには。詩歌をつくる時も、この原則は確実に守られてきた。次に、「P」音。いわゆる「半濁音」が平安時代の日本語にはない。「それ以前にはアイヌ語の影響で存在したらしい。（別府など）」

次に「は行」音。「はひふへほ」は平安時代までは「FA・FI・FU・FE・FO」と発音されていた。「母」が「はわ」と読まれていたという謎が残る。語の中にくる「は行音」は、すべて「わ行音」に読まれていた。「H」も共存していたらしいが、文字として残っていない。

短歌も俳句も川柳も、もちろん詩も、「心の音楽」という側面を持つので、音に敏感でありたいと思っている。

特に川柳は、庶民の詩で、その生をいかに充実させて生きてゆくかを、ゆたかに歌い、「人間陶冶」の詩に昇化されてゆく。

「曲線」

亀岡 哲子選



ひらがなでまあるく暮らす生き上手
 従順な妻もときには変化球
 曲線は馬の背とくとき大砂丘
 人が好き曲線を行く路線バス
 大物の手応え竿が弧を画く
 曲線も色合いも好き虹が好き
 逆らわず委ねて走る急カーブ
 ミサイルが曲線描いて飛んでくる
 少女から大人眩しい曲線美
 曲線美析るかたちのヨガポーズ
 曲線を辿って着いた広い海
 信じれば弥陀の曲線までも慈悲
 曲線に沿って気楽に生きている
 夜間飛行海岸線をたしかめる
 さよならの向こうは愛のいろは坂
 百年を見越して直す屋根のソリ
 曲線の計画 折れ線の現実
 休みなくミラー見つめる魔のカーブ
 曲線のその先見えぬ面白さ
 あの世まで放物線のどのあたり
 婉曲にN Oと言われたプロポーズ
 優しさが滲む仏の肩の線

曲水の庭にもあった曲り角
 前置きに少し曲線入れ過ぎる
 ポツクリ死期待出来そな心電図
 来し方の紆余曲折があつて今
 まつすぐに筋を通すと臍曲り
 コーナーが勝負と決めた競走馬
 稜線のうねりが光り出す夜明け
 曲線を描いて落ち着く妥協案
 ゆるやかな曲線でよい老いの坂
 稜線に母の寝姿重ね見る
 曲がらねば現しこの世は渡られぬ
 氣はしゃんとしてても曲がる影法師
 和解して丸みを帯びてきた話
 曲線の角度で揉めるJ R
 パイオリズム今日の私は上機嫌

水平線船はゆくり消えてゆく
 曲線がいのち写楽の目も口も
 魔のカーブいつも列車は走ってる
 感情線素直なカーブきつている
 いいカーブですなあなたの骨密度

ブーメラン己が描いた弧を知らず
 身籠ったとても豊かな曲線美
 妻の背の丸さに気つくフルムーン
 風まかせゆるり天指す豆の蔓

「弱点」

石橋 芳山選



アナログの意味わからないアナログ派
 体育がなけりや学校バラダイス
 唯一の弱点顔のまん中に
 ジェラシーが君のアキレス腱だとは
 弱点はごつそり提げて墓場まで
 短足に似合うズボンが店にない
 惚れっぽい性が強くて淋しがり
 スキャンダル集めて売れる週刊誌
 弱点が財布の中で耐えている
 飴ひとつ貰うと直ぐに振る尻尾
 笑い下手なのは弱点かも知れぬ
 弱点を労い合っている酒場
 もう一人の僕に弱点握られる
 食べる喋るどうにも動き過ぎる口
 弱点を隠したいからサンングラス
 どの神も弱点あつてよく揉める
 弱点を晒して親父ギャグにする
 今ここで弱点見せれば消されそう
 弱点を少し庇った八字ヒゲ
 弱点に秘密兵器を隠してる
 原発が狂えば制御できません
 弱点に極秘の付箋つけておく

わたくしの弱点知っているポトル

弱点をそつと隠してワンピース

弱点は最後のさいごまで見せぬ

弱点とさあ真夜中のカーニバル

弱点もひっくりくるめての私です

ほろ酔いの父が一番攻めやすい

どうしても終着駅が見たいボク

弱点を見せない太鼓強打する

ニッポンの弱点電気足りません

ライバルのアキレス腱へ絞る男

男には真似のできない鼻濁音

弱点を知られてダンゴ虫になる

弱点の一つでジャンケンが苦手

弱点と知らずつづいていたらしい

居酒屋で軽い約束する小指

指先が桃の弱点についている

あげ底のバストは内緒内緒です

バラにさえ弱点という色がある

弱点のように黒子がついている

添え物のパセリの押しが弱すぎる

人

弱点を午後の紅茶に溶かしこむ

地

弱点の補強とタマゴ飲んでる

天

弁慶にだつてあるのよ泣きなされ

軸

へつ込みに溜まる弱点とか涙

瀬子 純子 山節子

公明 孝一 高子

奮水 茶子 蜂朗

愁女 婦美子 扶美代

千代 ますみ

陽子 五月 典子

文子 千代子

敏治

公誠

稲葉 洋

もやもや

今 愁女選



しじみ舟もやもや霧に權の音

もやもやが今年も続くタイガース

もやもやのものはユーロの吹かす風

爆発のうわさもやもや富士の山

もやもやを飛ばしてくる孫メー

もやもやのうちに上げちゃう消費税

ひと言にもやもや残す嫁姑

吐き出せぬ思い胸底に溜まる

もやもやを宥める様に月下美人

もやもやの薬はやはり酒だろう

一合の酒がもやもや忘れさせ

言い負けてもやもや晴れぬ胸の中

山頂のもやもや引き返す勇氣

原発をもやもやにする政治家

もやもやのうちに原発再稼働

もやもやの漢字の味方電子辞書

もやもやが胸につかえる消費税

大喧嘩切つてもやもや吹き飛ばす

もやもやの気分晴らしに行くゴルフ

もやもやを打ち消す愛のプロポーズ

東電の釈明もやもや気に障る

もやもやには体うごかす方がよい

(高)(江)

道子

賢子

萌子

千歩

伊津志

義雄

注湖

柳弘

好文

哲男

くに

強一

唯教

真実を明かしもやもや吹き飛ばす

もやもやの心を晴らすバスポート

休肝日父はもやもや浮かぬ顔

もやもやを医者の笑顔が消してくれ

もやもやをすつきりさせたMRI

OKと医者が言うたら消えた霧

お互いのもやもや消える大ジョッキ

貸し借りがなくてもやもやしない仲

もやもやを岩盤浴で絞り出す

もやもやが赤児の笑みに溶けてゆく

もやもやが解けたら古希になつていた

真相は神のみぞ知る藪の中

もやもやを流す屋台のコップ酒

もやもやを抱えたままで割れた党

師の一言頭の霧を引き剥がす

佳

朝霧を吹いて元気な万歩計

口笛を吹いてもやもやから抜ける

政界のもやもやを衝く記者のペン

もやもやの風評蹴つて稲育て

もやもやを見せない父の背に学ぶ

人

もやもやを晴らす母への長電話

地

見て聞いて触れてようやく晴れる霧

天

もやもやがすかーつと晴れたホームラン

軸

根回しが煙を立てず会議済み

准一

保子

(奥)五月

菜摘

(山)節子

篤

満子

圭一郎

克三

一子

芳生

雅明

敏子

(鈴)いさお

慕情

花匠

碧

四郎

あずま

嘉見

富子

(滋)

霜石

中居善信

石

中居善信

石

中居善信

石

中居善信

石

初歩教室

題一雑誌

鈴木公弘

ご質問および作品についての説明がありましたので、先に回答いたします。

①原句「シェーカー」を添削句「シェイカー」とした点についてですが、外国語の母音を日本語表記する場合二通りあるということを知っていただくため、あえて添削句のようになしました。「造る」を転記間違っていたのでしょうか。添削句で「作る」としたのはシェーカーをどうとられるかに関係します。つまり、それは一般的には酒造場所ではなく、酒とジュースなどを混合させる道具ですので、AとBを合作する、すなわち「作る」のほうがいいように思いました。

②ご自分の愛読誌がCなので、この雑誌名を用いて作句した、という説明書きが添付されていました。結論だけ申しますと、そのCという雑誌は商品でなければ創作上をなさない場合には特定の雑誌は商品名を小道具としてお使いになられても構いません。しかし、

大半のケースはその雑誌である必要はないと思います。したがって雑誌一般を対象としても通じる句に仕立ててほしいと考えます。

次に「雑誌」を「雑誌」と誤読された方がおられました。雑誌ならばとてもいい句でしたので、無記名にして掲載します。

風船がしほんで元の色になる

悔しいな豪雨が破る亡母の夢

なお亡母はふつう「ほうぼ」と読みますが、この句は当然「はは」と読ませようとしておられます。その場合には「ほうぼ」と読ませないよう、ルビを振ってください。

【中8その他の問題点が認められた句】

順不同であることをお断りしておきます。

原週刊誌ゴシップ並べて競い合う 青生

原週刊誌ゴシップ並べて競い合う 晴雄

原週刊誌読むより先にバズル解く 徳正子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

原週刊誌何冊も読む美容院 道子

と思いますが、句の内容からみて不注意による書き間違いと考えて添削しました。

原三百円出して世俗を手に入れる 心咲

添三百円出して雑誌の世相買う 心咲

原永田まち雑誌のネタまで撒き散らし 勝治

添永田町雑誌のネタを撒き散らし 勝治

提出3句とも中8になっています。癖になりますので、575の音字リズムを早く脳裏に教え込んでください。

原雑誌から時代のずれをお教えられ(山)弘子

添雑誌から時代のずれを教えられ(山)弘子

この指摘、たぶん驚かれたと思います。

提出前に見直しをお願いします。

原あの続き一ヶ月待つがまんの日 真砂子

添続編へ雑誌ひと月待っている 真砂子

原せがまれて読手となりし童話かな 俊子

添せがまれて読手となった童話です 俊子

原お金貯める雑誌効なく無駄足だ ミヨノ

添錬金の雑誌効なく無駄使い ミヨノ

原たち読みで政界ドラマとはして まさる

添立ち読みへ政界ドラマだけ飛ばす まさる

原まず雑誌されど雑誌と拾い読み 開子

添たか雑誌されど雑誌と拾い読み 開子

原放浪記読んだわれ又放浪なり (山)久子

添放浪記読んだわれもふらふらと (山)久子

原メモ書きを集めてまとめ本にする 記久乃

添メモ書きを集めてまとめ本にする 記久乃

添削するのが申し訳ないような原句ですが、心を鬼にして、一般的な送り仮名である「メモ書き」に直しました。

原雑誌手にホーム目じるし初デート 美紗子
添雑誌手にホームで待った初デート
原月刊誌はたまには買うが積ん読だ 秋 星
添月刊誌たまには買うが積んでる
確かに積読という言い方をします。しかし、語呂合わせのようにも読めますので手を加えました。

原主婦の友山程溜り捨てがたい 紀美恵
添主婦の友山ほど溜めて捨てがたい
雑誌という題がなければ「主婦の友」が何であるか分からない句になっています。
特定の商品名を用いた川柳は誤解を招くことがありますので、避けたほうがいいですね。

原浮きこころ川柳雑誌届く音 律子
添郵便受けに待った雑誌の届く音
原待ちばうけ雑誌で時間早送り 秀子
添待ちばうけ雑誌で時間早送り
原待ち時間雑誌めくって知識増え 孝明
添待ち時間雑誌めくって知識つけ
原点滴の様なクイズの雑誌買う 美知江
添点滴の様なクイズの雑誌買う
原グルメ誌を読む目的で菌医者行く 雅信
添グルメ誌を読む目的の菌科へ行く

「入選句」

売れ筋は見出しで決まる週刊誌

(渡) 修

雑誌記事薬も毒も盛っている

正二

真実も嘘も盛られてる雑誌

義雄

道間われ雑誌丸めて指し示す

孔一

立ち読みの雑誌に学ぶ認知症

一 泉

夕食のメニューは雑誌見て決める

裕 美

頑張っ若いふりして読む雑誌

(高) 弥 生

雑誌読む降りる積りの駅が過ぎ

洋 一

「雑誌読み降りるつもり駅は過ぎ」

紀 雄

晩学の道は雑誌を礎に

(燭) 節 子

雑誌読む老いの孤独を追い払う

定 廣

「雑誌読む老いの孤独を払うため」

憲 太

網棚へ捨てられ雑誌又読まれ

志 郎

憧れの文化届けた少年誌

克 三

断捨離に狙われている古雑誌

英 男

古紙回収読みた雑誌出してる

英 男

雑誌読み雑多な知識詰めている

英 男

「雑誌」「雑多」は語呂合わせのように感じられます。

発売日買わんと損と雑誌読む

こずえ

雑誌読むまづは眼鏡を拭いてから

エミ

雑誌買い世間の風を読んてます

(石) 久 子

週刊誌見出しに惹かれ即座買い

利 夫

中吊りで充分わかる雑誌記事

(株) 玲 子

雑誌からキラリ雑字拾い出す

登美子

ロール紙へ生まれかわった古雑誌

登美子

カストリの語句に微妙な子であった 寒之

「佳句」

宏 造

すぐ捨てられる運命にある雑誌

ひろ子

雑誌から性教育を受けてます

元 三

粗探し厭読まないスクープ誌

(博) 富 子

人の弱みあばいて売れる週刊誌

(博) 富 子

新聞雑誌もう紙使わない未来

のり子

その脚と相談しなとファッショ誌

(前) 洋 子

ダイエツト雑誌とおりにならなんだ

温 子

世の中の一人にさせる雑誌買う

安 子

雑誌だとあなごな知恵袋

滋 彦

詳細は雑誌見てねと新聞紙

雄 太

「今月の推薦句」

雄 太

愛読者引き付けている袋とし

神野きつこ

開くまでドキドキした経験があります

開くまでドキドキした経験があります

そこが商売上手というところでしょうか

そこが商売上手というところでしょうか

よく当たる占いが載る雑誌買う

大島 友子

真実っぽくて笑えます。幸運を呼ぶ占い

真実っぽくて笑えます。幸運を呼ぶ占い

ばかりではありませんからご注意を。

ばかりではありませんからご注意を。

秋服の季刊誌が来る梅雨半ば

山根 妙子

他社より早く儲け口を確保しようという

他社より早く儲け口を確保しようという

算段でしょうね。

算段でしょうね。

「私の句」

暇つぶすには丁度よい雑誌あり

病院にどんな雑誌を並べるか

病院にどんな雑誌を並べるか

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 吉岡 修

— 8月号から

名句一六七八句、じっくり読ませていた

だき久しぶりの大仕事でした。最近朝日新聞の朝日歌壇に期待の星が登場し注目を浴びています。中学二年生と小学五年生の姉妹です。

毎回二千五百首を越える応募から四〇首選ばれる激戦の中で、すでに二人とも五〇回を越える入選をし、毎回の様に姉妹揃って登場しています。

我が一六七八句には老練の味わいが漂っていますがここへ、中学生や小学生が登場する日はいつだろうかと、楽しみにしています。

ばやくこと無い世の中もつまらない

坂 裕之

こういう心配は当たらないだろう。圧倒的大差で政権を得た民主党内閣も三代目。内閣支持率も政党支持率も下がる一方らしい。国民がばやくたくなるが増えているが、証し。結構かりかりしてばやいているが、元氣のもとかも知れぬと、わかつている様子。

これからもほどよくばやき続けてほしい。

人生の重さが少し足に來た

藤本 直

有名な徳川家康のことを思い出す。「人の一生は重き荷を負うて遠き道をゆくがごとし、いそぐべからず、不自由を常とおもえば不足なし」そのつもりでおりますが、少し足に來たと一休みしている爽やかなひと時の絵だと読めて快よい句だ。

コビーしたような美人が多くなり

萩野 像山

アイドル・タレントの名前がわからなくなつて来る。さっぱり区別がつかぬ。AKB 48 NMB 48とか、アイグループになるとちんぷんかんぷん。ところが若い人にはちゃんとわかつているようで驚いてしまう。老人わかるように近づいてゆくしかない。

あの世から電話がかつたことがない

浅野 房子

あの世には、この世へ電話したい人（？）がうんと待っているに違いない。その実現

もそう遠くないかも知れぬ。五月から東京スカイツリーが開業して六百三十四m最高の位置から電波を送る。受信するのも高いだけに遠くの電波をキャッチするだろう。あの世からの電波も多分探し当てる。そんな夢が広がるタワーだ。楽しみにしたい。

アンケート千人ほどで何わかる

高浜 勇

無差別に選んで電話調査しましたとのこと。我が家に電話あつたことは無い。一度かけて貰いたいものだがしかし、その場になつて本音が即答出来るものか自信はない。

ご祝儀の談合もする電話口

堀 正和

あるある。家でもよく耳にする。妻が長女なので何かあると仕切り役になるらしい。うまく機能しているようだ。いい雰囲気の出ている句だ。

変わり身の早さでこの世生き延びる

安達 忠央

これはもう立派な生き様だろう。こうありたいけれど出来そうにないことだ。今回の民主党の離党騒ぎでは果して、出た人がこうだったのか残った人がこうだったのか、行く末興味しんしんである。

ボンヤリしていると肩を叩かれる

夏目 一粹

優しい人だったらいい、恐い世の中だ、い
つなときりストラの風が吹くかも知れぬ。
突然呼出しを食って宣告があるかも。職
場に無くてはならぬ存在。立場を築いてお
くようにしたいのだが……。

定年後いまだ大器の芽が出ない

坂 本 峰 朗

定年後何年ぐらいいか自分にもそんなこと
があった。いま二十数年経って「大器」の
期待も自負も失せていやせぬか、そんな自
問を久し振りにさせていただきました。

雨より赤い長ぐつ見せに来る

木 村 貴代子

雨が上ってまだ水たまりのある仲を、わ
ざわざやってくる孫。長ぐつを買って貰っ
たんだ。今日を待っていたんだらう。ちやぶ
ちやぶ歩くのも楽しそうな情景。かわいい。

もう欲はないと財布に宝くじ

加 島 由 一

一応は枯れたようなこと言ってるが、こ
れでこそ人間、ようわかる。そして長生き
の為にも、こっそり宝くじも買い続けてい
る。句会にも挑戦、恋もよし酒もよしでげ
んきでしたかに生きていきたいものです。

酒蔵と思ひ婿殿達が来る

江 見 見 清

留守だろうとかまわず来る。勝手に冷蔵

庫からビールを出して飲む。こんなことも
遠慮のない婿どのなればこそ。こちらも嬉
しい。

いい婿どのに喜んでいろいろいい家族の風景
が浮かぶ。

ホームランくちやくちやガムを噛みながら

中 宇 地 秀 四

特に外人選手に見られる。その唾をとこ
ろかまわず吐いたりする。日本人には我慢
ならぬ行為で腹立たしい。まして神聖なグ
ランドではないか。誠心誠意戦ってこそプ
ロやないか……。

人恋しひよいとのれんをくぐらせる

杉 本 義 昭

勝ち組の姿は見えない縄のれん

片 山 か ず お

ひよいと入れる男のオアシスには、いろ
いる同じように今日負った傷を抱えた顔顔、
ここはくつろげます、男の癒しどころです。
そのうち知らぬ人とも声かけ合って、じつ
くり腰据えて飲む。周囲にはあまりきざな
勝ち組はいない好きな場面です。

冷房は要らぬ緑の風と寝る

内 藤 憲 彦

節電担当大臣が聞けば感激しそうな句。
これだから日本人はえらい。お上や電力か
ら言われなくても国民がすすんで出来るこ

との節電目標はクリアしていくだろう。そ
れにしてもまだ赤々と点灯しているガソリ
ンスタンドや一部コンビニなどにはあきれ
る。その辺への警告にしたい一句。

仕残したことで来いと閻魔さま

岩 本 美智子

閻魔さんがこんな甘いご沙汰をされると
はどうしたことだろう。もつとも地藏菩薩
の化身とも言われるゆえんか。作者が生き
仏のような人だからか。私ならとてもこ
うはゆくまい。いかにして閻魔さんを誑かす
かと策を練っている様ではむりもないが、
せめて今からでも大いに反省して、閻魔さ
んのこの様な一面を当てにしてみたい。

天体ショーこそつて仰ぎ見る平和

木 見 谷 孝 代

五月二十一日は全国で太陽を仰ぎ見た。
あの黒メガネの先にはオスブレレイも核の影
も写らず、ありがたない平和のおかげと、作
者のお気持ちに共鳴する。ところでこの天
体ショーの舞台、宇宙には宇宙ゴミが大量
に漂っているそう。これらを回収する掃
除ロボットを開発する取り組みが、進んで
いるらしい。

ロマンチックなお月様と、自然を仰ぎ見
ながら川柳に没頭したいものである。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

峯村 勲 弘

戴いた笑顔を次の人にあげ

渡邊伊津志

笑顔には、不思議な力が隠されている。

ストレスを軽減、人間関係の潤滑油にもなる。自然災害や政治混乱など不安に満ちた今の世の中、バトンの代わりに「笑顔」を次々と渡し「絆」を広げて行つて欲しい。

失敗のない人生の味気なさ

柴本ばつは

人生に失敗は付き物、しかし失敗から学ぶことは実に多い。壁にぶち当たったら「しめた」と思い、チャレンジ精神を発揮して壁を乗り越えた時の喜びは何物にも代え難い。

失敗を知っているから温かい

楠原 富子

失敗や挫折した時のショックは大きい。それを知っているだけに、他の人の失敗には思いやりの心が湧き、真の友情も育つ。

想像は無限の世界落語聴く

丸山 孔一

落語で笑えば、ストレス解消、呼吸作用増進、何とガン細胞も退治出来るとか。扇子と手拭だけで全てを表現、想像を逞しくすると無限の世界へ誘ってくれる。古典では貧乏長屋の連中が繰り広げる話は何とも面白いし、また創作落語も楽しい。私も大好きな落語から健康とポジティブな姿勢を頂いている。

勇氣ある決断免許証返す

磯部 義雄

高齢者の運転事故はアクセルとブレーキの踏み間違ひなど何とも悲惨。乗り慣れた車との決別には勇氣も要るが、安全を優先し、免許証を返す決断には拍手を送りたい。

壁の中藍すくすくと育つて

古田 千華

夏祭りには藍染の浴衣姿がよく映える。染料の藍は甕の中で発酵させるが、育てるのが難しく、長い経験と真摯な自然との対峙の時間が必要。子育ての気持ちで立派な藍を作り上げ、藍染め衣を広めて欲しいですね。

いさぎよく捨ててすっきり衣替え

見山 温子

今や箆筒の中は衣類でいっぱい。衣替えのシーズンが来ても、思い出の多い衣服はな

なか捨て難い。今年こそはと意を決して、その多くを捨てた。箆筒も心もすっきり、流行のクールビズを求めて街へ出掛けましょう。
地球上心一つに出来ぬ欲

大前 安子

銀河系には約二千億個の恒星があるが生物の存在は未確認。美しいこの地球に奇跡的に生れたことに感謝し、心一つに仲よく生きて行きたいが、私利私欲が目くらみ争いが絶えない今の世の中は、何とも情けない。

老いてなお若さを保つ好奇心

岸本 清

加齢と共に好奇心は衰え、慣れきった生活に安住し勝ち。身体活動で筋肉を新たにし、精神的活動で脳を活性化させ、若さを保つために、いつまでも好奇心は持ち続けたい。

叶わない夢でもいつも追っている

小栢 千恵

こだわりを捨てて明日へのパンを焼く

玄番美恵子

明日の夢しっかり詰めた枕抱く

田邊 浩三

まっぴい明日の風に吹かれよう

菅田かつ子

川柳で錆びないように脳みがく

山根 弘子

一周忌の

酒井一壺さんを偲ぶ

山本希久子

酒井一壺さんと初めて知り合ったのは大阪毎日新聞の川柳教室でのこと、私より少し遅れて入門された二十数年ほど前のことです。

既に七十六歳、第二の職も終え、先祖の土地を耕しておられた一壺さんは晩学の志に燃え、とても若々しく熱心で「創めるに遅すぎることはない」という範を示しておられたように思います。

あまり身辺のことは話されませんでした。が、永年教職にあり、小学校の校長を務められたということです。とても真面目、実直で誠実という印象を受けましたが、気さくで親しみやすいお人柄で教員在職中はさぞ生徒や父兄に信望厚かったであろうと思っています。

平成七年に川柳塔同人となられ、昨年九月九十八歳で亡くなるまで作句を続けられ

れ、投句を欠かすことなく生涯現役を貫かれました。

御家族だけの葬儀が営まれ、私共は後に知るところとなり、遅まきながら、一周忌に当たる九月号にて遺句集を掲載させていただきました。朝日なわ柳壇入選句集『百句』という冊子の中から選ばせていただきました。

二次会は上司が部下に管理され

正直な答ばかりで出世せず

二度の職肩書逆に役立たず

約束をたくさん聞いた木のペンチ

ふらふらと後ついてくるイエスマン

終点が見えているのにまだ迷い

仏さま拝む心に辿りつき

剣が峰急ぎに勇気が湧いてくる

今の世に怒る力も出てこない

子育ても同じですよと鉢の花

幸せが続くと上の空になる

他人事と思っていたがもう傘寿

本人の顔に似合わぬペンネーム

深呼吸身体の中へ風いれる

ジンスクスへ逆に闘志が湧いてくる

嫁が来てうちの茶の間に灯がともる

うれしいと心も空もよく光る

全力をつくし私の春を待つ

まだ望みあるので手相見てもらう

立場上私は貝になっている

蹟いた石から拾う処世術

追う方が楽だといつも負け惜しみ

毎日をラストと思い生きている

夏祭りおとこの裸よく光る

部屋中へ春風入れて好きな曲

恨まれているのか運が皆逃げる

もう一人の自分探しへ写経する

来賓の横で欠伸が止まらない

泥水が澄むまでじっと待つゆとり

暗闇へ湯水の如く消える税

打ち返す言葉が出ないもどかしさ

同じこと相手によって腹が立ち

魂が抜けたか僕の影がない

流されて私も川も蛇行する

身のほどを忘れてならぬブレゼント

競り勝った椅子で孤独を噛みしめる

凝り性で自分の城を抜け出せぬ

仕事より遊んだ後がくたびれる

本職を疑うような芸達者

ごみ拾う駅長さんに言葉かけ

ネクタイが鎖に見えて朝の駅

哲学の道を歩いてプロポーズ

『椿抄』

八木 千代著

栞原 道夫

あざみエージェント百句シリーズ第五回

として八木千代句集『椿抄』（6月30日発行・発行者 富士朝世・発行所 あざみエージェント・装幀 ひやまちさと・四六変型判・68ページ・一〇五〇円）が刊行された。これは、平成11年3月20日発行の川柳句集『椿守』（葉文館出版・四六判・162ページ・二三八一円＋税）所収342句から92句選句し、新たに次の8句を加えたものである。

とりあえず門のかたちに石二つ
第一ヴァイオリン弾く てっぺんの柿
ひとつ

山を見て秋の呼吸にもどるなり
もしかしてさつき拾ったのは未来
見送っていただけるなら萩の道
いつの世も月から降ってくることは
これからの坂の視界も愉しみな

ありのまま流れる とてもいいきもち

『椿守』はⅠ～Ⅳの四章構成であったが、『椿抄』はⅠ～Ⅴの五章（各章20句。ただし、Ⅳ章は19句、Ⅴ章は21句）構成になっている。興味深いのは、『椿守』から選び出した句を順に並べるのではなくて、全く新しく構成しているところである。『椿抄』Ⅰ章の冒頭10句を見てみよう。

潮騒を連れてこの世の月が出る Ⅱ 46
沙羅双樹わが結界にひそとあり Ⅱ 83
とりあえず門のかたちに石ふたつ Ⅰ 19
木の机 鳥の匂いがしてならぬ Ⅰ 46
今はたましいの時間で月の下 Ⅰ 26
書きすぎぬように大事なひとに書く Ⅱ 80
鐘鳴らすいつも一つの願いごと Ⅱ 66
夜明けまで山の向こうに行ってくる Ⅱ 80

花びらの重み一枚ずつ違う

ままことは終わって破る紙の皿 Ⅱ 80
句の下のローマ数字は『椿守』の章、算用数字は『椿抄』の収録ページを示す。冒頭の10句を見ただけでも、『椿守』のⅠⅡ章の句を再構成していることがわかる。三

句目の（とりあえず門のかたちに石二つ）は『椿守』未収録の句だが、『椿抄』のⅠ章に収録されているのである。『椿抄』に新たに加えられた他の句がそれぞれⅠ～Ⅴのどの章のどこに収録されているかは、読者の楽しみのために、ここでは明らかにしないでこよう。

八木千代作品で、筆者がすぐ思い浮かべるのが次の句。

桃の木の向うのひと世ふた世かな

橘高薫風は『椿守』の序で、「（前略）この世は夢まぼろしの世界だ。桃の花と可憐な蕾の平和な桃源郷は、現世の苦を濾過したひと世ふた世であろう」と書いている。

『椿抄』未収録の句だが、（桃の咲く丘は線路のずっと向こう）から、八木千代にとって「桃の咲く丘」はすぐには手の届かないところにあることがわかる。とすれば、「桃の木の向うのひと世ふた世」は、「桃の咲く丘」のさらに先にあるあこがれの世界であるとと言えるだろう。そう言えば、以前に作者から「桃の木が一番好きだ」とお聞きしたことがある。

大きな桃が横を流れてくれている

そのような桃の木の実である「大きな桃」がゆつたりと「横を流れてくれている」のは、至福の時間であるに違いない。

八木千代作品のキーワードは「向こう」という語だと、筆者は考えている。

夜明けまで山の向こうに行つてくる

「向こう」は、「こちら」の反対。日常に對する非日常の世界。日常と非日常の世界を自由に往き來し、魂を遊ばせるのが八木千代作品の特質だと思ふのだ。

新しい潮が玄関から入る

日常から非日常の世界への転換があざやかな句。「玄関」の内側（家の中）は日常の世界。そこに「新しい潮」がやすやすと当然のように入つてきて、安定した日常を一瞬にしてくつがえすのである。

天の川よりゆらゆらともどるなり

これは逆に、非日常から日常の世界へ戻る句。牽牛と織女が出逢うという「天の川」で遊んだ魂が、その酩酊から醒めやらぬように「ゆらゆら」と戻るのである。

そして、八木千代の化身と言えるのが「椿守」である。

椿守 死なぬかぎりには椿守

句集「椿守」の題となった句。「死なぬかぎり」は、椿守として生をまっとうしようという気概の表れた句。

有縁の真ん中に椿が咲いてくれる

境界のところでどこに椿の木

「有縁」とは、仏・菩薩などに会い、教えを聞くその機縁のあること。転じて、地縁・血縁などゆかりのあることをいう（『日本国語大辞典』）。この句の場合、仏教語としての「有縁」だけではなく、「地縁・血縁」ともとつてよいと思う。「有縁の真ん中」に咲く椿の木は、「こちら」と「向こう」の「境界のところどころ」に植わっている。そうして、「椿守」自身はどこに住んでいるのかという点、

現実に橋のたもとの一軒屋

この「一軒屋」が「椿守」の住まいではないかと想像するのである。橋とは、此岸（この世）と彼岸（あの世）の境界にある。その橋のたもとに住んでいる「椿守」だからこそ、「こちら」と「向こう」を自由に往き來するの当然ではないか、と思うのである。

八木千代作品に月の句が多いのも、夜こそが「こちら」と「向こう」を往き來するのにふさわしい時間であるからだろう。太陽を詠んだ句は、「椿抄」はもちろん、「椿守」にもまったくないのである。

潮騒を連れてこの世の月が出る

今はたましいの時間で月の下

われは雁 月の真上を渡るなり

わたくしの枕に三日月の匂い

いつの世も月から降つてくることは地球の胎動の音のような潮騒を連れてこの世の月が出る。月から降つてくることはを全身に浴びながら、魂が遊ぶ時間である。そのような時間だからこそ、雁となつて月の真上を渡るのも、枕に三日月の匂いがあるのも（現実）なのである。

『椿抄』の「あとがき」によると、集句、

選句、構成などの一切を発行者の富上朝世氏が半年くらの膨大な時間を傾けてなつた、ということである。富上氏の選句眼の確かさにより、八木千代作品のエッセンスが凝縮された百句集となった。『椿守』が入手不能となった現在、川柳界にとっても貴重な仕事だと言えるだろう。



忘れないくふう

どのような組織であっても、支障なく運営して行くためには、それぞれの担当者が責任を持って仕事を進めなければなりません。川柳塔社の例で言えば、その担当部門は「総務部」「企画事業部」「編集部」「句会部」「同人誌友部」「渉外部」「会計部」「発送部」「事務部」と九つあります。

当然のことながら、各部門それぞれ異なる苦勞があり、担当の皆さん日夜奮闘されていますが、今回は事務部と編集部のご苦勞について少し書いてみます。

事務部と編集部も連日多忙を極めています。その中の悩みの種は、締切が済んでから到着する作品です。ご承知のように、川柳塔社への応募作品はすべて毎月十五日が締切になっています。これは消印有効ではなく十五日必着です。

私が担当させていただいている「愛染帖」も、十五日までに届いた応募原稿を十六日にまとめて事務部が発送、十七日に私のところに届きます。そして、到着した作品はすぐに選考にかかります。この流れは、他の「川柳塔」「水煙抄」「檸檬抄」「二路集」「初歩教室」など等、すべて同じです。

本誌がきつちり月末に届けられる（これは発送部の仕事）のも、この「十五日締切」を、皆さんが守ってくださいというおかげであるの言うまでもありません。

締切当日に届かない理由にはいろいろあるでしょうが、その一つに「うっかり忘れていた」ということがあります。これは私も何度か経験があり、あわてて速達で投函したことも

あります。歳を重ねてきますとあちこちの機能が衰えるのは仕方がありません。創造力や洞察力は努力次第で維持できるかもしれませんが、記憶力だけは確実に弱くなってきます。

記憶力忘却力にすぐ負ける

岩崎公誠

忘れ薬飲んでるようにすぐ忘れ

七反田順子

二日前忘れ遠い日鮮やかに

松尾美智代

ど忘れの加速そろそろ危ないな

大内朝子

などなど、皆さんも物忘れについては困っておられるようですが、衰えた機能は何等かの方法でカバーしなければなりません。買物するときにメモを持って行くのと同じように、締切日をカレンダーに書いたたり、机の前に貼り付けるのも一つの手段です。それでも忘れることがあった苦い経験から、私が考えたのは次のようなものです。

・ 応募する予定のものは、あらかじめ封筒に応募先の住所・結社名を書いて、下のほうに締切日も記入しておく。

・ 右の封筒に切手を貼って、菓子箱で作った「未決箱」に締切が迫っているものを上に入れて入れる。

この方法を取ってから「あつ、しまった！」が確実に減っています。これの長所は、返事を書かなければならない手紙や、礼状を出さなければならぬ句集なども入れられることです。そして上から順番に片づけられるのですから、あれやこれやに追いまくられているという焦燥感から解放されます。もちろん、これ以外にもいろいろあるでしょう。トイレのドアに封筒を貼り着けて毎朝眺めるのも有効かもしれません。ともあれ、ご自分に合った方法を考えて、少なくとも「十五日必着」だけは忘れないようにしたいものです。



色黒のおもむき津軽の石瀬亭

奇数月の連載になります。

キーホルダーの巻 ⑪

7月1日、鶴田遠野隊長の下「川柳塔みちのく25周年記念大会」に、わざわざ弘前くんだりまで足をお運び下された24の方々に、まずはお礼を申し上げる。

大会前日の夜は、津軽弁混じりのシャンソンを楽しんで貰い、大会当日の懇親会後の二次会は、本格津軽三味線を堪能して貰った。これは、遠野さんと義兄弟の盃を交わしている福士慕情さんの差配。男の友情は、かくも美しい。話は飛ぶ。僕の経営するちっぽけな会社は、6月末が決算。大会当日には、赤字ではない見通しがたっていたので、「遠野さん。夜逃げし大阪へ行つて、助けてとか言わないから」「楓葉さん。お金貸してって言わないから」「朱夏さん。同人費踏み倒さないから大丈夫」なんてことを言つて、諸先輩を安心させたのでした。

8年くらい前のこと。勤めて10年ほどの社員が、突然辞めたいと言つてきた。去る者は追わず主義の僕だが、集中力はイマイチでも氣立てのいい若者なので、話をじっくり聞いた。仕事に不満はないが、転身したいという。そういうことなら、氣持ちよく送り出すしかなかった。それから約1年後、彼は自殺した。

「おたくを辞めてからは、どこへ勤めても長続きしなかった」とつぶやいた僕と同一年くらいのご両親の言葉に、引き止めなかったことを後悔した。

彼は、鍵がいつばいのキーホルダーを、いつもこれみよがしにベルトにぶら下げていたのを、ふと思ひ出した。「バカヤロー。あんなに沢山あつた鍵の束の中に、ひとつくらいお前の未来の扉を開ける鍵がなかったのかよ」と、遺影に向かい、胃の腑で叫んでいた。

それから1年が過ぎた。

新しい温泉ホテルのオープン前のセレモニーに招待された。風呂、部屋、料理、接客サービスなどの意見を、飲んで食べて泊まって聞かせてくれというもの。

誘つてくれた人も、ホテルのオーナーも僕の高校の先輩だし、無料ということもあつて、大手を振つて出かけた。温泉にゆったり浸かつて、さあビール。

大広間での懇親会場で、偶然彼のお母さんと遇つた。僕を見つけた彼女は、すぐ僕にお酒を注ぎに来た。友達が氣晴らしにと誘つてくれたので、重い腰をあげたのだという。

2人で彼の思い出をぼつりぼつり語り合っているうちに、彼女は泣き出した。楽しいはずの宴会場で、中年男が中年女を泣かせているのはけつしていい図ではない。

こういう時は、つい優しい言葉をかけてしまふ。これがいけない。シクシクが、オイオイになつてしまふからだ。子に先立たれた親の氣持ちは、誰にも分かるはずがない。以来、温泉に浸かるたびに、彼女の大きな涙粒を思ひ出してしまふ。

キーホルダーじゃらじゃら軽いのちかな 霜石

感謝感謝の川柳塔みちのく

二十五周年記念句会

稲見 則彦

去る七月一日、深緑の弘前市で標記句会が川柳塔社から理事長の西出楓楽氏、副主幹の新家完司氏、編集長の木本朱夏氏を始め、二十四名、札幌、秋田、総勢百十四名の参加を得て、実行委員の一年がかりの心配は一体何だったのとはかりに、厳かにも賑々しく開催されました。

楓楽理事長の講話「川柳塔社主幹六代」は、六人の人となり代表句とともにユーモアたっぷりに話され、句会は止して講演会にしてもいいとの声も聞こえる程でした。新家完司氏の体を張ってのご祝辞に、会場は笑いの渦に吞み込まれてしまいました。また、ご一行のまとめ役となられた、鶴田遠野氏の細やかな気遣いには頭が下がりました。それにしても、大阪のおばちゃんのパワーには、初めての遭遇？だったので圧倒されっぱなしでした。

さて、川柳塔誌六月号に川柳塔みちのく

齊藤嘉主幹が川柳塔社との関わりを、波多野五楽庵顧問の存在を抜きに語ることが出来ない、と述べています。二十五周年句会が、予想以上（想定外）の成果を上げほつと出来たのも、五楽庵顧問の周りが川柳塔社の方々の人垣で、容易に近づけなかったことで証明されたと思います。



宿題は、敬愛して止まない橘高薫風先生の「恋人の膝は檸檬のまるさかな」から頂きました。とても恥ずかしい話ですが、「まる」が「丸」となっていたことは、案内を出した後で分かったことで、実行委員の困った顔を肴に一杯、また一杯という場面が何度か穴藏の中で展開されました。

今回の句会は、たくさんさんの川柳を愛する

人の絆に支えられました。川柳と出会って四年、川柳塔同人となり四ヶ月ですが、素直に「川柳っていいなあ」と思えた、七月一日でした。三十周年まであと五年です。最後に、来年六月九日に第三十七回全日本川柳二〇一三年青森大会が開催されます。是非お誘いあわせの上、お出で下さい。



みちのく大会参加者のひとこと

若い頃、シャンソン喫茶へよく通っていた。
「連」では当時に還れて胸がキュンとなつた。

西出 楓案

みちのくの温い握手を持ち帰り

次の再会夢にみて、ワ、ラッセの声が耳底に残る旅でした。

榎本日の出

満点の旅のプランへありがとう

もてなしへ感謝の気持ちでんこ盛る 楽しかった

大内 朝子

三味と酒リンゴもうまい北の国
洋室でねぶた出を待つ暑い夏

奥村 五月

バスガイド初らしいも旅土産
もう一度聴きたい三味とシャンソンと

川端 一步

圧巻のねぶたじょんがら。それにも況して五楽庵先生のところからの御挨拶に感動しました。

北村 賢子

帰りは独り青森から飛ぶはずだったが、濃霧のため欠航に。人生一寸先は闇ならぬ霧、案あれば苦あり。

木本 朱夏

目力に心ぶつとぶねぶたの絵
シャンソン、津軽三味、みちのくの人情

夢の三日間だった。

古今堂蕉子

津軽弁がふと仏語に聞こえたシャンソン。

津軽三味線、いがった

飛びはねたくなった津軽三味線、いがあったな。

島田千鶴子

ぐいぐい注がれガンガン飲んだ。大阪のおばちゃんパワーに負けて、津軽の人情に癒された。

新家 完司

このつぎは一緒に飲もうというねぶた
津軽弁こよなくわたし呼んでいる

田口 和代

出発する迄は、予定外の事あればと心配していましたが、幸い何事も無く、世話人としてほっとしています。

鶴田 遠野

ひたひたと無常がうねる津軽三味
みちのくの風土が醸す度量と、哀調が染み透る。

飛永ふりこ

勇壮なねぶたラッセーラーと熱い青森
言葉の響きと柳女の誠意、忘れられない地です。

長浜 美籠

五年ぶりにみちのく記念大会に参加しました。強烈な津軽三味線さく酒場

西内 朋月

ただいま大きな声で旅おわる
楽しい旅行ありがとうございました。

堀田 温子

初めてのみちのく 温いところと津軽三味線 津軽シャンソン、すっかりファンに。

榎本 宏子

前日夜のシャンソン、当日夜の津軽三味線共に私の心の鐘を鳴らしてくれました。

松尾美智代

句箋の番号と私の年齢が同じ87偶然に期待したがいい事は？ 城からの岩木山美しかった。

宮崎シマ子

ベテランの句、津軽三味線、シャンソンライブ、楽しい会話、耳も心も大満足でした。

矢倉 五月

天候にめぐまれて元気でほがらかに、みちのく句会に参加でき嬉しくて感謝の気持ちいっぱいです。

安田 忠子

飛び起きてお岩木山をひとり占め
三日間朝に夕にいろんな顔を見せてくれました。

山田 葉子

津軽三味線、津軽弁のシャンソン、岩木山の姿、句会の熱気等心に刻みつけて帰りました。

山本希久子

岩木山の残雪着流し姿が窓正面なり。
かぶり付きで津軽じょんがら、小原節堪能。感激

山本 義子

(整理川端一步)

川柳は叫びだ

一行詩これが私の墓だとは

麻生 路郎

と言うのは卑下でなく自負だろう、「MANO」同人の小池正博さんが七月号「路郎忌に寄せる」の中で麻生路郎についていろいろと書いている、その中で、

「川柳は一呼吸の一行詩に過ぎない。いずれは滅亡する。それは間違いない事実だ。しかし私は言う。

その短い一行詩に私のいのちを捧げつくして、燃やしつくして、悔いない魅力を持つことが何故いけな

いのかと反問したくなる。「一呼吸一行詩の川柳は

たとえ短い十七音字中心のものであらうとも私の命を刻み込むのに尤もふさわしい木石だと言えるのである」川柳滅亡論が彼の心を去来する瞬間であつたの

のだらうか、と。

ここまで読んだとき私は両手を叩いて嬉しくなつた。何時も僕は言っているのです、「川柳は叫びだ、本音で

叫べ」と。「句は飾るものではない、泥臭く生きざまを綴れ」が僕の持論である。

僕が塔に所属して20年くらい経過した。「つりはし」を谷本一敏や宮尾みのりなどと立ちあげて40年余り、その間にダブっ

てはいるが、「汐風」に14・5年、「裸」に10年余り、「鹿の子」に少しの間、「水郷」はつかず

離れず40年。そんな中で「川柳は生きざまである。川柳は叫びである」に行き着いた。

東野大八について

大洲出身で「川柳太平記」を川柳塔に何年も書き続けた川柳人が居たことを知っている人は少なくなつた。

僕が川柳を始めたころ、四十年あまり前の事だが、大洲の夏の川柳大会に出席をして東野大八さんを何度か見かけた。米沢晩明会長との関わりの中で岐阜の美濃加茂市から駆けつけておられたようだ。

川柳塔通巻一〇〇〇号の記念特集号の目次下に大八さんの娘さん古藤愛子さんが「父・東野大八の思い出」を書いていて。昭和一九年に召集令状を懐に山西省へ向かい、その日北京神社で結婚式をあげ、その四時間後に新妻の母を残して戦場に行き、中国戦線で負傷左腕を落した事。奇跡的に母と再会。郷里の大洲市に帰って龍護山の位牌堂の三畳一間で暮らした事等が書かれている。

引き揚げの眼に花だけが美しい 大八

大八さんは僕の記憶が正しければ、中日新聞社の編集人だつたと思う。愛子さんは大八没後、大八文庫を立ちあげ、「大八講座」を始めて丸10年が過ぎたと書いている。さつぽろの斎藤大雄が書き残した「残像百句」の中にも川柳太平記からの引用が沢山ある。

愛媛の柳祖を伍健さんで「伍健まつり」ならば大洲は「夏の大八まつり」でも良かったかな等と思っている。

お酒でもあればと妻も嬉しい日 大八



(八) 木場・猿江をゆく

長州藩下屋敷の東隣が木場である。

「あたり一帯は材木問屋の町である。堆く木を積み上げた材木置場と長い堀を張りめぐらした問屋の家がならび、その板塀や生垣は三十間も四十間もつづくのである。肴や青物を売る店がないので、朝はそういう小商人から豆腐売り、納豆売りなどの触れ売りが町々に入り込む。そういう土地柄でもあった」(『ささやく河』新潮文庫)と藤沢周平が木場の風景を生き活きと描いていた。

木場は、お江戸の必要な材木を一手に扱っていたところで、堀割が縦横に結ばれていたが、今はほとんどが埋められ、広大な都立木場公園になっていた。この木場公園の地下には都営大江戸線の手前、仙台堀に架かる末広橋を渡って三つ目通りを北に向かう。この辺りは吉永町(現在は平野町)である。

山本周五郎の短編『深川安楽亭』(『深川安楽亭』新潮文庫)には、木場のはずれの島に流れ者や悪党たちだけが屯する居酒屋があったと描く。だいたい作品を一度読んだぐらいではストーリーは忘れてしまうのだが、この『深川安楽亭』はよく覚えていた。

木場がひるぎで転宅も三筋町 (俳風柳多留より)

次は横十間川に架かる扇橋をめざす。

扇橋の東岸の石島町には、池波正太郎が描く『鬼平犯科帳』(文春文庫)に登場する、鬼平の密偵小房の衆八が営む船宿があったところだ。その右隣は徳川御三家の一橋家の広大な下屋敷があった。ここの面影はまったくなく、江東区役所の小松川出張所だけが目立っていた。

一橋家の東隣は十万坪といわれた埋立地だ。今は家並みが延々とつづく。十万坪を右に見て小名木川に架かる扇橋を渡って四つ目通りを北に向かい猿江町を歩く。

江戸時代は寺町であったが、今は税務署や養護学校、ホームセンターなど大きな施設が続く。幕府の広大な猿江材木置き場は猿江公園になっていた。

板を当て後光をしばる小間物屋 (俳風柳多留より)

都営新宿線の住吉駅に着く。藤沢周平が、このあたりを『本所しぐれ町物語』(新潮文庫)として描いている。物語は、町内の自身番の役人を主人公に十一話の連作物である。そのなかで「二丁目から三丁目のはずれにかかるとは、しぐれ町の目抜き通りといった場所、大ていの店がこのあたりにあつまっている。糸屋の梅田屋、味噌、醤油の尾張屋、小物問屋の紅屋、草履問屋の山口屋、瀬戸物商の小倉屋、表具師の青山堂、茶問屋の備前屋と下り塩を商う三好屋にはさまれている煮染めを売る木玉屋……呉服屋の相模屋、藍玉卸しの阿波屋、相模屋は黒漆喰塗りの大きな店蔵で……」と表店の風景を見てきたように描写している。

本社 八月旬会

八月七日(火) 午後一時
アウイーナ大阪

八月旬会は猛暑の中119名(投句8名を含む)の参加で開催、初出席は、江畑哲男氏・笠嶋恵美さん・工藤千代子さん・椿野紀子さん・芳賀博子さん・森ふみかさん。旬会に先立ち先ごろ亡くなられた森井善居氏に黙祷を捧げた。

今月のお話は新家完司副主幹「お金にまつわるおもしろ川柳」と題し、例句を挙げながらの軽妙な語り口に会場は笑いの渦だった。

お金より好きだと言えぬ人はいない 圭子
通帳にホクロのようにつく利息 俣子
残高が底つくころに死ねばいい 修
無駄遣いこんな楽しいことはない 忠
ムザムザと使える金が少し欲しい 路郎
弘前大会の話にふれ、支援のためにも是非東北へ行って下さいと締めくくられた。(ま

月間賞は 森松まつおさん(松原市)
(司会)美龍・昭(協取り)宏子・蕉子
(受付)武彦・ふりこ(清記)勝弘

席題「くよくよ」 山岡富美子選

総理ならくよくよなんかないだろ 勝弘
全没を食らって二日ほど寝込む 完司
くよくよをさぶさぶ洗う岩清水 富子
ひまわりの嘆きを僕は知っている 進
くよくよとするから男逃げていく(久)千代
さすが名医くよくよするな酒は飲め 直樹
くよくよとしている割によく食べる 能子
くよくよに極上の出し効いてくる よしみ
言い勝つてくよくよ闇を深くする 楓楽
くよくよが恥ずかしくなる空の青 いわゑ
くよくよを癒してくれた歎異抄 朱夏
くよくよが歩幅自然に狭くなる 弘光
背は曲がる皺増え金は目減りする 楓楽
くよくよと愚痴をこぼして生き上手 和夫
くよくよと悩んで脳を鍛えてる 堅坊
くよくよと顔に出すほどやわじやない 美龍
二十歳の恋悔やんでみては始まらぬ みつ子
ひまわりが頭を垂れる倦怠期 哲矢
おくびにも出せぬ悩みを飼い馴らす 保州
くよくよはボーズテープは切るつもり すみ子
風船にくよくよ詰めて解き放つ 満作
愚痴も怒りも頭上を通過して行った 蘭幸
曇りから雨へ誤解のとけぬまま 千代子
乱筆乱文でもくよくよはしてません 昭
くよくよの度に縮んでゆく背丈 哲子

くよくよのくから始まる懺悔録 (江)哲男
九連戦くよくよなどはしておれぬ いさお
句読点打つたらくよくよが消えた 希久子
くよくよを旅のポストに放り込む 和夫
悩むのは明日早めに寝るとする ダン吉
いらいらくよくよもせず百五歳 いさお
十円はくよくよ気にしない五円 見清

佳

哲学の森でやまない雨にあらう ふみか
鷹の子にクヨクヨ悩んでいるトンビ ふみか
深いところでくよくよしている哲学者 宏子
応仁の乱を未だに京都人 誠一
カブセルに入れてくよくよをのみ込んだ 希久子

人

この人となんで結婚したんだろ まつお

地

熱帯夜化けて出ようかやめようか 真理子

天

くよくよの種が眠っていた財布 朱夏

軸

くよくよと出来る余裕のあるあなた

兼題「勘」 松尾美智代選

人間の勘をときどき研ぎに出す 雅明
飼犬に粹な匂いを勘ぐられ 則彦
幸せへ勘の不思議にみちびかれ 恵美
内心は舌を巻いてる妻の勘 まつお

勘だけで世渡りしている叩き上げ
勘がいい人だめつたな事言えぬ
お義母さま来られる勘はまず当たる
満月に野性の勘が冴えてくる
青い空勘まで味方してくれる
告知から私の勘は荒れ模様
子のイジメ勘違いでは許されず
愛されているはずだった勘違い
勘どころ押えてそのない幹事
勘どころおさえた母の叱り方
スローライフ妻の勘には逆らわず
悪い方ばかりが当たる僕の勘
小細工も妻の勘には刃がたたぬ
勘当をした子が出世して帰る
錆びついた勘を頼りに無に還る
勘所押さえてからの蟬時雨
ヤマ勘と言うがキャリアが底にある
寝返りをうつたが勘が冴えてゆく
見つめられときめき出した勘違い
勘悪く愛のサインを見逃した
神様がたまにくれはる勘の冴え
都合良く勘違いした今日の運
勘が教える居心地の良い酒場
しよくれたコロンボ勘は冴えていた
勘違い一緒になつてわかること
女の勘は男を容赦なく刻む

玄也 光久 千代子 奏子 たもつ アキ 昭 保州 義子 能子 柳弘 好修 野薫 富子 義 久美子 朱夏 いさお 忠昭 すみ子 哲子 完司 淳司 宏子 弘一

独り暮らし生きていくため勘を研ぐ
勘ぐればみじめになつていく自分
佳
勘だけで走り続けた風の道
バラの花貰つてからの勘違い
勘のいい男チャンス風に乗り
勘ちがいがけずに運開く
勘よりも流した汗に賭けてみる
人
勘のいい人それなりにある努力
地
ひとときの幸せくれた勘ちがい
天
裏切られた数だけ勘が磨かれる
軸
勘どころ押えて夫婦恙無し
兼題「きつと」 都倉 求芽選
母親はきつと教えぬ自爆テロ
いりこだして育てた子等大丈夫
きつとよりまさか酔っている五輪
東電は国より強い何かある
結論は出ないが酒はきつと出る
ゴキブリにきつと睨まれ狼狽える
凝りもせず今夜もきつと飲むだらう
歯ふらしが二人の仲を物語る

ルイ子 りこ 希久子 朋月 朝子 良子 ダン吉 黒兎 いわゑ 楓 楽 堅坊 真理子 千恵子 忠昭 まつお 則彦 完司 完次

幸せにすると云つたの貴方でしょ
念押して言うからきつと嘘だらう
来世もきつときつと云つておく
宝籤当たればきつと返します
長生きをしてたらきつと来る天使
きつと逝くそれまで笑い暮したい
還暦がきつと来るはずサザエさん
きつと帰省すると誓つた花手桶
いい笑顔あの子はきつと真つ直ぐだ
超美人きつと整形してはるな
呑みながらきつと亭主ら悪巧み
再婚は決してせぬと誓わされ
楽天家きつと長生きする予感
良くできたきつと誰かがけなすだろ
この子の親もきつと明る人だらう
あの人も妻にはきつと低姿勢
きつとだよ誓つた駅を見失う
来世は違う女が妻になる
あの世でもきつと男に苦勞する
やましさがきつと無口にさせている
天国も地獄もきつと胸の内
案ずるな追い風の日はきつと来る
四コマ目どんでん返しきつとある
佳
ライバルもきつと握っている小石
七癖も味方にきつと翔ぶ明日

淳司 郁夫 (奥)五月 キヨミ 蘭幸 美智代 滋彦 美龍 満作 瑠美子 克己 時雄 能子 堅坊 シマ子 すみえ 美智子 朋月 完次 すみ子 楓 楽 好 富子 千代子 奏子

きつと近く花野へぶらりい余生

切り捨てた端数はきつと森になる

きつとねの小指が落ちてゐる広場

手を伸ばし触れたのきつと母の指

人 千代子

秋桜のもつれはきつと風が解く

地 よしみ

千の風きつとおふくろ連れてくる

天 滋彦

約束の小指に重い罪がある

軸 俣子

オンリーワンきつとさびしい人だろう

兼題「暖味」 江島谷勝弘選

暖味な返事はノーと受け止める

喧嘩などしたくないから暖味に

暖味な日本外交気が揉める

暖味な人だお呼びがかからない

日本語のハイはイエスかノーなのか

暖味な上司 振り回される部下

夫婦にもある暖味な境界線

てにをは失くし程良い夫婦著

嫌ですとズバツと言えは済んだのに

割り切りができずいつでも出遅れる

結論は玉虫色でお開きに

暖味のままで着々再稼働

曲線が暖味になる更年期

にぎり寿司値段暖味過ぎないか

暖味な答弁出来て役がつく

その辺から記憶暖味二日酔い

あつてないような言い値の骨董屋

あいまいな返事に飛んで来た二の矢

条約は暖味にして引き継がれ

煮え切らぬ男は歌がうまかった

暖味な地図で息子を旅に出す

暖味で挨拶好きな大阪人

どちらまでちよつとそこまでではまたね

戻り道の暖味犬について行く

やつと古希若手ホープという拍手

暖味を許してくれぬバイキング

暖味が得意な母とノーの父

それでもね蛸占いは信じた

暖味を許し合つてゐるいい仲間

少しだけ暖味にして生き延びる

あの人の暖味ちよつとある魅力

暖味な日は一日もない蟬時雨

佳 義

勝ち負けは言わぬあいこのままでいい

はつきりとすれば別れになる二人

暖味にしてよかった時もあり

正確に解らぬ文字はかなにする

前向きに善処しますと言う返事

あかね

瑠美子

弘風

すみ子

俣子

弘光

求芽

義

克己

紀雄

見清

わこ

直樹

宏子

求芽

義子

堅坊

武彦

一步

義

寿之

美智代

月子

郁夫

玄也

人の あの世界のことは暖味なままでいい

地の あいまいなところに線が引いてある

天 朱夏

どちらにも取れる笑顔が憎らしい

軸 まつお

両方から塩をもらつてほくそ笑む

兼題「保存」 鶴田 遠野選

最後にはゴミに出される保存版

幸せな今日を上書きして保存

保存する程の宝は何もない

無限大平和の声を保存する

保存場所書きつけたメモ保存する

金欠に強い味方の保存食

お宝の保存の良さへ凄じゼロ

遺言が保存されている貸金庫

永久保存夫も知らぬ人ひとり

被爆者のデータが語る黒い雨

ビデオ取りされる誓詞を朗々と

記憶力保存の効かぬ脳になり

押し花にして保存する夏の恋

この辺で冷凍保存したい歳

保存するつもりはないがラブレター

冷蔵庫魔法の箱でない保存

美義

キヨミ

房彦

滋彦

弘光

千代子

賢子

牙子

理恵

唯教

武彦

求芽

俣子

千代

アキ

柳伸

写真立てに幼いままの孫が居る
新聞の入選句だけ残して

塩漬けにしておく株も初恋も

建て替えの家をずらした松の枝

冷蔵庫奥にしこたま期限切れ

ラミネートかけて青春保存する

保存状態チェックの度に傷がつく

お土産は日持ちのモノを選んでる

母ちゃんは何でも冷凍庫に入れる

生身です僕に保存は効きません

ボランティアで伝統守る保存会

初恋は廃校の樹に埋めてある

おしゃべりな口は保存がききません

タイムカプセルから出たがっている昔

母さんのレシビは永久保存版

墓不要戒名不要骨は撒く

佳

語部に引退は無し八月忌

若い日の夢をキラキラ保存する

保存にはむかない熱い熱い恋

愛一つ下さい保存利く愛を

堪忍袋をときどき補修しています

人

一行に今日の私を保存する

地

再生治療人のパーツは保存され

千枝子

靖博

富美子

(久)千代

黒兎

敏治

弘光

勝弘

月子

ダン吉

宏子

哲矢

蕉子

扶美代

克己

直樹

和夫

哲子

まつお

柳弘

富美子

希久子

公誠

天

しあわせな日々は記憶の中にある

軸

ちちの手帖に刻み込んでる原爆忌

「気取る」

小島

蘭幸選

僕だけがひとり気取っている写真

気取ってはる割に財布の堅い人

少し気取ってコースメニューの席につく

モノクロにみんな気取った良い時代

男爵と気取るじゃが芋煮転がる

ポケットチーフだけが人目をひいている

クレオパトラの鼻が何だと言う天狗

B級グルメ気取って食べることなかれ

フルスイングのお洒落に誰も気づかない

暑気払い浴衣美人に化けてみる

気取る妻たまに見るのもいいものだ

人間を気取って猿に笑われる

マネキンが気取る孤独なウインドウ

気取りすぎだと影法師がわらう

気取らない街へ串カツ食べに行く

気取り屋でないとタクトは似合わない

気取るのを止めると枯れる赤いバラ

プロのメイクにスター気取りで遺影撮る

女王になる鏡のない部屋で

気取ってはみても貴方は透けている

完司

滋彦

アキ

あかね

美龍

保州

楓楽

富美子

富美子

和夫

ふみか

朱夏

まつお

時雄

ふみか

恵美

真理子

ダン吉

ヒーローを気取るヒーロー未満です

シャイな娘がはじめて気取るウェディング

バラを気取ってバラには遠い鬼あざみ

おばちゃんも街も大阪気取らない

包装紙ばかりが派手になつて

気取っても私はわたしでしかない

シンデレラを気取る真夏のカーニバル

クラス会幸せ芝居しています

自然体で気取らぬとこが面白いトッパ

世話女房気取りの孫とまわる寿司

男物の日傘が売れているという

酒豪を気取って二日酔いに耐える

佳

彼の前気取って声が裏返る

街中が私を見てるハイヒール

金メダルならがつポーズも気障でない

気取ってはいるが時代おくれです

コーヒーに煙草昔は絵になった

人

初舞台気取って見せる馬の脚

一筆箋コホンと姉の声がする

地

哲学者の顔で立読みして帰る

天

隠しカメラの中で気取っていた私

軸

森松まつお

博子

見清

希久子

あかね

恵子

能子

朱夏

富子

修

和夫

義

完司

宏子

奏子

弘一

義

哲男

(江)

淳司

恵子

天

地

人

天

軸

天

天

冬夜物語

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

ギヤマンの檻で綺麗に飼いか殺す
棒振も飼っているのと苦笑い
おたまじゃくし手足出るまで見届ける
フラスコの中に未来を飼っている
お早うにモーと相槌飼ひ葉桶
飼う者も飼われる者も皆狸
玉手箱密かに夢を飼っていた
丸鉢の金魚にはゆがんだ外界
耳に飼う虫がわがままばかり言う
掌で飼ひならされてる平和
調教は無理よ今まで放し飼ひ
私も年金だけで飼われてる
飼っているオウムが姑の愚痴を言う
飼ひ主に罪着せられぬ放射能
孫巢立ち空き家ばかりの飼育箱
グッピーを飼って退屈意識する
降ってくる難儀を弾きかえす屋根
ビルの街ホツと温もる寺の屋根

朱夏 喜久子 侃太 菜摘 昇 五十雄 純子 典子 昭枝 当代 起世子 かずみ 絹子 義雄 イセ 義泰 八重子 ひろ子

天窓の星に座席を予約する
シーサーが睨む戦のあつた空
屋根葺いて一つの城が様になる
唯我独尊花のお屋根にお釈迦さま
青空のような屋根ならきつと買う
秀才はマクシートで選ばれる
よくお似合いですと帽子屋の鏡
泣柿と見抜けなかつた選別機
複眼で見れば広がる選択肢
選っているうちに失う花の匂
負け組の中で秘かに光ってる
選び方ひとつ変ってくる答
鬼瓦昼夜を問わず厄払い
どんぐりの群ではこほ暮したい
静電気感じた人と住んでいる
充電をすれば何とかもつたり
納得をしたか仏の灯がゆれる

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

縁側に春一番の梅の花
金いらず梅酒万病すぐなおる
旅の無事祈るしるしに梅茶のむ
庭の梅春一番ににおいず
梅酒飲みうつらうつらといひ気分
まん丸い梅干顔は母似です
匙投げた我が子が親の介護する
投げ返す言葉に強い針を入れ
投げうりになるまで待つて買うスイカ
すっぽりと投げ輪にはまる首一つ
投げた石びよんびよん川渡る

章子 倅子 みね 孝子 美花 保州 和子 幹子 町子 富子 准一 正治 登美代 元三 美羽 さち子 節子報

投げ返す術を知らない引きこもり
八十五歳グッドバイした登山靴
おみくじが昇り龍だと告げたけど
折角なら登り坂無い墓が良い
八十路坂険しい登りが待っている
国中で昇る陽待った金環食
降りるなら登りませんと天邪鬼
出する昇り階段裏も見え
子供達私の坂は登らない
腰曲げて山道登るネコ車
六根清浄六根清浄山登る
戦時食米はまばらでいもかぼちゃ
源佐には米よりうまいもんはない
一粒も流すまいぞと洗ってる
江戸の孫米の生る木に最敬礼
米の成る田んぼが今や住宅街
千枚田夕陽に母が手を合わす
代満ちて曲った植え後笑う母
生きていることが嬉しい米の飯
飢餓の地へ心届ける米作り
駅弁の蓋の飯粒喰べる歳
この世から消えてしまった米俵
金色の米に変わっていく早苗

川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

三歳児もやもやぶつて八つ当たり
約束の金婚待たず夫は逝く
ゆるやかに曲線えがき老化する
大げさな話の好きなコップ酒
大ジョッキ憂さも一緒に流し込む

節子 重忠 泰山 道子 たい代 公恵 野蒜 禎元 くにこ 美ツ千 久芽代 玲坊 玲子 和子 龍枝 紀美恵 義人 芳光 岳人 石花菜 三津子 富貴子 仁子 玲弘 清

頼まれもしないことでも背負い込む孝子
半世紀越えても辛いきのこ雲
曲線に人柄が出る描いた眉
反論に理があり旗を持ち替える
バツイチで初婚の妻に牛耳られ
楕円形同じ形で描けない

松露川柳会(鳥取)

小西 雄々報

おしゃべりは雀に負けぬ口達者
都会には白い鴉がいるそう
早朝へ鳥のさえずり聞いて起き
今日だけはのんびりしたい誕生日
夢うつつ長閑な春日午睡時
箆の鳥上手に会話できてきた
異常気象ひばりの声も聞きそびれ
地震核知らぬ平和な鳩の群れ
満月へ神社の森で梟鳴く

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

どう生きる迷うた頃の本棚よ
試着室迷う時間がたのしくて
迷うまい明日はあしたの風が吹く
迷わずに我が道を行くのも若さ
迷走のどこまで続く日本丸
合掌のやがて沈んでゆく迷い
よーいどん負けず嫌いの血がさわぐ
早苗田で夜毎蛙のコンサート
大声で騒いで見たい事もある
子犬来て家族が騒ぐなごみ合い

孝子 風花 せつ子 登美 大鯨 宏章 和代 智恵子 鈴枝 久枝 豊枝 弘子 静江 正光 雄々 輝恵 輝子 房子 栄恵 幸子 蘭幸 千枝 千枝 ヒデコ 規代 美智子

願がしい集中力を試される
潮騒と女の一生など斬す
フラメンコ古稀の五体の血が騒ぐ
書道塾騒ぐ児童の夢を見る
コーヒートとケーキで至福になれる僕
珈琲をクルクルため息を溶かす
珈琲と昭和の風と好きな店
甘い甘いコーヒードした恋でした
恋ひとつ終わるブラックスコーヒートを
コーヒートぐらゐ奢れまっすよと孫笑う
乗り越えてゆくべし妻の懺がとぶ
表情筋プラス志向で強化する
丸くなる話を聞いている新茶
七夕に願いたくさん書ききれず
風をピンクにさせる力を秘めて花

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

今日も又動く手足にまず感謝
きつと来る恐怖感じる直下型
充実の厚意の日々に只感謝
娘の言葉父母の感涙披露宴
感動した満身創いへの讃美
父の日に天に挙げたい感謝状
車の日の送迎感謝の他はなし

川柳塔なら

坊農

凌辱の一喝我を建て直し
朝市に外国野菜並んでる
大臣を挿げ替え凌ぐ野田総理

千代美 淑子 敬子 半徳子 比呂子 汎美子 笑子 白狐 静風 厚子 栄香子 史子 一路

柳弘報 史郎 博一 紀雄

佳句地十選 (8月号から)

高田 美代子選

まだそこに居たのかオレの影法師
生ビールに理屈はいらぬ喉仏
花も樹も歌ってくれた誕生日
フーメン帰らなくてもいいんだよ
絵手紙にやさしい声が添えてある
切り札はポケットにある逆転打
同じことしても兄貴が叱られる
言い訳のつづきを書いている日記
布おむつ洗った頃は若かった
伸びたゴムお前も元に戻れぬか

鍵穴がくすくす笑う朝帰り
生き残る鍵をどん底から学ぶ
これからは凌ぐ本番だと思ふ
凌いできた男に付ける首の鈴
隣の蚊うち娘に寄ってくる
言い訳は暑さ凌ぎと言うビール
人間が一番こわい鍵の束
人間不信心の鍵は錆びたまま
残された松空を凌いで凜と立つ
雷に蚊帳でふるえていた記憶
蚊取線香匂いが昭和ひき戻す
四番打者いじりすぎてるタイガース
風評に鍵をしつかりして瓦礫
ふるさとの野菜校歌を唄い出す

(中) 勝弘

勝弘 信子 のりこ 弘風 成風 賢子 恭修 昌弘 寿之 洋子

絆とは子供部屋にも鍵の穴
棟梁を凌いだ技を持つ鮑

蚊の鳴くような羽音意外と喧しい
キーマンと言われてからの不眠症

削除キーマンが押すまで活火山
命日の蚊はゆるやかに払われる

蚊は打たぬ今日は夫の七回忌
曖昧な結果に合鍵が迫る

身辺整理最後に残る鍵ひとつ
蚊の羽音別れ話をかき混ぜる

この苦難凌げばきつと青い空
産卵へ吸血の蚊命がけ

火と水を耐えて凌いで来た戦後
母のうちわ止まらなかつた蚊帳の中

縁台に夢二のおんな蚊遣り焚く
新じゃがの皮くるくると夏に入る

鍵穴に何か誤算があると夏に入る
どん底の飢え乗り越えたコッペパン

京都塔の会

樹本

宏子報

深入りはしない波打ちぎわにいる
保証人にはなると父が言い残す

節電は丸だが停電困ります
シャンとせい鏡が叱る丸い背

花丸を大事にしようランドセル
丸腰で都会の間に住む不安

一期一会の縁を心にとどめおく
やさしさを拾い集めて梅雨明け

いといけなし臓器は永久に誇らしげ
かかりの度合いで変えるのし袋

ばっは

惠美子

靖鬼

柳弘

良一

真理子

美生

弥生

理恵

富子

堅坊

朝子

義久

隆盛

克己

はつ子

完次

道子

どうしよう耳に挟んだ内緒ごと
ボランティアはと拾った温い風

子育ては長所拾って誉めてやり
そらごらん口を出すから金が要る

西からの風を拾って恋になる
かわった日から担いだ背の荷物

散歩して季節を拾っているのです
こだけの話コッポコ拾てくる

三角も四角も丸にする器
子の願ひ金に関わる事ばかり

昔話を拾い集めるクラス会
安全な場所は何処にもない日本

影絵展大地目覚めるシンフォニー
仲裁に入り巻き添え食わされる

節電の広告だらうクールビズ
川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

味噌正油ここでもさかん文化論
亡き友と大差をつけた喜寿の春

アラスカへ漂着ポール気仙中
予約票菜代りに挟んでる

寿の謡曲漏れる部長室
「川柳塔」市立図書館置いてあり

絆には酒との絆あるらしい
独り居の庭に十葉乱れ咲き

高知川柳社

小川てるみ報

安売りのチラシの裏にある打算
水割りに女の打算揺れてる

輝美

宏子

義昭

かずお

弘之

文代

和友

昌乃

欣義

美義

比志

綾子

ふりこ

庸佑

鹿太

輝夫

節子

松風

出来高を秤にのせて今日を読む
絵手紙におとぎ話がよみがえる

絵日記に残る幼い夢いくつ
老いの目にとんと解らぬ抽象画

八尾市民川柳会(大阪)土谷
風も嵐もあつて夫婦は強くなる

示すべき道は示した父の自負
ご機嫌な妻がやさしい笛を吹く

人気者同士笑顔で火花散る
海鳴りは神の怒りか父の声

人気者仮面の裏に涙跡
待望の夢が霞んでいく悲哀

欠伸する懲戒解雇されそうだ
やみくもに動くと流れ弾見舞う

携帯の待ち受け画面孫人気
泣きに來た海で雄叫びあげている

止まってる胸の振子に油さす
張り詰めたところを癒やす風の海

ちびるが少し動いた日の介護
獄舎から投句届いた彬忌に

海底人いるなら矢張り蛸だらう
赤ちゃんの目も鼻もない大あくび

たましいをくいと掴まればからのこと
百均の傘もてている雨期の空

愛は順風七福神と海へ出る
カルピスの底で沈んでいる本音

追い越していく一札が心地よい
川柳塔きやらほく(鳥取)大塚

バラ一輪も大きな愛の証しです
恵子報

美香

勢子

栄美子

みどり

耀一報

朝子

一風

高鷺

壽之

壽峰

紀雄

流星

賀世子

慶子

扶美代

千鶴子

清華

はな

手間ひま掛けた盆栽やつと活気づく
それなりの艶で集まるクラス会
見届けて逝く約束を生きている
生き抜いていつかは千の風となる
想い出を語れば尽きぬ里の川
主を待つ部屋に一輪露の花
おもてなし好きで笑い絶えぬ日々
オレオレのサギにも母がいるたろに
ほっこりと炊けたさ豆の味
屍のかたちで母と昼寝する
神様の声をたよりに唇はぐ
草茫々ではありません芋畑
東京っ娘のよるこび台場の松だった
のびやかに絵から食み出すモデルたち

川柳塔わかやま吟社 川上

大輪報

楽をして儲かる仕事ならします
喜んで私も役に立つんなら
忙しい人にも仕事が寄ってくる
散歩する愛する母の大仕事
不器用な母はあの世で針仕事
仕事の情景を佐しくなどできぬ
味噌汁に鬼一匹を泳がせる
味噌噌を絞る余生に五七五
まつたりと熟成味噌も熟年も
味噌つけた次の一步へ燃やす覇氣
火の章で想いすつきり染めあげる
吸い上げた税染め変える偽善色
手を染めた詩追いかけている一途
喝采を幕引く夕日空を染め

初枝 未延子 富美子 恵子 ちかし 鶴子 寿々子 晴子 千代 ゆき 瑞枝 喜周 夕胡 克子 准一 よしこ 智三 あきこ 大輪 和香 俣子 泰女 寿子 紀久子 徑子 利治

染められて妻の好みに何もかも
染め替えへラストチャンスの色を選ぶ
染められてみたくて白いままでいる
原子の火に手を染めてからああヒト科
好きな人に逢えますように鈴を振る
大鳥居くぐって願うエトセトラ
手を合わせ願う横顔みな綺麗
原発は嫌い電氣は欲しい願ひ事
ほう大な願書の中に僕がいる
願わくば百歳までの夢ドラマ
あと少し生きて追いたい未完の絵
友達になりたい々周波数

川柳ぶつもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

献体を決めた五体はすえさせぬ
銀鱗を光らせ雑魚の群れを出る
男一匹負け犬のまま死ぬますか
水鏡母は生涯ノーマイク
おいそれと金など貸すな面倒だ
まだ胸にときめくものがあり死ぬ
じげの人触れるみんなが白うさぎ
マニアルの一つひとつが面倒だ
幽霊ではないわたしはノーマイク
すえた腹で核のボタンに手が掛かる
一匹の蜚に人は癒される
神話の地うさぎとワニが句を競う
この足は人の足跡には合わぬ
口止め料口がすえても話さない
妻の吐く一言亭主すえさせる
波と遊ぶ娘はみんな八神姫

佐一 紀子 ほか ダン吉 英子 稚代 秀子 美子 保州 輝子 富美子 小雪 洋々 無限 鬼桜 妻花 楓花 一瑤 清信 あすなろ 蟹郎 白兔 昌鼓 美佐枝 勝雄 地佳平 凱柳 隆浩

駅長は白うさぎです道の駅
男一匹肌脱ぐ時は知っている
献上の米は田植機使えない
縄張りにはノーマイクでも歩きます
白兎浜しばし詩人になるもいい
兎さん鰯とどちらが悪いのか
嫁さが白兎神社にすがろうか
寄り添うて違ひ想いで見る夕陽
他人の金いくら持つても意味がない
いい子だと土に聞かせて種を蒔く
男一匹手の内だけは覗かせぬ
面倒だが小銭はつかり溜まつちやう
つき合うほどにすえった性が見え隠れ
嫁の手にすえた夫婦が見放されて
ノーマイクごめんなさいね感かして
ノーマイク夫の視力落ちたから
ノーマイクポチも気づかぬ朝帰り
お母さんノーマイクでも美人だよ(小三)
面倒だから石橋は叩かない

ほたる川柳同好会 大阪(水野)

黒兎報

米びつの底は見えない気の配り
どん底を生きたれば見えてきた明り
どん底に落ちて身にしむ人の味
海底のタイタニックに夢紡ぐ
湧き水の静かな池の底踊る
母親になって備わる底力
人生を泳いで来たが道はあるか
することがあつて充実してる日日
すつぴんもいかすと下手なおべんちゃら

金祥 毅 宏章 雅女 節子 秀四 克也 美恵子 回春子 振作 菊香 一京 由美子 とも湖 善夫 行男 圭一郎 一粹 久子 美智代 長一 正子 信男 純子 重子 桂子 勝

雀の子やせ過ぎに見え僕肥満
スルメ焼き父の相手をする娘
すくむ足一歩進めて跳ぶ勇氣
好きだから何も言えなくなるのです
すぐに人信じる癖は父譲り
すいとんの昔を知らぬダイエット
拉致の子が渡った海も夏の色
原発に越前くらげ抗議デモ
あん蜜を食べて猛暑に耐える夏

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

手かけた葛蒲が嬉しそうに咲く
鈍感力持つて人がうらやまし
迷い道ついた山門蟬の声
これ最後かもと遠出のプラン立て
コーヒートカラスのアリア聴く至福
床屋拒否根負け妻がにわか切り
寝る方が先と自分を甘やかせ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

只今の声で寄せ鍋たき上がる
おっちゃんがすみませんと寄つて来る
立ち寄ると終電になる旨い酒
耐えに耐え遂にチャンスを引き寄せた
会葬の列に人望思い知る
いい人だいつも回りに人がいる
生半可が知った振りして恥ずかしい
酔い痴れて恥ずかしそうな影法師
まだ瓦礫恥ずかしいか再稼働
恥じらいを染める絵具は見当らぬ

契子 郁子 順子 幹治 扶美代 黒兎 春代 柳童 康子

更紗 ばっは 和雄 修清 直子 庸佑 ひさ乃 一歩 たもつ

大木に村の迷信つづいてる
仏滅のホテルゆつくりクラス会
お百度を信じ病気の快癒まつ
迷信を靴に入れて持ち歩く
迷信で孫を論すが噛み合わず
霊柩車親指かくした幼き日
貸した金戻つたらしい仲の良さ
デスマスクやつとゆとりを取り戻す
機密費を戻したお人ないらしい
試着室アレコレ迷い皆戻す
振れ現象今さら戻す術もなし
土へ戻す命大事に生き抜こう
原点に戻す時計に針がない
人間ヒトを裁いている迷路
信じ合う人間なのですばらしい
人間不信誰でも良いというナイフ
ロボットを作ったことを悔いるヒト
最後まで尊厳失わずに逝く
人間の貌して夫が媚を売る
捨て切れぬ五欲人間度し難い
人間を洗えば欲の垢が出る
人間に戻してくれる屋台の灯
人間の脆さを包み込む夕日
ロボットがいずれ人間窘める

西宮北口川柳会(兵庫)藤岡

りこ

時の流れが俯している滝の音
イメージからすべて始まるものづくり
天狗の鼻どこを折っても虚栄心
思い出の手紙ときどき読みかえす

百合子 秀子 なきさ 紀乃 忠昭 弘風 典子 恭昌 勝弘 柳伸 弘子 栄子 集一 郁夫 柳右子 あや子 昌紀 ルイ子 正春 克己 志華子 楓楽 柳弘 祥昭

留守がちな家見限らずバラが咲く
こだわりを捨てると視野も晴れてくる
鼻の下伸ばしたつけば高かった
君のイメージ夢風船に乗せました
うたた寝の頬に涙の跡がある
時どきは自分を叱る鞭を持つ
イメージを決められ私消えてゆく
清盛のイメージ変えるドラマ見る
二度三度アタックせずはどうします
友達になつてしまった医者二人
芸人が下げる大阪のイメージ
幸せを誇つています丸い鼻
高過ぎる鼻が男を遠ざける
原発は一つ狂えば恐ろしい
いい時が流れる五時に起きた朝
善人の家系垂れ目に丸い鼻
目から鼻へ抜けた仲間が少し浮き
ハーモニイ崩れて仲のいい夫婦
時時は自分の影を確かめる
まな板のくぼみ専業主婦の自負
褒め過ぎて目眩過ぎて鼻につく
愛嬌なせめてとえくぼくれた親
白い靴はけば自然に颯爽と
窓際の方々は過去の夢を追う
でこはこの人生越えて目指す喜寿
時として好きでも嫌と言うメンツ
スカイツリー街のイメージアップする
低くても顔の左右を仕切る鼻
凹凸の人生よくぞ越えてきた

美籠 千代 盛夫 哲夫 朋月 忠 直 正和 ひとみ 健二 淑子 順子 敏夫 勝弘 耕治 哲男 浩司 光久 宏造 穀 弘子 歳子 武彦 武臣 茂 利子 千賀子 じろう

レシートに今日の暮らしの彩を添え
イメージをしつかり植えるカギ括弧
求芽

川柳塔みちのく(青森)小寺 花叢報

うっかりと計り間違え放射能
植えなおす亡父の記憶が消えぬよに

怪我なおる遺影が笑う今朝の鐘
田植終えさなぶり会話盛り上がる

どの色に咲くか紫陽花雨を待つ
身代わりのしだれ桜が記念樹で

ちり取りですくえなかつた過去といふ
ジェントルマンたけば埃出るらしい

就活に埃だらけの靴が行く
人間を斬れば出てくる色と欲

あじさいの多情やがては恋の色
田舎道ゆらゆら揺られ乗り過ぐす

本心を語れば過去が白くなる
桜闇うっかり入り笑い種

嫁ぎ先無事に務め退路になる
陽は西へ今日のスケジュールが残る

どん底に植えた笑顔の土踏まず
感動の弔辞拍手をしてしまふ

植毛を脱毛もするエステ様
りんごの木一本植える春の画布

水無月や風の噂を聞きにゆく
川柳花の輪(大阪) 岡本

病む人に秘訣の希望持たす嘘
目立ちたい目立ちたくない思春期よ

あや乃

風琴

小とみ

一湖

信子

つとむ

綾子

柳子

初枝

美鈴

ひとし

芳生

則彦

花匠

井蛙

黙人

すきですね目立つ花よりかすみ草
あやしむな真正銘銘俺が親

あやしいと疑い出すと隙間風
嫌われぬ程度に目立つ杭になる

参観日白髪のお母が気取つて
どたばたを招く怪しいマニフェスト

本棚がおれが掃除といつてある
雲行きが怪しくなつたタイガース

つきまとう怪しい男今の夫
色白の母の遺伝子かくれんぼ

目立たないそこで男は法螺を吹く
城北川柳会(大阪) 近藤

失つてから捜してる僕の影
失つた日々が刻んだ深い皺

粗削り円空仏の息遣い
奇抜な服着てる普通の嫌いな娘

火加減に一睡もなし登り窯
加減無い母の叱咤は身にしみる

べつびんに撮れぬカメラにある加減
失つていく空白へ足す真つ赤

人並の暮らして背伸びせぬ老後
そのままを映す鏡に恨み節

深く詫びて二の句を継がせない
リスクよりリターン信じ今日も株

湯加減を五右衛門風呂に聞いた頃
何か変今日の夫はよく動く

湯かげんも今は尋ねもしない妻
薬局に沢山のリスク潜んでる

あさ子

やすの

三楽

泰子

みちる

一幸

克衛

昭好

勇太朗

敬子

楽鬼

正報

和夫

縣作

風琴

千恵子

失敗をひるむと押す子の背中
子のサイン教師気づかぬはずがない

加減した拳骨だった今わかる
党分裂リスク覚悟の大勝負

人が好きみんな寄り添い生きている
熟女らの帰った後の喫茶店

七夕の帰国ロビーで君を待つ
声と音聞き分けてきぬががいる

ばあちゃんのいい加減さが心地良い
身の廻りは普通にこなす母米寿

ネクタイを外し人間丸くなる
気にかかる事も済ませた良い日暮れ

ボケと言うリスク残している余生
いい加減自立をせねばと思う国

真心と言う奥の手にほだされる
酸欠の街だ失うもの多し

好きな酒楽しく飲んだ夜のリスク
デモの叫びあれば単なる音なのか

羨んでも未来へ吠かす種を抱く
川柳同友会みらい(鳥取)吉田

同窓会初恋の人ききて欲しい
次章へと余力残して句点打つ

行楽で人と渋滞見て帰る
巾着と口は閉じるに決めました

薔薇のためだけにあらす五月の陽
ノーというしかないだろ原発炉

根のはえた妻はびくびくなどしない
底力ひらき直れば湧いてくる

雨音が今日は休めと言っている
久司

杵香

たもつ

倫修

レイ子

志華子

洋志

一歩

榮子

公子

義昭

美智子

集一

正子

朝子

ばつ坊

かご盛りの鯨にワイン買っている
杖が折れ柱が倒れ独り立つ
胸の内吐いて体重軽くなり
天下り出来る地位まで上がれない
亡父の名を一字もらった昭和の子
服装の乱れですよねコスプレも
自分から作った迷路生きている
国会が「よし」とよりも面白い
刈る草も命の音がしたような
タイミングずれ札状が浮いている
調べてもわからぬ道を生きている
3・11忘れましたが五月晴れ
死ぬまでは現役勝負士に獄
若作りしても隠せぬ脳ドック
妻の死後いろいろ調べごとがある
冬服にあしたを入れたまま洗う

温子
美恵子
敦子
嘉子
信子
みち子
慶一
安雄
正子
華蓮
和代
一眸
菜美
遊子
はるお
公弘

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

好きな事とやるべき事にゆれてる
駅からは百歩の所我家の灯
家の灯にホッと息つく旅婦り
草双紙この世はゆるり犬掻きで
人並を泳いで後ろ影を追う
泳げずもせめては浮いていたいもの
日程がほどほどあって充ち足りる
年の川泳いだことは幻か

川柳大阪

森松まつお報

鼻詰りすつきり通る頭まで
自分から謝る事に決めました

美世子
芳香

お通じが快調心もすつきり
青い空見つめ心をリニューアル
すつきりと浴衣で決めて来ましたの
懐かしい面影偲ぶ里の駅
駅売店いつも赤福おみやげに
雑踏の駅人生の縮図見る
いきいきと日本が動く朝の駅
日本の勤勉を見る朝の駅
駅裏の汚い店にうらやましい肉
駅弁がひよっこ顔出す国言葉
保険より明日の暮らしをどうするか
縁談を保険の額で決められる
保険金どっちが先か妻とほく
保険金当てにするほど有りません
年金の介護保険が重すぎる
やさしさが私のための保険です
癌保険なりたくないと掛けている
保険金ありがとさんと墓参り
健康と自然の恵みもろてます
雨あがりすつきり浮かぶ飛行雲
駅弁の旅は北陸被災地へ

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

妻の役ここで降板ひとり旅
役引き受けストレス溜り寝込んでる
選挙ではあなたが主役言うくせに
世も変わりピナス茶髪のお役人
座ってるだけで主役の母卒寿
出し惜しみ決してしない母の愛
惜しい人神は無情に連れて逝き

勝弘
堅坊
まつお
善純
和子
朝子
笑風
一步
五月
万紗子
紀雄
川童
柳弘
かよこ
柳昌
夢子
美花
一風
信醉
功司

百歳の惜しい監督星になる
惜しいけど断捨離にする宝物
惜しみますに生きる決めてゆとりです
ボイ捨ての野菜の皮に銭の神
子を思う母の愛情惜しみなく
亡き母の和裁の腕が惜しまれる
父母逝って敷居が高い里の家
亡き母の一時帰宅に和む顔
ただ歩くだけに緊張エキストラ
窓枠が一幅の絵に美術館
疎んできた卒風より知った夜
移植する卒で命を継いでいく
取っ払う卒へ仲よく手をつなぐ
母さんの楔が効いている我が家
惜しまれて身を退く人の低い腰
役立たず言われて食事減らしてる
大物の片鱗枠に嵌まらぬ子
数合わせのために座った隅の席
帰り際そっと握らす母ごろ
帰る道断たれてからのど根性
青い目の男を連れて娘が帰る
夕焼きの化粧と帰る野良の母
見る目ない僕をハズしてどうするの
役立たずな老いの臓器も差し上げる
役がつきうれしい人もあるようだ
只酒でうっかり背負う重い役
聞き役の左の耳にタコがある

富柳会(大阪)

古田千華報

陽炎の今後を聞いた土筆の子

彦次

美世子
シマ子
篤子
たかこ
賢子
とし子
りつえ
志津子
桃花
千歩
芳香
朝子
和代
克博
晴雄
庸佑
昭
克己
裕之
五月
柳弘
勝弘
隆昭
公平
昌紀
まつお

今日限り涙の壺に蓋をする

ライバルの投げた言葉を見逃さず

針のない時計を探さず余命表

アナログの頃は優しい風だった

さよならの歩幅明日を信じきる

あれ以後の天女はおぼろげに笑う

病み伏して一日長きと知りぬ

繚乱の薔薇復活の道標

ふる里は塙生の宿のままだった

親方は背のオーラで語りかけ

運命の輪投げターゲットはあなた

変化球投げて受けている絆

グロုပ်に亡父と遊んだ球の跡

たてがみも鶏冠も外すそして愛

馴れしんだ手書きで妻の置き手紙

言葉尻拾い集めて投げ返す

独りになつて喜ぶことがまだ出来る

投げかけた笑顔がえがお連れてくる

スカイツリー登る夢みる空豆よ

投げられた石に全開する闘志

満ち足りた日の旋律はアンダンテ

毒舌が消えた頭を打つてから

鐘の音の余韻のように終りたい

夜は静かに魔女の修業をしているらし

フントンボ電子の音を遠ざける

アナログの世界に戻す紙芝居

どさくさに紛れて投げたけど本音

以後はもう風は他人の貌で吹く

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井

則彦報

海面へ飛ばしつづけるシャボン玉

未知

和子

信子

アキ

鬼焼

晴美

深雪

千華

武人

奏子

澄子

壽峰

よしみ

高鷲

恵

伸雄

華子

紅紫朗

欣之

日木

登子

よりこ

寿之

七朗

千恵

森子

佳恵

恵

古い昭和良くも悪くも輝いた

口喧嘩勝つても解けぬわだかまり

目を閉じる僕の決心揺れぬよう

被害者も組板に乗るブライバシー

坐骨神経痛めてくれる電気風呂呂

走る子の兵児帯揺れる夏祭

節電へ灯火管制かと老母

海の日と知らず祝日だと覚え

沸帯が圏外になる黄泉の国

佛点を下げてクラス会終る

もう喜寿はまだ喜寿ですよ父さん

こすもすが揺れるイエスカノリーのか

ホップステップあれ梅雨明けは未だだった

老いの日を一緒に刻む腕時計

結び目がひとつ壊れて風になる

停電の自動ドアの木偶坊

はらはらと活断層が揺れて居る

古着きて化けてみせますニューモード

継ぎ足したジョークが舌に馴染まない

節電に夫婦だんまり四畳半

背を向ける人には届かない電波

母さんは古いと言った娘の四十路

恋をした月の光も古くなり

部長課長社宅にもあるランク付け

昭和なら今何年と口癖に

何もかも不問のされている不安

節電へ夫婦シートを繰り返す

歩数計歩幅のことは言わないで

レモンはちみつ内緒あながまだ続く

古いから直せぬという医者・家電

郁子

庸佑

堅坊

美義

肇

美佐子

徹

行兵衛

健二

きり

幹治

志津子

幸雀

比志

弘之

りゅうこ

武臣

紀子

隆

夢

千代

美智代

則彦

満子

玲子

久子

巴子

求芽

葉子

見清

さらにらと夏くるぶしの辺りまで

三日ほど豆電球がお留守番

よく食べてよく寝て妻はヘビー級

あかつき川柳会(大阪)山本

柳昌報

欲張った手が抜けません掴み取り

原発を再稼働する黒い雲

ちよつとならそう言う医者もいける口

病むまでのびのびになる歯の治療

雲掴む話に酔っているニート

欲しいなら撒き餌をどつと撒きなはれ

青年の意気翌槍と天目指す

英会話ギブミーチョココから始まった

ゴーヤの蔓気忙しそうに伸びている

枝豆を見るとビールが欲しくなる

取り敢えず家内安全祈る絵馬

デパートを丸ごと妻にねだられる

い余生のびのびとして猫もいる

南海地震想定外で通らない

住み込みの神様を探しています

ヘソクリを監視カメラの前に置き

妻の留守広々となる鬼小屋

安近短の安に安全いれといて

あの雲な浄土へ運んでくれそうだ

病院の薬半分捨てなさい

どじょうの身を清めれば死の宣告

のびのびになった給料やと受け

もう少しで雲に乗れそうダイエツト

安全を信じています常夜灯

メイドインジャパンが欲しい日本人

昌乃

菜々子

かずお

柳弘

和雄

哲夫

昭男

隆昭

忠昭

克己

信二

たかこ

のぶ久

桃花

明子

生枝

武

義

たもつ

祥昭

和代

シマ子

一簡

茶助

秀夫

願

后子

見清

列島の安全ベルト緩んぐる
安定剤の役もしている妻の鼻

知らなかったという事にするいじめ

百万本のバラを欲しがる彼女の瞳

雲ばかりながめ無策の日が続く

オスブレイン安全神話練ってます

雲行きを読んで人生いつも晴れ

妻の声届かぬ部屋で深呼吸

母さんの手がしつかりと子を守る

コントロールできないモノは危険物

川柳藤井寺(大阪)

鳴谷瑠美子報

海行かば平和を望む民の声

海の日が夏休みより先に来た

かわいい子亀世界の海を見ておいで

美しい海で見つけたマーメイド

海も山もわたくしも百面相

海を知る男で風の日が怖い

荒れ狂ったあの日の海は忘れない

疲れたと言ううさねもす波を見ろ

大海の彼方へうさを捨てにゆく

空気よみ温度差みせる居候

幾山河越えた証の顔のしわ

故郷の山に兎がいなくなり

男だろしゃきつとしろと山が言い

大きな山を見送りました一周忌

口数の少ない優しさに泣ける

説得力手話は私を離さない

物も言い様で角が消えたり和んだり

言葉数少ない人で芯が有る

宏 ばっは

昭 乃

紀 浩

子 二

花 笑

(山)和

(石)直

勝 弘

龍 一

六 点

みよ子

光 男

みつこ

扶美代

アヤ子

信 二

いさお

トヨ子

彦 弘

雅 枝

榮

婦美枝

美代子

悦 子

登志子

紀 雄

ばんぼんと打てば響くよ受けこたえ

背中押すことばの力欲しい時

誉め言葉過ぎれば耳が欠伸する

方言をなつかしく聞くタミナル

丁寧なことは使つて距離をおく

はんなりと言つてきつおす京言葉

一言が花が開いたような日に

川柳ねやがわ(大阪) 龍島

稲村の穂に学ぼうと見学に

信号の途中で犬が座りこむ

神様が妻を私にくだされた

さし迫る危険の中にある期待

嫁ぐ娘に譲る包丁今日も研ぐ

妻の寝息聞いてへそくり確かめる

天は何故怒つて水をおちまける

出なおしへ長い点滅させる赤

信号無視はやる時代の世紀末

冗談でなかったでしようヒックス粒子

冗談にされて悲しみ倍加する

コンサート激しい曲で眠らせぬ

スッピンは便利何処でも顔洗う

憤然と西瓜は井戸に吊るされる

胸底に光るあなたというホテル

節電か隣家の灯りも消えている

あつちこち冗談じやない再稼働

エッ・ウソ ホント冗談でしょうパンダの死

半分は寝ていたらしい昼の寄席

盲目の恋は信号など見えぬ

恵美子 夏子 絹枝 喜代子 瑠美子 ヨシ枝 シルク 三郎 博泉 高鷲 壽峰 一風 仁杏 銀杏 寿子 鈍甲 弘一 リイ子 さち子 かすみ 茜 洋 美江 美智子 麗 忠央 郁夫 秀雄

近く時はきつと妻へのありがとう

低いだつてなまくら役にたません

草花と話が弾む万歩計

竹光を研いであなたに立向う

法話聞く心の耳を研ぎ澄ます

血の通う信号だろう胸騒ぎ

半夏生すぎて漂う無常観

はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報

鍵っ子へ母鉛筆の走り書き

鉛筆を握り睡魔を寄せ付けず

ありがとう亮げた鉛筆じつと見る

父の日や届く孫らの写真のみ

ブルより故郷の川で泳ぎたい

カナヅチでも世間上手に泳ぎます

赤ちゃんは布団の上で泳いでる

官と民うまく泳いで天下り

アロハシャツ泳ぐよ金魚涼しげに

安売りのチラシに泳ぐ人の波

一七年泳いで呪縛ときぬまま

人生の大海原を泳ぎさす

白内障治りお月さん一つ

出られない迷路で空を仰いでる

蓮華畑寝転び空を独り占め

ちっけな悩み大空気にしない

ドーンと鳴り空一杯に夢の花

大空に国境はなし鳥渡る

みちのくの空へ捧げる鎮魂歌

青空を信じて試歩の杖すすむ

祥昭 修 仁清 弘風 賢子 朝子 恵子 庸佑 美代子 ダン吉 美喜 獏杏 喜久子 アヤ子 章司 淳介 久仁子 ちづる 雄太 登志子 悦子 ヨシ枝 かつ美 和子 泰子 いさお 敏 高鷲

運転手昨夜寝たかと気にかかる
バスルーム私ひとりの別天地
ガタゴトの田舎のバスは疲れます
おばちゃんに聞かれトホバスター
二階バス優越感が少しある

川柳クラブわたの花(大阪)西川

義明報

もつれ合う蝶も待つて花時計
また板が奏でる妻の上機嫌
アナログ育ちデジタルの世が渡れない
金魚の糞つかず離れず世を渡る
信じてる雨のち晴れは外れない
むきになる金魚堀いに又やぶれ
新聞の広告量に不況嘆ぐ
孫と猫家庭円満感謝する
山に来て緑爽やか目の葉
連休や家族ごつこもなく二人
ほつとして私今日から老後の
健康に勝るもの無しこの世には
夜行性私悩ます蚊が憎い
五月晴れ青葉と共にもえ
飲み会で時計を見たらシンデレラ
みな違うどれが本当掛時計
山百合は藪の中こそ住みよいと
凜とした着物姿は百合の花
晩学に学んで知った新世界
水枕何度も替える母の愛
さわやかな笑顔にふつと気が緩む
あじさいの雨に合せて色を変え
赤ちゃんが笑うと笑顔寄ってくる

千鶴子
みつこ
フジ
光男
扶美代
義明報
民
宏
晴美
俊子
義明
はじめ
浩三
愛子
博子
和子
耀一
正春
孝子
奈良司
えみ子
かなえ
明美
ますみ
宏至
知佐子
美代子
いつふみ
一風

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田 毅報

硯の海こころをきゅつと引きしめる
叱るよりほめる上司に靡く風
休耕田飢えに泣く日がきつと来る
あの人の遠い噂が風に乗る
座るにも立つにも気合い入れてから
才能は横一線の呱呱の声
恙無く生きた人生才とする
能力に限界なし人の知恵
才能は神さまからのプレゼント
長生きは才能ですと医者が言う
才能に首をかしげるピカソの絵
才能を生かす宇宙は無限大
才能を信じて放す子の旅路
全没も叱咤激励明日の糧
子を伸ばすために叱るの五倍褒め
時時は妻に叱られしゅんとする
寝顔をみて叱ったことの自責念
叱られた事など忘れもう笑顔
鮎と鞭使い分けてた亡父の愛
歳をとり叱つてくれた祖母しのぶ
逃げ道を残して叱る難しさ
名優の訃報昭和が遠くなり
目と耳が時と都合で遠くなる
夫とは近くて遠い仲でよい
距離近く交わりあえぬ遠い国
スカイツリーお月さんにはまだ遠し
遠き日の思い出たどる一人旅
遠いけどあの世の妻と結んでる

光久
毅報
無限
能子
義博
美恵子
保雄
康子
利子
千賀子
弘子
武彦
照子
和郎
宏造
妙子
和子
政一
遼子
盛夫
寿朗
清之
ひろ
浩司
武臣
博史

老夫婦今日は手軽な昼ごはん
半夏生祖父母が染めた緑の田
失敗を恐れ小さくなる器
人の世の裏を見たのかれの皺
一期一会時は命を朱に染める
鼻つ柱強いが涙には弱い
期待した分失望が倍になる

川柳塔鹿野みか月(鳥取)中原

諷人報

野方図に手足伸ばして眠る幸
放牧の牛の気分似たところ寝
野においてホタルブクロに火を灯す
資産とは云つても手付かずの原野
野の花は一輪挿しがよく似合う
野仏にお供え多く彼岸かな
過去帳はわたしに母が二人いる
家具のない部屋で雨音聞いて寝る
人生の重さを知った父の家具
わたくしも家具もちょうびり傷がある
引き継いだ筆筒ネズミの穴があき
タンス一つの出発が俸せだった
嫁入りの家具が今では粗大ゴミ
新しい家具ではないが光っている
一番に走る我が子を追うカメラ
報道のカメラ被害者まで煽る
被災者に無慈悲なカメラ向けてる目
内視鏡のときが腹を撮つてくる
母の糸切つて翺が立つ子の宇宙
ズガ二捕る宇宙の穴に手を入れる

繁義
洋一
茂
淳
いゝ
みつ子
楓楽
照彦
弘子
美ツ千
孔美子
すず
露郎
蟹郎
惣重
八重
盛桜
宣子
実満
和子
美代子
茶子
いさを
小満
彩子
富江

夢いつか宇宙遊泳チャイニーズ
四季の花咲かせて母の小宇宙
宇宙人地球に仕事ありません
宇宙から一緒に飯を食う女
宇宙とは三度三度の白い飯

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

青空に白い絵の具で結ぶ縁
子つばめよ無事にお帰り旅の空
青空に袖をからます新世帯
大空にゴーヤを描き涼を舞う
飛行雲空に落書きして過ぎる
夜も更けておぼろ月夜が語り出す
澄み切った空が騙したことがある
真つ青な空を歩いて陽と握手
奥深い話に耳がかしこまる
ノウハウの指針導く深海魚
深々と頭を下げて遣り過ごす
再稼働被爆者の声深く聞く
風評の深さが胸に突きささる
日本語の深さを埋める原稿紙
打ち込んだ根性アウトにはしない
仕切屋のアウトの音が弾んでいる
人生のアウトは神の手に委ね
アウトから苦菜の味を噛み締める
老いたてでアウトに出来ぬ義理を立て
騙されません男が投げるアウトボール
反抗期アウトコースもなんのその
はそぼそを嫌い大きく好きと書く
はそぼそと言うから余計暑くなる

青帆 知恵子 芳恵 とも子 桂子 禮子 玲子 繭子 崙子 民子 昌枝 幸子 博子 左余 久子 久絵 草庵 長吉 寿代 雪代 柳歩 千里

はそぼそとグラスの底の独りごと
はそぼそと独り食べてもうまくない
ちえこ
はそぼそが右脳の壁にこびりつく
隅っこではそぼそ蟹が泡を吹く
賞味期限切れてはそぼそ朝のパン
あなたと私足して二で割る間柄
かごめの輪抜けて中間色になる

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

七夕の前で西瓜を切った母
七夕に会う約束をしたかなあ
失恋か七夕の空涙雨
七夕に願ひ事書く園児たち
短冊に健康であれ今も書く
願ひ事それぞれ書いて笹揺れる
天地から貰い物して生きている
花丸を貰って走るランドセル
大黒天飾りいたただき物が増え
恩師から貰った言葉生かさねば
手織の緋母の形見に貰ったく
お下りと貰いで育つ私五女
終焉を迎える頃に箔がつく
ずんべらが箔つけようともがいてる
葬式の花輪の数で箔がつく
金箔の仏壇拝み極楽に
白くなる長い眉毛に箔がつく
箔などは一つもないが生きてきた
還暦から古稀へかけての灸カーブ
金運が急カーブして下降した
曲り角婦唱夫随で越えてきた

文香 ちえこ 熊四郎 芳山 治代 幸代 美智子 照彦報 玲子 けいこ 貞子 英子 恭子 和子 鬼一 美代子 萩江 祐子 喜美子 悠子 風露 康子 醉美蓉 日出子 重忠 智恵子 完司 由紀子 節子

働いて佻しいカーブ描く背骨
あの事故もあの場所だった魔のカーブ
先がそのとつても楽し曲り角
蒜山にカーブカーブのわらび狩り
天の川年々薄くはやけだす

わかあゆ川柳会(鳥根)松本はるみ報

遠回りカラスが見ている水溜り
じつくりと余白を歩く筆の先
一人から大きくなった絆の輪
ちぐはぐな一日団扇のうらおもて
ちぐはぐな二人で暮すユートピア
ぼたりぼたり余白埋めた涙雨
人生の荷物はどこでおろそうか
得失の差が人生の分岐点
捨石も愛でる石あり庭の隅
一点かががやき添えた余白の美

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

茶子 龍枝 次男 賀寿恵 照彦 ちよえ かつ子 英子 好栄 恵美子 澄子 昌利 博利 清泉 みつ子 桃花 捷也 公平 志華子 富子 満作 希久子 照子 弘子 理恵

宇宙までカプセルに乗り夢の旅
カプセルより煎じ薬とおばあちゃん
ようそんな小銭ないので払えとは
昔よめき今はふらつく伊達男
忘れてはならぬ八月の黒い雨
もろたつたなまてよう言う来たつたの
露の雨鰻うまうして旬に酔う
国民の為は口だけ旅議員
主語のない会話は妻の得意技
診察に来られるだけでお元氣と
百歳を視野に色々夢を見る
やと捨てまた買えるなどはくそ笑む
兄嫁が里の秘伝で漬けた茄子
他人から見れば喜劇になる悲劇
夏の雲ぼろりと本音出てしまふ
五輪の和世界を結ぶ夏祭り
よく学ぶよく遊べとはご無体な
ブティックでため息ついてユニクロへ

川柳さんだ(兵庫)

堀 正和報

舞夢 楓楽 紀子 浩二 蕉子 滋彦 知之 千歩 日の出 眞澄 正雄 集一 善之 恭昌 哲男 好文 一泉 健二 美文 光久 菜々子 廣子

梅雨明けてブルーにわかに人氣もの
朱を少し足せば可愛い妻になる
出世して過去の悪さを脱ぎたがる
いつの間にやら逆さになつていた話
おだてられ人肌脱いで馬鹿をみる
総合的に見てもあなたは頑固
恥じやない脱いで今年は涼を取る
ゴキブリも妻の居るときは出てこない
原発へ抗議のデモが民の声
孫ブルー無事故祈つて送り出す
脱いだけ見てくれるのは鏡だけ
犬と猿けんか相手がいる元氣
巻き添えは嫌だがそつと聞かぬふり
脱がないがへんだけ見せる女子ゴルフ
大人買い欲求不満癒やされる
盆仕度母がこそこそ動き出す
レシートが短くなったエコライフ
鳴く虫へおかまいなしに草を刈る
飛び魚も古希のクラゲも居るブルー
こそこそは聞えないから笑うだけ
おいヤブ蚊もつとおいしい血を探せ

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

雅司 茂山 美和子 紀乃 雄太郎 ひとみ 俊昭 雅尚 喜久子 喜代子 ちあき 聖也 淑子 宣子 歳子 キヨミ 章子 正和 靖鬼報 里江 美也子 健二 柳明 寿美子 和子 雪菜

無我夢中夫に切れて飛びだした
減らず口たたいて尻尾つかまれる
残り物捨てれば損と母肥える
骨抜きにされて困つた誉めことば
絶叫の花火絶叫の観衆
そして君のもになつてしまふ僕
ビン代の方が高価な資生堂
ふにやふにやとそんな態度じゃ金かさぬ
いじめ自殺所詮役員言い逃れ
エコエコと体感温度上げている
うたかたを夢中に生きて黄昏れる
最高のエコだと思つただ歩く
貧相な顔でいつでも損してる
エコエコと火は怪しげに原爆炉
ゴージャドの日除け夜風を通せんば
何にでも夢中になれた青いころ
茸狩に夢中下山の道迷う
金取るか心掴むか揺れてます
夢中だから楽しい時はすぐ過ぎる
じいちゃんにランブで耐えた自負があり
節電のエコ悠悠と団扇振る
新婚は怖くなくかつた妻でした
怒つたは怖くなくかつた妻でした
優先者ひとつ若いと譲り合う
節電節電稲妻走る空を見る
骨抜きにされても愛は惜しまない
焼酎でふにやふになる肝腎日
痩せなさいそれが一番エコになる

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

楓花 素雲鶴 五月 よしひさ 野薫 ひとみ 由美子 美子 菜々子 ヨシエ ダン吉 正和 哲夫 見清 洋子 奮水 哲男 純 勝巳 祐康 シマ子 耕治 比呂志 美龍 朋月 かずお 清帆

岐路に立つわれに寄り添う人がある
 本日も生きねばならぬ立ち上がる
 巢立つ子へ遠くで私祈るのみ
 避けられぬ老い正面で立ち向かう
 土壇場に立つと女は強くなる
 キッチンに立つて鼻うた皿洗う
 妥協策青い尻尾がピンと立つ
 居酒屋で我慢の面がずり落ちる
 大声を出して我慢を吹っ飛ばす
 我慢ですすいてつと蛸と一騎打ち
 親光の鶴飼いの川に鮎を撒く
 何もかも許して河は揺らぎ無い
 人はみな大河ドラマになる一生
 日本海川でつながる森の夢
 せせらぎの音も静かな過疎に住む
 川の字で寝た子は悪の道踏まぬ
 川と海ぶつかるころオレと父
 川の愚痴聞いてめだかも成長す
 我慢した背が重たい帰り道
 美恵子

米子住吉川柳会(鳥取)渡辺多美子報

主一郎 完司 忠良 幸子 一京 和子 くに子 一瑤 重忠 茶子 節子 幸安 菖子 公子 昭弘 雅女 美恵子

その昔した親切が今かえる
 手弁当若者被災地に走る
 カレンダー月日に羽根のある如し
 他人には親切夫には邪慳
 親切な人に道聞き遅刻する
 何時にない親切それは異だった
 数え切れぬ親切抱いて八十年
 親切も過ぎるとそとと車間距離
 パスワード忘れて開かない心
 ケータイを落してまるでつべらほう
 大丈夫かと手摺もつ背に声かかる
 金魚ひらりストレッチしよう誘う
 道を聞くにも親切そうな人探す
 親切を受けてわくわくしてる鬼
 もう一度母のお腹へ戻りたい
 冷凍で保存をしたい記憶力
 動脈を作って過疎になる田舎
 熱中症怖くて夜行性になる
 私の右脳にボツと桜咲く
 さよならは心残りをまぜて言う
 引つ張って引つ張って着るMサイズ
 パスワード忘れて脳が開かない
 満ち足りてアンボンタンになった脳
 コーヒーをすするとひらく脳の中
 脳みそが湧けてしまひひざまくら
 簡単のようでむつかしいのが川柳

大山滝句座(鳥取) 新家

完司報

房子 蕉子 希久子 久仁雄 昌紀 光久 たもつ 加お里 美智代 扶美代 美龍 義子 みつ子 いわゑ 楓楽 玲子 麦青 紀の治 芳光 くにこ 芳山 大鯨 厚子 和子 石花菜 蟹郎

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

引き出しの奥でへそくり忘れられ
 日本海を引つ張りながら陽が沈む
 病名がわかり半分ほど癒える
 引き算も九九もあやしくなってきた
 また生える分かつているが草を引く
 優しさに触れて本音がついほろり
 空っぽの脳がブライド忘れない
 喧嘩する布団の距離は端と端
 脳天にこびりついてる敗戦日
 土用鰻食わなくついても死にはせん
 熱中症負けなくなるかと深呼吸
 最新治療金がなければ受けられぬ
 生きるため採血続く五十年仁美
 冴えた日は鳥の言葉が分る脳
 うつとらしい空気はじけたお客さま
 ベレい帽似合う彼氏が好きになる
 暑いから長い髪の毛切りました
 あの世から帰りよく食べよく遊ぶ
 悔しさをかみしめながら行くあの世
 黄泉へ行く時のことを説く和尚
 見も知らぬあの世のことを説く和尚
 あの世でもまだ戒名で威張ってる
 ぐうたらな僕にあの世が向いてそう
 あの世での待ち合わせ場所聞き忘れ
 真犯人あの世の人は知っている
 うつとらしいと思てた人に救われる
 うつとらしい天気うつとらしいお客
 焦つたら失敗しますあの世ゆき

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

由紀子 風露 萩江 博子 久絵 悦子 久子 重忠 正子 恒子 すみゑ 完司 かりん 舞夢 さくら 月の出 日の出 俣子 時雄 光 つづや 五月 八千代 深雪 扶美代 ばつは

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 藤 井 寺	16日(日) 14時締切 私・記憶・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 14時締切 脱線・限度・はしゃぐ	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	17日(月) 13時40分締切 乱れる・自慢・いったん 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	18日(火) 13時から 味・パソコン・逃げる しみじみ・自由吟	キッピーモール 6階 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	22日(土) 14時15分締切 コーヒー・笑う・まごまご	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
富 柳 会	市民川柳大会 22日(土) 12時開場 海・むらさき・爪・陽炎・そのまま・平	富田林すばるホール 近鉄長野線川西駅下車徒歩8分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
和 歌 山 三 幸 柳 会	22日(土) 12時30分開場 しっかり・相手・アイデア	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日) 14時締切 ぶどう・顔・涙・ママ	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日) 13時開場 八百長・カーナビ・幸せか	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪
南 大 阪 川 柳 会	24日(月) 18時開場 涼しい・洪水・ノー・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	24日(月) 14時締切 間・かばう・避ける	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	24日(月) 19時30分締切 嘘・らいばる・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	28日(金) 9時開場 芒・蛸・写真・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
岸 和 田 川 柳 会	29日(土) 13時30分締切 受け売り・撫でる・不気味 ブランコ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土) 13時開場 半端・カット・抜ける 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 せっかち・面映い・物怪	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	6 日(木) 13時開場 棲む・嵐・シンプル	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 さ か い	8 日(土) 13時から 調子・シンプル 折句(シカゴ)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	8 日(土) 14時締切 がっかり・芸・普通	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土) 13時45分締切 いたずら・車・工夫・のろのろ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織 禮子
川 柳 塔 打 吹	8 日(土) 13時締切 味・長い・染める	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	9 日(日) 13時30分締切 天女・心・誓う・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
西宮北口 川 柳 会	10 日(月) 14時締切 自分・狡い・のぼほん・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	11 日(火) 14時締切 円満・メモリー・わくわく 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火) 13時30分締切 裏・開く・とんとん	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	14 日(金) 14時締切 遠い・底・宝石・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川 柳 塔 みちのく	15 日(土) 17時締切 海・ぼんやり・薄味	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 ねやがわ	16 日(土) 14時締切 糸口・しゃべる・大胆・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 塔 わかやま 吟 社	休 会	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫

柳界展望

★第13回生駒市民川柳大会は7月15日(日)、生駒市芸術会館で開催。同人の成績は次の通り。

生駒市議会議員賞

人間が好きでいっぱい泣き笑う 大内 朝子

★第6回松江市川柳大会の同人天位次の通り。

短命を知らぬ砂像の面構 福西 茶子

悲しみを溜めてマリモになつていく

抱き締めた人の形が残る腕 新家 完司

★第15回鳥取県川柳文芸大会は7月8日(日)、新日本海新聞ホールで開催。

同人天位次の通り。

真似を真似したニッポンの深い闇

鈴木 公弘

粘るまで練つて叩いてハンバーグ

中宇地秀四

ネジいつこなくても私よく動く 河内 月子

どしゃぶりになつて諦めやつとつく

両川 無限

少年に翼をくれたのはマンガ 両川 無限

総合成績

優勝 新家完司。準優勝 両川無限、③鈴木公弘

④倉益一瑤⑦石谷美恵子

★鳥取県川柳文芸大賞・文芸賞受賞者

原子炉の中で神様あえていける 中村 金祥

自己主張どこに捨てたら丸くなる

大前 安子

★大山滝句座会報150号&「大山滝(3)」発刊記念誌

上大会には、321名の投句者があった。同人天位。

無印になつて大きな輪に入る 徳田ひろこ

腹筋か木綿豆腐か押しこめる 石橋 芳山

★第30回夜市川柳大会は7月31日(火)、堺総合福祉会館で開催。同人天位。

バラ届く微かな毒の匂いさせ 倉益 一瑤

素直になれば鳩尾だつて軽くなる

政岡未延子

補助輪をはずすと翔が生えてきた

山岡富美子

半分っこしてもあんの多いほう

古久保和子

ひと言のハイで私も火の中に 三島 淑丘

おもしろい今が百年ほどほしい 新家 完司

★第9回大野風流賞・優秀賞に三宅保州氏(理事・海南市)

御法度の直訴は聞くに値する 他2句

☆北野哲男氏(理事・三田市)は七月一日、三田市さつき賞(文化功労賞)を受賞。

☆西出楓楽理事長は、川柳宮城野社(仙台市)の

宮城野賞の選に当った。☆小島蘭幸主幹、西出楓楽理事長は8月6日、番傘本社水府忌句会に出席。

▽寄贈図書△

◇田口麦彦「川柳入門はじめのはじめ」B6判224頁、序文・田辺聖子、飯塚書店一三〇〇円＋税。

▽お詫びして訂正△

▼8月号P1下段18行目、104頁↓102頁。P86中段29行目、我を少しうな

なせ想い聴いてやるう、問診表嘘を書きたい酒量欄↓作者は市坪武臣。P117上段19行目、重ね着に本音隠して踏んでいる↓

跳んでいる。

▽新誌友紹介△

藤井寺市 肥山 一文

弘前市 肥後和香子

青森市 齊藤 岳

紹介者

守田 啓子

松江市

米田 幸代

紹介者 松本千恵子

松江市 河西 草庵

紹介者 松本千恵子

松江市 寺津とも子

紹介者 松本千恵子

松江市 松本千恵子

大分市 藤原千恵子

伊達 郁夫

江島谷勝弘

足立つな

堀 正和

高槻市 原 洋志

紹介者 杉本 義昭

箕面市 村田 恵子

紹介者 古今堂焦子

尾道市 大本 和子

八尾市 田中 明美

常任理事会会 8月7日(火)

①第18回川柳塔まつり関連事項②新年度役員、新

常任理事、新理事③高野山合祀祭(11月10日)関

連④定例確認事項⑤各部報告事項⑥第2回春の誌上大会関連⑦その他

主幹・理事長の選任について

川柳塔誌平成24年6月号にて社告案内いたしました主幹・理事長の選任につき7月1日から10日までに川柳塔社事務所に届きました立候補届は下記の通り各々1名にとどまりました。よって「主幹・理事長の選任に関する規則」により下記立候補者がそのまま再任されました事を証します。

主幹立候補者 小 島 蘭 幸

理事長立候補者 西 出 楓 楽

平成24年7月19日

立会人

会計監査 藤 村 亜 成

会計監査 西 村 哲 夫

残暑お見舞い申し上げます

夏バテに早い気遣い希いたい

2012年 晩 夏

我々“川柳塔鹿野みか月”も第32回目の結成記念大会を11月25日(日)に開催の予定です。

皆様のご支援を心からお待ち申しております。

川柳塔鹿野みか月

事務処 鳥取市鹿野町1279 中原 諷 人 方

〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

島根県川柳連盟 10周年記念川柳大会

と き 9月30日(日) 10時開場
ところ バルメイト出雲(出雲市駅前)

兼 題 各題2句 11時締切

「傘」	井塚	たけし	選
「万」	長谷川	博子	選
「柱」	渡辺	康乃	選
「上」	濱谷	ひろし	選
「差」	奥田	勝子	選
「金」	竹治	ちかし	選

(事前投句)

「土」 金築 雨学 選

会 費 1500円(昼食・大会誌)

欠席投句 1000円(切手不可)

投句締切 9月10日(月) 必着

投 句 先 〒693-0013 出雲市荻野町363
柳楽たえこ宛

第84回 奈良県川柳大会

と き 10月28日(日) 11時30分開場

ところ 奈良県文化会館 小ホール
(奈良市登大路町・バス「県庁前」)

宿 題 各題2句 13時締切

「糊」	土田	欣之	選
「押す」	萩原	三四郎	選
「立場」	今井	一竿	選
「きっかけ」	大内	朝子	選
「濁る」	池	森子	選
「魚」	阪本	高士	選
「うろうろ」	大楠	紀子	選

参加費 1500円

欠席投句の方は定額小為替1000円
同封の上、下記へ10月20日必着。

〒630-8014 奈良市四条大路1-4-52-401

山田 順啓

主 催 奈良県川柳連盟

第62回 岸和田市民川柳大会

日 時 10月21日(日) 12時開場

会 場 岸和田市立福祉総合センター

会 費 2000円(軽食・参加賞・大会誌呈)

事前投句

「シグナル」 藤原 昭 謝選
(締切日 9月30日必着)

兼 題 (各題2句) 締切 13時

「ほのほの」	大堀	正明	選
「予感」	柿花	和夫	選
「気付く」	川上	大輪	選
「祭り」	古今堂	蕉子	選
「拾う」	鈴木	いさお	選

投句先 〒596-0076

岸和田市野田町2-8-27

雪本 珠子

主 催 岸和田川柳会

第64回 西日本川柳大会

日 時 10月21日(日) 11時締切

会 場 久米南町文化センター

参加費 2000円(軽食・記念品・大会誌呈)

兼 題 各題2句

「肩書」	池上	英之	選
「軽い」	石原	美光	選
「器」	畑	佳余子	選
「坂」	西川	けんじ	選
「箸」	大森	昭恵	選
「神」	新家	完司	選
「きれい」	山本	美枝	選

問い合わせ先 弓削川柳社

(TEL 0867-28-3540)

〒709-3614

岡山県久米郡久米南町下弓削446-2

編集後記

★人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑 薫風

★新聞紙上に毎日登場する言葉に、原発の再稼働がある。「稼働」を私は「稼動」と憶えていたが広辞苑には「稼働・稼動」どちらもあり、大辞林、日本国語大辞典とともに「稼働」のみ。新聞・テレビは見たところ「稼働」のようだ。

★同人・誌友の方の作品も「再稼働」「再稼動」と分かれている。気になって他誌や雑誌を読む時極力注意している。講談社の「本」の7月号の酒井順子氏のエッセイは「再稼働」であった。統一した方が良いという意見もあるが、私は文字や言葉は個人の歴史を反映、世代や年齢によって異なる

と認識しており、当面は入江選手の母校だ。

統一しないことをご了承下さい。

★小池正博さんのブログ「週刊時評」に紹介された倉阪鬼一郎著「怖い俳句」(幻冬舎新書)を読む。恐ろしい俳句として芭蕉の「稲づまやかほのところ」が薄の穂「や蕪村の」狐火や「鶺鴒に雨のたまる夜」などに交じって「首をもちあげると生きていた女」(時実新子)や「手洗いを右に曲がって鬼伝

説」(小池正博)の川柳も。首筋をひやりと撫でられたような気がする、残暑の寝苦しい夜にお勧めの一冊。

★川柳塔の本社事務所の道路を隔てて、お向かいは大阪市立天王寺小学校である。塀に「祝・入江陵介選手」の幕が張り巡らされている。ロンドン五輪で大活躍した水泳の入江選手の母校だ。

ひとこと

6月号の表紙絵を見て

のどかさど濃厚さの感じられる素敵な表紙絵。何時かどこかで見た風景と懐かしさが、胸をよぎった。そうそう札幌のポプラ並木を思いだした。父の転勤で広い北海道で落ち着かない子供時代を過ごした私にも、ちよつと立ち止まることもあったようである。

今は洞爺町になつてゐるが昔、虻田村と呼ばれた所に七年近く住んだことがある。札幌の円山に母

の兄が住んでいて度々札幌には出かけ、時計台や植物園にも寄り、市内の賑やかさに心を奪われた。しかし今でも心に深く残っているのは、北大のポプラ並木だ。青空をやさしく突くように一本の道を挟み、元氣よく緑を繁らせていたポプラ。

夏にはやさしい木蔭を作つて心を和ませてくれたポプラ。

子供の目には、果てしなく地平線の向こうまで続いているように思つたものである。(岩崎 和子)

★五輪と高校野球の熱気

に包まれた八月も終る。川柳塔も同じように路郎も機会があれば交流をし流れる雲の佇まいに、ふさんとご存じの同人も少なくなつてゐる。幸いに□ときおり編集長からこ暑はまだ厳しい。体調を調整して10月8日(祝)の塔まつりに臨みたい。(朱)

□「番傘」7月号編集手帳に

「生前の水府さんをご存じの方も少なくなつた。8月号から昭和四年番傘65年記念「岸本水府川柳句集」ベースに長期連載を開始する」という。ものがあつた。これから川柳塔も同じように路郎も機会があれば交流をし流れる雲の佇まいに、ふさんとご存じの同人も少なくなつてゐる。幸いに□ときおり編集長からこ暑はまだ厳しい。体調を調整して10月8日(祝)の塔まつりに臨みたい。(朱)

□七月路郎忌本社句会

の普及と語ることが求められてゐる。私たちが読本を編む「であつた。辞書を編む」であつた。辞書づくりを奮闘する物語である。辞書づくりのジミさ大変さがありがたさを

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号) 地名

市都
道府 姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「組む」(9月15日締切)

11月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B

A

B

A

地名

市都
道府
姓
雅号

地名

市都
道府
姓
雅号

切らないで下さい

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		
	年 年 月 月 から から 一年 半年 9800円 5000円 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社(電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (組む) (2句)
一路集 (3句)

小島蘭幸選
西出楓選
新家完司選
森山盛桜共選
奥田みつ子選

村上直樹選
山田葉子選
森松まつお選
「きびきび」
「週末」
「コーヒー」 (3句) 鈴木公弘担当

12月号
檸檬抄「ガード」
一路集「閉じる」「けじめ」
「しんしん」
初歩教室「隠れる」

本社9月句会

とき 9月7日(金) 13時開場・14時締切
ー開場時間、締切時間を変更しています。ー注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「二茶と川柳」
席題 「」
兼題 「要」
「浪費」
「ドキドキ」
「髪」
「集う」

会費 10000円
投句料 5000円 (各題2句以内) (切手可)

小島蘭幸選
矢沢和女選
川端一歩選
太田扶美代選
山田耕治選
松原寿子選
太田昭選

本社10月句会は第18回川柳塔まつりとして、10月8日(月)に開催します。
(表紙裏を参照して下さい。)

第31年度 夜市川柳募集

第4回「知る」高瀬霜石選
ハガキに3句 9月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇一二年(平成二十四年)九月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
ジを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

第36回 鳥取県川柳大会

とき 10月14日(日) 午前10時開場
ところ さざんか会館(鳥取市役所駅南庁舎隣)
5階 大会議室

鳥取市富安2-104-2

TEL 0857(29) 7151

宿題と選者(各題2句・11時45分締切)

- | | |
|--------|---------|
| 『器量』 | 野口節子 選 |
| 『植える』 | 熱田熊四郎 選 |
| 『奥』 | 長谷川博子 選 |
| 『儂い』 | 木本朱夏 選 |
| 『びつたり』 | 新家完司 選 |
| 『隠す』 | 恒弘山 選 |
| 『正面』 | 小島蘭幸 選 |

会費 2000円(大会誌・昼食)

欠席投句 1000円(9月20日締切・小為替)

※投句先 〒689-0216 鳥取市気高町宝木1561-1113

福西 茶子方

第36回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0857(82) 1314

主催 鳥取県川柳作家協会